

新史料奥平壱岐「適薩俗記」と薩州商社(2)

— 福沢諭吉と奥平壱岐、^{コンペニー}〈商社の時代〉の実相 —

長谷川 洋 史

目 次

1. 序言
2. 福沢諭吉の会社制度紹介、^{コンペニー}〈商社の時代〉の先駆
3. 福沢諭吉と奥平壱岐(1) — 安政元年 (1854) 長崎蘭学修業から文久2年 (1862) 商社紹介まで —
(以上第40巻第2号)
4. 福沢諭吉と奥平壱岐(2) — 文久3年 (1863) I 「亥年の建白事件」 —
(以上本号)
5. 福沢諭吉と奥平壱岐(3) — 文久3年 (1863) II 〈恐怖の時代〉 —
6. 福沢諭吉と奥平壱岐(4) — 元治2年・慶応元年 (1865) から慶応2年 (1866)、「適薩俗記」起稿まで —
7. 慶応3年 (1867)、「適薩俗記」の中の薩州商社、奥平壱岐と石河確太郎
8. 終りに

4. 福沢諭吉と奥平壱岐(2)

— 文久3年 (1863) I 「亥年の建白事件」 —

福沢諭吉が渡欧体験を踏まえて『西航記』において商社（会社制度）について先駆的に紹介した翌年、文久3年（1863）、あたかも何かの意図によって、それと途切れることなく連続させられているかのよう、今度は、江戸詰家老であった奥平壱岐が自分の生涯に大きな転換を強いられる事件の渦中に、しかもその事件の主演として、投ぜられることになる。その事件とは、

中津藩のいわゆる「亥年（文久3年）の建白事件」である。この年、下士層を中心とした藩内改革派にして尊王攘夷派（尊攘派）による江戸詰家老奥平壱岐の退役を訴える建白運動が起こり、壱岐は暗殺の標的にまでなる。そうして、遂には壱岐は解任され、その特権的地位から失墜するに至る。「亥年の建白事件」は、中津藩を揺るがす大事件であり、この事件がなければ、おそらく壱岐は、5年後に大坂で石河確太郎と邂逅することもなく、薩州商社取建構想に参画することもなかった。また、後述するように、文久3年は、福沢自身にとってもきわめて大きな意味を持つ年なのである。そうして、まさしく〈商社の時代コンペニー〉も文久3年を前奏にして本格的に始動するのである。

しかし、晩年の回顧録『福翁自伝』で、福沢は、「亥年の建白事件」及びそこでの壱岐のことについてまったく述懐していない。前述したように、『福翁自伝』において、福沢青年が洋学者として世に出る経緯において、壱岐はトリックスターともいうべききわめて重要な役割を担っていた。それだけに、『福翁自伝』での、この事件及び壱岐についてのまったくの沈黙は、奇妙に思える程であるが、福沢と壱岐の複雑な関係をも反映・暗示している。だが、やはり、福沢は、あえて壱岐の名を出さぬ形で、『福翁自伝』脱稿の22年前、『旧藩情』（明治10年〈1877〉）脱稿／旧中津藩の状況について述べたもの）で、それより15年前の「亥年の建白事件」について述べていたのである。そこで、福沢は、「亥年の建白事件」への導入となる、幕末期中津藩の、上士層の凋落傾向と下士層の上昇傾向について、次のようにきめ細かく述べる。

下士（中津藩下等士族）の輩はいは、（幕末期）漸く産を立て、衣食いじの患を免かるゝ者多し。既に衣食を得て寸暇あれば、上士の教育を羨まざるを得ず。……（下士は）子弟を学塾に入れ、或は他国に遊学せしむる者ありて、文武の風儀、俄に面目を改め、又先きの算筆のみ安んぜざる者多し。但し其品行の嚴と風致の正雅とに至ては、未だ昔日の上士に及ばざるもの尠なからずと雖ども、概して之を見れば、品行の上進と云はざるを得ず。之に反して、上士は古より藩中無敵いじしよの好地位しむを占るが為に、漸次に懦弱に陥る

は必然の勢、二、三十年以来（嘉永6年〈1853〉のアメリカ・ペリー艦隊来航前後以来）、酒を飲み宴を開くの風を生じ〔元来飲酒会の事は下士に多くして、上士は都て質朴なりき〕、殊に徳川の末年、諸侯の妻子を放解して国邑に帰へすの令を出したるとき、江戸定府とて、古来、江戸の中津藩邸に住居する藩士も中津に移住し、且此時に天下多事（ペリー艦隊来航を契機にした西洋列強の急激な日本接近が引き起こす国内の大動揺による）にして、藩地の士族も頻りに都會の地に往来して、その風俗に慣れ、其物品を携へて帰り、中津へ移住する江戸の定府藩士は、妻子と共に大都會の軽便流を田舎藩地の中心に排列（配列）するの勢なれば、既已に惰弱なる田舎の士族は、恰も之に眩惑して、益華美輕薄の風に移り、凡そ中津にて酒席遊興の盛なる、古来、特に此時を以て最とす。故に中津の上等士族は、天下多事の為に士氣を興奮するには非ずして、却て之が為に其懶惰不行儀の風を進めたる者と云ふ可し⁽¹⁾。

福沢の視線の焦点は、下剋上ともいえる下士と上士の間の藩権力闘争（箱庭のような中津藩内の権力闘争などは福沢の理念にとって何の意味も持たない）に対してではなく、福沢が重要にしていた、西洋流の「自主独立」「文明独立の大儀」へと展開していくべき「無形の一物」「文明の精神」の酵母となる「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」と「質朴」をよりよく体現していたはずの「三河武士」の典型たる中津藩上士層（本稿(1)注(25)参照）が幕末期、「漸次」に「懶惰不行儀の風」へと衰弱していく軌跡に絞られている。福沢は、上士層の「懶惰不行儀の風」と下士層の「品行の上進」という対照性の延長に「亥年の建白事件」をとらえているのである。かといって、福沢は、「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」は、上士層から下士層に移行したとは評価してもいない。「概して之を見れば、（下士の）品行の上進と云はざるを得ず」ではあるが、「但し其品行の嚴と風致の正雅とに至ては、未だ昔日の上士に及ばざるもの尠なからず」ということで、それは、あくまで「上進」なのである。

「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」に関する上士層の「惰弱」

と下士層の「上進」という真の意味での下剋上の現象の顕在化は、特に嘉永6年(1853)のアメリカ・ペリー艦隊の来航を契機にした国内既成秩序(封建的秩序)の動揺・混乱から拡大していく。武家がその存在意義を発揮する戦乱がない200年以上にわたる鎖国時代において、次第に「質朴」を失い都市化していく上士層は、「瘠我慢の説」=「士族に固有する品行の美」の緊張感も次第に鈍化させていき、逆にその鎖国時代の経済的安定によって、生活に余裕を得てきた下士層は、次第に上士に習って「文武の風儀」の修得と「瘠我慢の説」=「士族に固有する品行の美」への洗練に貪欲に努めるようになる。そこに、幕末期、近代西洋による外圧の強力な衝撃が国内既成秩序(封建的秩序)を大きく揺さぶったとき、上士層は、その状況と対決する術も気力もなく、ただ都市化した既存の己の生活のみを守るべく(「瘠我慢の説」=「士族に固有する品行の美」もすっかり色褪せた因循姑息さ)、ますます「懶惰不行儀の風」に惑溺することしかできないという致命的弱点を露呈した。福沢は、「上進」の下士層が、上士層のその弱点を衝いたのが、「亥年の建白事件」であるとする。「(下士は)子弟を学塾に入れ、或は他国に遊学せしむる者ありて」の典型が福沢自身(長崎遊学・適塾入門)であった。下士子弟である福沢は、西洋外圧による既成秩序混乱が惹起した契機によって、生まれて初めて中津を出て、長崎遊学・緒方適塾修学で貪欲に洋学・蘭学(6年後に英学に転換)を吸収して、同時に「瘠我慢の説」=「士族に固有する品行の美」を身に帯びた、洋学者になっている。長崎遊学時代、福沢は、「私の目的は原書を読むに在て……一意専心原書を学ぶ。……所が奥平壺岐は、お坊さん(お坊ちゃん)、貴公子だから、緻密な原書など読める訳ではない」と壺岐を見下していた(本稿(1)参照)。福沢の中で、壺岐との関係においては、すでに内なる下剋上は始まっていたのである。『旧藩情』で福沢は、上の引用文に続けて、「亥年の建白事件」について、次のように述べている。

右の如く、上士の気風(「瘠我慢の説」=「士族に固有する品行の美」と「質朴」の気風)は少しく退却の痕を顕はし、下士の力は漸く進歩の路

に在り。一方に^{きん}豊の乗ず可きものあれば、他の一方に於て之を黙せざるも亦自然の勢、これを如何ともす可らず。此時に、下士の壮年にして非役なる者〔全く非役には非らざれども、藩政の要路に関らざる者なり〕数十名、^{ひそか}窃に相議して、当時執権の家老を害せんとの事を企てたることあり。中津藩に於ては古来未曾有の大事件、若し此事をして三十年の前（1830年代・天保年間）にあらしめなば、即日^{きん}に其党与を捕縛して遺類（残党）なきは疑を容れざる所なれども、如何せん、此時の時勢に於て之を抑制すること能はず、遂に姑息の策に出で、其執政を^{しりぞ}黜けて一時の人心を慰めたり。二百五十余年、一定不変と名けたる権力に平均を失ひ、其事實に^{きがい}顕はれたるものは、此度の事件を以て始とす。〔事は文久三年癸亥の年に在り〕^②

ここでいう「当時執権の家老」「其執政」とは壱岐のことである（福沢はここではあえて「奥平壱岐」と名指しにしていない）。「二百五十余年、一定不変と名けたる権力に平均を失ひ」との福沢の謂は、「上士の気風（「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」と「質朴」の気風）」が「少しく退却の痕を顕はし」て「豊の乗ず可きもの」が露出して、「下士の力は漸く進歩の路に在り」との下士層がその「豊の乗ず」る下剋上の傾向は、中津藩だけではなく、幕府（勝安芳や永井尚志や岩瀬忠震など無役の下級幕臣が幕政の中枢に参画する）や諸藩においても顕在化していくことを示唆できる射程を持っている。福沢は、「二百五十余年、一定不変と名けたる権力に平均を失ひ」ということを、「其事實に顕はれたるもの」は「此度の事件（亥年の建白事件）を以て始とす」と、「亥年の建白事件」を、幕末期の普遍的特質をよく表したのものとして評しているのである。それは、また、「若し此事（「亥年の建白事件」）をして三十年の前にあらしめなば、即日^{きん}に其党与を捕縛して遺類（残党）なきは疑を容れざる所なれども」というように、天保期までの封建的秩序が盤石であった頃にはあり得なかった秩序の大きな綻びが、もはや個人の内面においてだけではなく、組織規模で露見するようになったことの意味においての「亥年の建白事件」への福沢の評でもあった。福沢は、「人にこそ云はね、私（福沢）の心では眼中藩（中津藩）なしと斯う^こ安心を^{あんじん}

極めて居りました」³⁾というように、中津藩内部の権力闘争自体に意義をみてはいないが、「亥年の建白事件」は、紛う方なく、「中津藩に於ては古来未曾有の大事件」であり、かつ幕末期、支配的秩序の転換点の特質を先駆的に表した普遍的意義を持つものであることを認めるものであり、また後述するように、多くは沈黙せざるをえなくなっているが、福沢個人にとって極めて重要な意味（壱岐との関係も含めて）を持つものでもあった。福沢にとって、「亥年の建白事件」は深奥を揺るがす衝撃であったのである。さらにいえば、福沢にとって、文久年間（1861～1864）とりわけ「亥年の建白事件」が象徴する文久3年は、次回以降の本稿で述べるようにきわめて大きなしこりとなる時期〈恐怖の時代〉となるのである（前記したごとく、この時期を前奏にして会社制度導入・^{コンベン}〈商社の時代〉は本格的に始まるのである）。

そうして、この事件の中心に壱岐がいたのであるが（この事件の主人公は壱岐であったのである）、先に触れたように、「当時執権の家老」「其執政」と壱岐のことを素っ気なくさらりと表している。あえて、壱岐の名を出さずに、さらりと無感情に「当時執権の家老」「其執政」と表記したことは、明治10年段階では、壱岐がまだ存命であること（壱岐の死去は明治17年〈1884〉⁴⁾への憚りもあるであろうが、『福翁自伝』のまったくの沈黙と重ねると、福沢と壱岐の複雑な関係が暗示されているのである。このことは、後述する。

以上のように、福沢によれば、「亥年の建白事件」は、「下士の壮年にして非役なる者……数十名、窃に相議して、当時執権の家老を害せんとの事を企てたること」というように、江戸詰家老奥平壱岐に対する単なる建白糾弾ではなく壱岐暗殺計画を含むものであり、そうしてこの事件の結末は、「遂に姑息の策に出で、其執政を黜けて一時の人心を慰めたり」というように、壱岐が藩の「姑息の策」によって退役させられることによって落着かせたものであった。

次に、さらに、「亥年の建白事件」について、廣池千九郎『中津歴史』（明治24〈1981〉）と黒屋直房『中津藩史』（昭和15年〈1940〉）から、さらに詳

細にみていきたい。後述するように両者の記述はともに、福沢及び『旧藩情』から深く影響されている（廣池『中津歴史』と黒屋直房『中津藩史』は、「亥年の建白事件」に関する記述に際して、ともに『旧藩情』の「亥年の建白事件」に関する箇所をほとんどそのまま長く引用している。つまり両者での『旧藩情』からの引用箇所はほとんど同一なのである）。

廣池『中津歴史』での、「亥年の建白事件」についての記述は、先の福沢『旧藩情』での「亥年の建白事件」についての記述順序をそっくり倣い、「亥年の建白事件」の導入となる事柄として、次のように、幕末期の中津藩の風俗の都会化・「質朴」の退化についてから始めている。

又市中（中津）には宇治茶を商ふ店もなく、之は安政の比^{ころ}より始まりしものにて、料理屋も京町博多町に二軒ありて、其内を探れば僅に十畳敷の座敷一と間あるのみ、床屋も二戸にして、女の髮結の如きは一人もなく、只大坂辺に婦人髮結の手にて髪を結ふ由と風聞あるのみ也。……又娘は「わり大故」「くま高」等の結び方流行して、武家の娘間には島田髷〔寛文比より始まる〕流行す。「いてふ髷」は文久以後に至りて町家より武家に及び、後大に行はるゝに至れども……風呂屋も二軒なりしか。嘉永二年四月より市中五戸に限らる。之れ（質朴の風の）只其一班を挙ぐるのみ、其他推して知るべし。**然れども斯の如き質朴の風も、遂に文久以降元治慶応年間を以て殆一変して、**家屋の建築も二階造瓦葺に改まり、毎年或は三五年毎に頻りに発令する処の儉約条目あるに拘はらず、漸く絹類唐物の需用を弘め、常食にて米の割合を増し、且料理も高尚に赴き、白砂糖上菓子をも贈遺饗膳に用事ること夥しく、能狂言歌舞浄瑠璃も其嗜好漸く変して、古調温雅のものよりも寧ろ新奇花美なる者のを好むに至り、盆踊にも「大津江」の如き粹婉^{すいえん}なる踊、上方より渡り来り。芸妓酌婦の萌芽も既に此時にありて、其風俗の変遷枚挙^{いとう}に遑なしとす⁶⁾。

福沢『旧藩情』で簡潔に記した、上士層が「質朴」を後退させ「華美軽薄」へと移っていく風俗の様子を、ここでは、上士層に限らず中津藩全般の「質朴」な風俗の「一変」としてより詳細に描いている相違はあるが、著者

法学博士廣池千九郎（1866慶応2～1938昭和13／麗沢大学創設者）は豊前国
下毛郡鶴居村（現大分県中津市大字永添）出身で、明治12（1879）年に慶応
義塾の姉妹校たる中津市学校で学んだこともあり、福沢とはその思想的意図
にかなりの相違があるにしても、福沢『旧藩情』を参考にしていることは確
かである（先述したように『中津歴史』での「亥年の建白事件」の箇所では
『旧藩情』を長く引用している）。福沢『旧藩情』での意識的・無意識的な
文久年間特に文久3年への大きなこだわりは、伝播して、ここでも「然れど
も斯の如き質朴の風も、遂に文久以降元治慶応年間を以て殆一変して」とい
う表記に反映されている。廣池『中津歴史』は、上の引用箇所につき、「亥
年の建白事件」について次のように記している。

此月（文久3年4月）、江戸家老奥平壹岐（壹岐）〔十学と称す、智謀深
く和漢洋の学に通じ兼て書画を善くし、本藩砲術の師範方をも勤めたるこ
とあり〕の職を停め、禄二百石を削り、又水島六兵衛、岡本小弥太、浅沼
惣之助、生井耕蔵、柳忠右衛門、神田関蔵、守谷百助、武田喜太郎、城所
左太郎、水嶋長之助、松本勇蔵、甲楽城喜八、中村橋次郎、中西文三郎、
福田熊造十五人の禄、各二石を削り、勤役のものは更に之を免す。始嘉永
以来、天下日に危急に迫り、各藩皆競うて藩政を改革するの時に際し、本
藩独因循して依然旧弊を改めず、上下只恬然^{ひとり}偷安^{とうあん}を事とし、驕奢横傲一藩
風をなす。六兵衛等大に之を慨き、此歳（文久3年）正月、同志竊^{ひそか}に相会
して議して曰く、「本藩今日の形勢偷安^{こうしゅう}苟且、上は以て皇室幕府の為に不
忠となり、下は以て藩主父子の愚を天下に示すに似たり。速に藩政を変革
し且士気を振起して、以て緩急の備、永世の計をなさざるべからず。然り
而して、本藩、今日、此因循を致す所以のものは、実に江戸家老奥平壹岐
佞悪姦横の邪心もて、上下東西を離隔するに因らずんばならず。故に革命
の初着は先此佞臣を除くに若かず」と（「」は長谷川が付した）。則、三
月十五日を以て、水島・岡本・浅沼の三人、非役家老奥平函書に面して書
（建白書）を呈す⁶⁹。

福沢『旧藩情』と大きく違うのは、ここでは、「亥年の建白事件」につい

て、「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」に関しての上士層の「退却」と下士層の「進歩」の相克の観点が明確に出されていなく（下士層と上士層の相克関係の観点がほとんどない）、嘉永6年のアメリカ・ペリー艦隊来航以来の対外危機に対処せずに「本藩独因循して依然旧弊を改めず、上下只恬然偷安を事とし、驕奢横倣一藩風をなす」というように、中津藩全般の因循たる在り方（その中枢に在るのが壹岐とする）に対する心ある藩士（『中津歴史』では特に下士と上士の区別をした記述をしていない）の憤慨と建白として描かれていることである。

しかしながら、『中津歴史』では、「亥年の建白事件」の内容・顛末については、『旧藩情』より遥かに詳細が記されている。『旧藩情』でいう「下士の壯年にして非役なる者〔全く非役には非らざれども、藩政の要路に関らざる者なり〕数十名」のリーダー格は水島六兵衛のら15名であり、水島ら下士は、在中津の非役家老奥平図書に壹岐糾弾の建白書を提出したのである。好都合にも、黒屋『中津藩史』では、「近世の大身衆（文久三年）」として、問題の文久3年段階での、壹岐を含めた中津藩門閥「七族五老」（本稿(1)注25参照）の大身衆11家の構成について、「**奥平図書 本姓阿智波雨山家、二千六百石。**奥平與四郎 夏山家、二千三百石。生田四郎兵衛しうだ 今所在不明、千八百石。夏目勘解由 今所在不明、八百石。奥平求馬 本姓桑名・千五百石。山崎直衛 山崎家支流、勝宗の三男家、九百石。奥平市内 菅沼家支流、定次の三男家、九百石。**奥平壹岐 中金家支流、今所在不明、定次の二男家、七百石。**逸見志摩 今所在不明、八百石。奥平兵庫 雨山家支流、今所在不明、定次二男父の隠居相続家・七百石。桑名登 桑名家支流、勝乗二男父の隠居相続家・八百石」^⑥と記している（「今所在不明」の文字にその後の壹岐の命運の深い凋落振りを如実に示しているが、黒屋『中津藩史』が刊行された昭和15年頃は中金家は東京市ヶ谷に在住し現在に至っている）。これによると、水島らが面談し建白書を提出した奥平図書は、無役家老ではあっても、禄高格では大身衆の最上級にある。壹岐は、禄高格では大身衆の中級ではあるが、江戸詰家老として藩実権中枢を掌握していたのである。また、「亥年の建白

事件」に関する処分で、糾弾された壺岐は、役職退任直後は、家禄200石削減されたものの、形式的にはまだ500石の禄を保持しているのである。そうして、糾弾した側、水島ら15名の下士は、死罪など厳罰もなく、家禄2石削減と役職罷免の微罪で済んでいる。福沢『旧藩情』で「若し此事（「亥年の建白事件」）をして三十年の前にあらしめなば、即日にも其党与を捕縛して遺類（残党）なきは疑を容れざる所なれども、如何せん、此時の時勢に於て之を抑制すること能はず」というように、下士の門閥系上士への糾弾という封建的名分の秩序に対する公然たる紊乱に対して、上士層は、昔日では当然であったはずの惨い徹底的弾圧を加えることをしなかったのである。このことについては、上士層の「退却」と下士層の「上進」という「時勢」だけではなく、この「時勢」のことに、上士層内においても壺岐への反発が大きくあり、反発する上士の部分では水島ら壺岐糾弾の下士を隠然と支持していた（あるいは壺岐糾弾を隠然と指嗾していた）であろうことを重ねるべきである。上士層の壺岐（及び壺岐派）への反発とは、「我儘」で「驕奢横倣」という壺岐の個人的性格の弱点にともなう問題以外では、幼年の新藩主擁立を盾にしておこなおうとしているとする、その洋学的姿勢と藩内洋化政策に対する拒否反応と反発である。このことの詳細は後述する。

もうひとつ、廣池『中津歴史』での記述内容が福沢『旧藩情』と大きく違うことは、「江戸家老奥平壹岐佞悪姦横の邪心」というように壺岐の「佞臣」さが強調されていることである。『旧藩情』では、「当時執権の家老」「其執政」（壺岐）に対して「佞悪姦横の邪心」の「佞臣」とする類いの糾弾的謂を一言ともしていない。むしろ、壺岐は、「（中津藩は）遂に姑息の策に出で、其執政を黜けて一時の人心を慰めたり」という、藩の因循たる「姑息の策」の生け贄になったと理解しているのである。

廣池『中津歴史』では、水島ら下士達が家老奥平図書に提出した建白書の一部（しかし建白書の核心となる部分）が掲載されている。長大なものであるが、現在、建白書原本が確認されていないので貴重であるので、その全部を次ぎに引用する。

〔前略〕然る処、右一条に於ては、幕府の御大事、容易ならざる儀と存じ奉り候所、御家に於ては、長篠御籠城以来（5代奥平武兵衛定次が徳川家康から武勲の賞詞を拝戴して以来）、二百年來、幕府の御厚恩蒙りなされ候儀は申す迄も之無く、殊に帝鑑^{ていかん}の間^ま（江戸城内大名詰所のひとつで、溜^{なまり}の間に次ぎ、譜代が詰めた）御取締の御職使も在らせ候得ば、先年以來譜代諸侯の魁首として公武御合体・尊王攘夷の御周旋御座有^{たく}り度存じ奉り候処、其砌より右等の儀、絶て承知奉らず、薩長等有志の諸侯方御周旋之有^{たく}り候を御傍觀遊ばされ候儀、恐れ乍ら、御家の御恥辱、幕府に對しなされ候ても、御不忠には之有^{まじき}る間敷哉。私共、慷慨の至に存じ奉り候。是以て、君公（藩主奥平昌服）御一人の御力にて如何共遊ばされるべき様、之無きに付、上下挙げて尽力在るべきは至当の理に御座候所、一藩の諸士、累代の御高恩蒙り乍ら、一人も唱、義奮発して、君公佐補奉^{たすく}り候者之無きは、流涕悲歎の至に存じ奉り候。依て去る午歳（安政5年〈1858〉）この年、修好通商条約締結で事実上鎖国は終わりその反動で尊攘反幕運動は激化）以来、私共数輩、申合せ、言上仕るべきと存じ奉り候得共、公務の間柄も存ぜず、道路（世の中）の浮説を信じ、率突の暴論相唱へ、一藩を動揺致らんとし候様、思召され候ては、深く以て恐入り奉り候間、今暫く形勢伺奉り候上の儀と存じ奉り居り候所、恐乍ら、御家の御政道も同様、儉安姑息^{とうあん}の風俗に相流れ、毎度の御変革も只出納の利潤に基き、武備御充実は御声聞^{せいぶん}のみにて、新古混乱致し、人心一定致し難く、万一、御急変の節は、何を以て、国家佐補奉^{たすく}る哉。殊に壹岐（壹岐）殿御役の後は、偏頗私論の義を以て執政其他正義の御方は御退役等に御取計、佞奸を以て御昵近の士を深く御結び、御一人、江府に御詰、我意の御取計成され度御身体^{ママ}（心^{しん}体^{てい}）より、御時節をも顧られず、御定府に相成り、種々奸曲を以て君公の御英明を欺き奉り、却て、万事御言行、御行届かざるの様に申し成し、天朝・幕府は勿論、天下の御人に対し成され、御暗君の御名を負らせ奉り、殊に当今の御時勢、定府の士、多く御座候ては、東西、政府（中津藩政府）、離間致し、御為宜しからざる所より、当地（中津）出て、毎々御議論之有

り、御示談及ぼされ候由の所、当節速に御越と申し候ては、御入稼莫太の事にて、中々以て御手に及びなされず、其上、早急引取候様にては、公辺の御首尾宜しからざるの虚唱を相唱へ、且武備御充実は当今の御急務に候得ば、格別御世話成され、君公をも進み奉り、速に御行届、藩屏の御任相立て遊ばされ候様、御取計之有るべき所、是等の儀も捨置き、三都の間毎々御変事等、之有る節は、早々御申越し成されるべき所、その儀無く、一時偷安の情態より却て平穩の様に申成し、人心を疑惑致らせ、御家の御損失をも顧られざる御心体しんてい、実に以て相済し難き義と存じ奉り候。尚又此度、伊達儀三郎様御事、弥々御養君御治定いよいよ じじょう（決定）に相成り候由、承知奉り候。此儀は衆議御一定の旨と存じ奉り候得共、道路（世間）の浮説は、御内実は君公御隠居の思召しも在らせられ候哉に相唱候。万一左様の御事柄之有り候ては御家の御大事、容易ならざる儀にて、申立て難き事には存じ奉り候得共、是以て奸曲、壹岐殿兼て醸かもし奉り候儀にては之有り間敷哉と恐察奉り候。其故は当時容易ならざる御時勢中、未だ御壮年の御方様、御隠居等仰せ立てられ候ては、幕府は勿論天朝に対され候ても、御不忠に当たらせられ、天下の人に御言訳も之無く、其上壹岐殿へ御伝役仰付けられ候はば、御養君を擁し奉り、御一人、権を専にし、令を国中に下し候御心体、明白顯然に御座候。若し左様の勢に相成り候ては、以ての外御大事にて、踏水の恐、昨今に迫り候義と存じ奉り候。臣子たる者、黙然として之見忍ぶ哉。不忠の御取計方申すべき様、之無く、且昨年、御救武備、御引立の義に付、当政府に於て群議、御一定の上、主税殿・儀左衛門殿、御出坂に相成り、壹岐殿御立合の上、御示談及ぼされ候節も、君公御内命も之有る由を以て当地の建議悉く御攘斥成され、自儘（我儘）の御振舞も之有り候哉に承り候。依て此儘御在役之有り候ては、何程の姦計相巧ぜられ候も計るべからず、尚又、昨年より片岡市右衛門、当地へ帰り罷り候義、御同人（壹岐）の内命を受け、間諜の者に相違、之有る間敷、政府に於て、聊も御油断は相成らざる事と存じ奉り候。右様不正の御方、之有り候ては、党議を相立て、東西の政府御情実貫徹相成らず、万事御不行届の儀も出来

し、居合おりあわざるの基を開き、御家の御安危にも相拘り候義と存じ奉り候処、一藩の人気尚因循致し奮発の場合に至り難くに付、臣子の情態いたずら、徒に傍観仕り居り候に忍びなく、切齒痛憤の余り、軽卒の私共、御政務の儀、彼是議奉り候段は、深く以て恐入り奉り候得共、止むを得ず当地出、一応建議仕るべしと存じ奉り候得共、当政府に於て、前件の次第、御論議も之有るべく候得共、江府儉安の有司へんちゆう貶黜致し御聴達し候迄には至り申さず故、兎角因循に相流れ候義と存じ奉り候間、種々申し論し候得共、時勢の切迫少しも猶予相成るべからずに付、死罪顧ず出府の上、言上仕り候と存じ奉り候得共、尚退しりぞて勤考仕り候得ば、是私共軽卒の取計候仕りても、却て国家の巨害を引出し候様相成り候ては、恐懼の至に存じ奉り候間、御手前様（奥平図書）御出府成し下され候はば、私共一統、御供仕り罷り登り、万事御指図に任せ取計候はば、然るべき哉に議論決定仕り候間、則書面すなわち（建白書）を以て申し上げ候。右様致し立ち候も血氣に任せ不法の暴論相唱候様思召すべく候得共、君臣上下一致仕り、速に武備御充実、君公の御職任にも当たらせられ、御名義相立て、御家の御恥辱に相成らず候様、仕り度志願のみ而已御座候。御手前様にも国家の御為、思召され、御出府の上、速に壹岐殿、御退役、君公始め、上々様方、其他定府の士、御在所ひきうつりへ御引移相成り候様、御取計成し下され度、一同身命こいねが抛ち希奉り候間、臣子の情実、御憐察成し下され、万事宜敷く御計、下されるべく候。此段御内意申し上げ候⁹。

建白書中に在る「執政」「貶黜」「儉安姑息」との語彙と福沢『旧藩情』での「遂に姑息の策に出で、其執政を黜けて」（建白書中頻発して用いられている「儉安姑息」を、福沢『旧藩情』では老壱岐をスケープゴートにして事件の解決を図る、中津藩の「姑息な策」であるというように、皮肉に用いている）とが対応していることからみても、文久3年当時、築地鉄砲洲の中津藩江戸藩邸内に住居して、そこで江戸詰家老壱岐の命によって、洋学塾を主宰していた福沢がこの建白書を読んでいたこと（おそらく建白書を筆写して熟読していた）は明らかである。その上で、『旧藩情』では、建白書に散見し

ている、壹岐を糾弾するおどろおどろしい形容である「偏頗私論」「佞奸」「種々奸曲」「姦計」を一切避けているのである。後述するよに、福沢が建白書での壹岐糾弾に対して、唯一認めているのは壹岐の「自儘（我儘）の御振舞」だけといってよい。この点、廣池『中津歴史』では、逆に「偏頗私論」「佞奸」「種々奸曲」「姦計」をさらに増幅して、「智謀深」い「江戸家老奥平壹岐佞悪姦横の邪心」というように、壹岐の「佞臣」さが一層おどろおどろしく強調されているのである。そのため、廣池『中津歴史』では、水島六兵衛ら忠臣の「正義」「改革党」による、「智謀深」い「佞臣」壹岐の排除要求は、藩内「革命」の魁として、当然であると評価している。しかし、壹岐及び壹岐派も旧来の中津藩政の改革を目指す「改革党」なのである。水島ら下士層が反洋学派・尊攘派としての「改革党」であるならば、壹岐及び壹岐派は、洋学派・開国派としての「改革党」である（本稿注44(45)参照）。そうして、「正義」という主張は主観的で相対的なものに過ぎない。「亥年の建白事件」は、違った方向を志向するふたつの「改革党」の衝突でもあった。

上述の「智謀深」い「佞臣」壹岐観を基に、廣池『中津歴史』では、「尚又此度、伊達儀三郎様御事、弥々御養君御治定に相成り候由……道路（世間）の浮説は、御内実は君公御隠居の思召しも在らせられ候哉に相唱候。万一左様の御事柄之有り候ては御家の御大事、容易ならざる儀にて……是以て奸曲、壹岐殿兼て醸し奉り候儀にては之有り間敷哉と恐察奉り候」との建白書の壹岐糾弾の箇所を基に、次のように記している。

是（「亥年の建白事件」）より前、土岐桑名等の諸大身皆家老職を退き、当時壹岐大に権力を得、^{ひとり}独江戸詰となり、頻に威信を藩中に示し、江府は勿論、本国の藩士をも多く之を籠絡して、己の味方となし、さて巧に計略を廻らし、^{さき}曩に既に伊達儀三郎を養子と定め、而して当時^{たまたま}偶々主侯昌服の酒色に耽るを奇貨として之を廃し、伊達儀三郎を立て将に之に己の女を以て娶はし、大に其間になす処あらんとするの仕組中なりし。されば、水島等の上京を請ふや、江府・京坂間のある処の壹岐党亦大に奮激して、之を^{みち}途に要撃せんとするの勢あり。人心洶々、其動揺、大方ならず。島津氏

(島津祐太郎)の如きも壱岐の為に籠絡せられ居る人なれば、今日の会議に斯く水島等の登京を拒み、大に壱岐の為に尽せり、而れども後、島津氏は登坂して壱岐の奸悪を知るや、奮然、壱岐に迫て、其退職を促したりと云⁽¹⁰⁾。

建白書では、「道路(世間)の浮説」ではと明確に断り、また「万一左様の御事柄之有り候ては」と確固たる根拠で断定はしていなかった、く次代中津藩主として伊達儀三郎(1855安政2～1884明治17/宇和島藩主伊達宗城の三男、慶応3年(1867)に9代中津藩主、最後の中津藩主奥平昌邁^{まさゆき}として就任)を藩主奥平昌服^{まさもと}(1831天保1～1901明治34)の養子に迎える企ては「奸臣」壱岐の逆賊的「奸曲」であるとの「浮説」について、廣池『中津歴史』では、「巧に計略を廻らし、曩に既に伊達儀三郎を養子と定め、而して当時偶々主侯昌服の酒色に耽るを奇貨として之を廃し、伊達儀三郎を立て将に之に己の女を以て娶はし、大に其間になす処あらんとするの仕組中なりし」と、壱岐が計略を巧みに遺憾なく発揮して実施した確固たる事実として記している。しかし、藩主奥平昌服が「当時偶々……酒色に耽る」との状態に陥っていたことや、壱岐がおのれの権力的野望のため、昌服の藩主引退を企み、さらには次代の藩主、伊達儀三郎(奥平昌邁)に自分の娘を嫁する計略を仕掛けたという一連の「奸悪」の事実的裏づけなどないのである。これらは、一連の「浮説」の域を出ないのである。したがって、壱岐派の島津祐太郎が壱岐に家老職「退職」を勧めたことはあったとしても、それが島津が壱岐の「奸悪」を知ったがゆえであるということもまた事実的根拠がない(事実としては、文久3年4月に京都に、將軍警護のため藩兵を率い、藩主奥平昌服とともにいた壱岐が自らの「壱岐党」の配下から引導を渡され退職に追い込まれ、江戸に戻ったということである)。廣池『中津歴史』の記述に従えば、伊達儀三郎養子の件は、「奸臣」壱岐の「奸曲」の極みを表すものであり、壱岐は、稀代の極悪人・大逆臣ということになる。おそらく、廣池が生まれる4前に起きた「亥年の建白事件」での壱岐に関するこの「浮説」は、その後、廣池が少年の頃、明治初期には、中津では虚実こもごも、あたかも真実

のように一層脚色されて語り継がれ広まり、〈巷説〉の「智謀深」き大悪人・「佞臣」壱岐説は伝説化されていたものと理解できる。後述するように、それは、伊達儀三郎からすれば本家筋ともいえる仙台伊達家の伊達騒動における門閥伊達兵部・家老（奉行）原田甲斐が浄瑠璃・歌舞伎での御家狂言「伽羅先代萩」などで御家乗っ取りを謀る悪人のモデルとして説話化されたように、流布していたものと理解できるのである。廣池『中津歴史』の「然れども斯の如き質朴の風も、遂に文久以降元治慶応年間を以て殆ど一変して……能狂言歌舞伎浄瑠璃も其嗜好漸く変して、古調温雅のものよりも寧ろ新奇花美なる者のを好むに至り」との記述は、「古調温雅」と「新奇花美」の相違はあっても、中津藩領内では、「能狂言歌舞伎浄瑠璃」が積年普及している空間であったことを示している。中津藩領内では、「狂言歌舞伎浄瑠璃」の定番、「伽羅先代萩」もかなり普及していて、住民の意識の底に沈潜していたはずである。こうした時代を隔てた伊達繋がりのことと、さらにこのことに重ねて、伊達騒動の結末である寛文事件（寛文11年）のまさに翌年、寛文12年（1672）に起こった、寛文事件同様に江戸で大変有名になった「浄瑠璃坂の讐討」事件の主演（討たれる敵側）となった中金奥平家の歴史そのものが、「亥年の建白事件」における壱岐について、浄瑠璃・歌舞伎の「伽羅先代萩」や「仮名手本忠臣蔵」での大悪人・敵役に容易に結び付けて惹起させる要因を持っていたということがある⁽¹⁾。伊達騒動（寛文事件）と「浄瑠璃坂の讐討」事件という寛文11・12年の連続する二大事件が、「亥年の建白事件」までの190年以上の歳月において蓄積・形成されてきた共同幻想の強力な作用は、壱岐自身どうすることもできない、生まれる前から定められていた、ある種の命運であった。そうなると、「当時偶々主侯昌服の酒色に耽るを奇貨として之を廃し、伊達儀三郎を立て将に之に己の女を以て娶はし、大に其間になす処あらんとするの仕組中なりし」との先の廣池『中津歴史』での記述も、「伽羅先代萩」での「酒色に耽る」領主太郎冠者綱義・幼君鶴喜代丸とそれらを己の野望に利用する悪人「佞臣」錦戸刑部・貝田勘解由による筋書き（本稿注32/33参照）の反映としてみれば、実によく理解できるので

ある。そうであるならば、中津においては、壱岐は、原田甲斐がそうであったように、大悪人の「佞臣」として凄惨な最期・自滅を遂げるべき存在になっていたのであり、「亥年の建白事件」以後、壱岐及びその家族には、もはや故国中津には帰り住める余地はまったくなくなっていたのである（事件以後、壱岐はじめ壱岐の妻・父母の中金奥平家は慶応3年〈1867〉春まで江戸で暮らす）。また伊達儀三郎養子の件については、後述するように、福沢にはとても無関心で済されない事情があった。

壱岐に対する評価はともかくとして、廣池『中津歴史』では、建白書の主意については、詳細にまとめている。建白書での水島ら下士層の掲げた大義名分は、「始嘉永以来、天下日に危急に迫り、各藩皆競うて藩政を改革するの時に際し、本藩独因循して依然旧弊を改めず、上下只恬然偷安を事とし、驕奢横倣一藩風をなす」に対する「慷慨の至」ということにあった（ただし、「上下只恬然偷安を事とし、驕奢横倣一藩風をなす」は、廣池『中津歴史』で、福沢『旧藩情』での「益華美輕薄の風に移り、凡そ中津にて酒席遊興の盛なる、古来、特に此時を以て最とす。故に中津の上等士族は、天下多事の為に士気を興奮するには非ずして、却て之が為に其懶惰不行儀の風を進めたる者と云ふ可し」とのペリー艦隊来航前後からの上士層の「漸次に懦弱に陥る……勢」という指摘を「上下」一藩全体の傾向として組み直して用いたものである⁽¹²⁾。確かに、建白書では、「譜代諸侯の魁首として公武御合体・尊王攘夷の御周旋御座有り度存じ奉り候処、其砌より右等の儀、絶て承知奉らず、薩長等有志の諸侯方御周旋之有り候を御傍觀遊ばされ候儀、恐れ乍ら、御家の御恥辱、幕府に対しなされ候ても、御不忠には之有る間敷哉」が論旨の中核をなしている。〈ペリー艦隊来航を契機とする未曾有の対外危機に対して、中津藩は、三河以来幕府の「御厚恩」を蒙ってきた譜代の「魁首」として「君臣上下一致」「人心一定」して、「速に武備御充実」と「公武御合体・尊王攘夷の御周旋」を実施すべきなのに、「一藩の人氣尚因循」「偷安姑息」のまま一向に何も実施せず、かえって外様の「薩長等有志」が「武備御充実」し「公武御合体・尊王攘夷の御周旋」しているのを「御傍觀」している

だけである現状は、「幕府は勿論天朝」に対する「御不忠」であり、譜代「魁首」中津藩の「御家の御恥辱」であるを主意とする建白書は、福沢に大きくふたつの衝撃を与えたであろう。ひとつは、建白書の主意「速に武備御充実」と「公武御合体・尊王攘夷の御周旋」と「幕府は勿論天朝」に対する忠と不忠という主音の基底にある攘夷思想への直観的不快感である。福沢は壹岐配下の洋学派・開国派であったことから、この不快感は、当然ではあるが、それが、水島六兵衛はじめ、福沢の血縁・類縁の多くが参加している下士層改革派から発せられたものであることから来る複雑さがある。ひとつは、「軽卒の私共、御政務の儀、彼是議奉り候段は、深く恐入り奉り候得共」と身分的に卑下・謙譲しながらも下士層が「私共一統」の「党議」を廻らし「彼是議」を藩政・上士層側に建白するところまで、「下士の力は漸く進歩の道」に在るに至った現状への率直な驚きである。「門閥制度は親の敵」とする福沢の観点からすれば、「亥年の建白事件」は門閥制度に対する下士層からの揺さ振りとして一定の評価ができるはずである。逆にいえば、福沢は、自藩における「亥年の建白事件」を契機として、幕末期、「下士の力は漸く進歩の道」に在ることを強く認識したともいえる。率直に驚き評価しながら同時に、自ら下士であるはずの福沢は、この下士層による建白書事件に対して冷淡である。冷淡というよりも否定的とさえいえる（本稿注13参照）。

此事情（「亥年の建白事件」の事情）に従て維新の際に至り、益下士族の権力を逞うすることあらば、或は人物を黜陟し、或は禄制を^{ちゅうつりよく}変革し、因循吏を殺して、当時流行の^{せいめん}青面書生が家老參事の地位を占めて得々たるが如き奇談をも出現す可き筈なるに、中津藩に限りて此変を見ざりしは、蓋し亦謂れなきに非ず。下等士族の輩が、数年以来、教育に心を用ると雖ども、其教育は悉皆上等士族の風を真似たるものなれば、固より其範圍を脱すること能はず。劍術の巧拙を争はん歟、上士の内に劍客甚だ多くして、毫も下士の侮を取らず。漢学の深淺を論ぜん歟、下士の勤学は日浅くして、固より上士の文雅に及ぶ可らず（『旧藩情』）¹³。

これに先の福沢の言、「但し其品行の嚴と風致の正雅とに至ては、未だ昔

日の上士に及ばざるもの尠ならずと雖ども、概して之を見れば、品行の上進と云はざるを得ず」を重ねると、「亥年の建白事件」での改革指向は、打ち上げ花火のように一回限りで消えてしまい、6年後の「維新」の変革にまで継続するものではなかったことの根本的原因を、福沢は、「亥年の建白事件」において、中津藩下士層の「品行の上進」が確固たる理念への昇華まで至っていなかったことを示唆していることがわかる。中津藩下士層が「退却」しつつある上士層に代わり、さらに上士層を超えることができなかった本質的意味は、福沢の思想からすると、「下等士族の輩が、数年以来、教育に心を用ると雖ども、其教育は悉皆上等士族の風を真似たるものなれば、固より其範囲を脱すること能はず」という外形（武芸・教育の物真似）のさらなる深奥において、「品行の厳」＝「瘠我慢の説」を下士層が上士層と同等に、さらには上士層を超えたレベルにおいて獲得するに至っていないことにある。これが真の意味での下剋上であり、この意味では、「亥年の建白事件」は下剋上たりえなかったことになる。福沢は、「亥年の建白事件」に関して、下士層改革派の尊攘主義や反洋学主義の側面について言及・批判せずに、専ら「文明独立の大義」への酵母とな得る「品行の厳」＝「瘠我慢の説」の観点から述べていることは注目すべきである。

福沢の思想からすると、「品行の厳」＝「瘠我慢の説」の理念は、本質的に「物真似」できるものではなく、教育の「物真似」の範囲を超えて下士層自身が自力で他に依存することなく、「品行の厳」＝「瘠我慢の説」を体得するしかないのである。これは、福沢が「目見る可らず耳聞く可らず、売買す可らず貸借す可らず」（物真似す可らず）を加えてもよいであろうとする「無形の一物」「文明の精神」「文明独立の大義」に対応しているものである（本稿(1)注(2)参照）。福沢の思想からすれば、国内で蓄積してきた「品行の厳」＝「瘠我慢の説」を酵母にして、西洋思想を吸収し、「文明の精神」「文明独立の大義」へと収斂していくことが文明の進歩であった。「亥年の建白事件」において、福沢が下士層に見出したのは、「文明の精神」「文明独立の大義」に収斂していくべき「品行の厳」＝「瘠我慢の説」ではなかったの

であり、福沢は、むしろそこに「品行」についての「賤」臭を感じていたようにも思えるのである。福沢は、『福翁自伝』で次のように回顧している。

グズグズ云へば唯この藩（中津藩）を出て仕舞ふ^だ丈^ぢの事だと云ふのが若い時からの考へで、人にこそ云はね、私の心では眼中藩（中津藩）なしと斯う安心を極め居りましたので、夫れから長崎に行き大阪に出て修業をして居る其中に、藩の御用で江戸に呼ばれて（江戸詰家老壺岐が呼んだとみてよい）、藩の子弟を教ふると云ふことをして居ながらも（慶応義塾の起源となる）、藩の政庁に対しては誠に淡泊で、長い歳月の間、只の一度も建白なんと云ふことをしたことはない。能く世間にある事で、イヤどうも藩政を改革して洋学を盛んにするが宜いとか、兵制を改革するが宜いとか云ふことは、書生の能く遣^やることだ、けれども私に限り、只の一度も云出したことがない。ソレと同時に、自分の立身出世を藩に向て求めたことがない。ドウ云ふやうに身分を取立て、貰ひたいと云ふやうな事は、陰にも陽にも、どんな事があつても藩の長老に内願などしたことがない。……爾う云ふ風に構へて、一切政治の事に就て口を出さうと思はない。思はないから奥平（奥平侯）の邸で立身出世の野心がなければ人に依頼する必要もない。眼中人もなければ藩もなし、左ればとて藩の邪魔をしやうとも思はず、唯屋敷の長屋を借りて安気に住居するばかり、誠に淡泊なもので……藩に対しては甚だ淡泊、淡泊と云へば言葉が宜いけれども、同藩（中津藩）士族の眼から見れば、不親切な薄情な奴と見えるも道理で、藩中の若い者等が酒席などで、毎度議論を吹掛ることがある……⁽¹⁴⁾。

福沢が「藩の政庁に対しては誠に淡泊で、長い歳月の間、只の一度も建白なんと云ふことをしたことはない……イヤどうも藩政を改革して洋学を盛んにするが宜いとか、兵制を改革するが宜いとか云ふことは、書生の能く遣^やることだ、けれども私に限り、只の一度も云出したことがない」という場合の「建白」で、福沢がまず想起したのは、少なからず福沢に衝撃を与えた「亥年の建白事件」であったことは間違いない。また、「ソレと同時に、自分の立身出世を藩に向て求めたことがない」ということから、福沢は、「亥

年の建白事件」にも下士層の「立身出世の野心」「立身出世を藩に向けて求め」る指向を見て取っていたように思えるのである。「亥年の建白事件」が下剋上とも評される所以である。「身分を取立て、貰ひたいと云ふやうな事は、陰にも陽にも、どんな事があつても藩の長老（奥平図書など）に内願などしたことがない」という福沢の自戒ともいえる厳しい言には、「亥年の建白事件」も含めて建白運動というものは、「陰」に「身分」の「取立て」を「藩の長老に内願」する側面、「品行」の「賤」臭を放つ側面を持ってしまうことを示唆しているよに思える。おそらく、「亥年の建白事件」に対する福沢の「淡泊」な姿勢は、「亥年の建白事件」当時、同じ下士層（特に福沢の血縁・類縁）からも「不親切な薄情な奴」と見られていたものであろう。「私の心では眼中藩（中津藩）なし」という福沢の観点は、「品行の厳」＝「瘠我慢の説」という幕藩体制を超えた普遍の理念からも来ている。福沢にとって、中津藩内の下剋上としての「亥年の建白事件」では、「品行の厳」＝「瘠我慢の説」が展開されるものではなかった以上、「淡泊」に対応すべき対象でしかなかったのである（しかし、外部的対応関係からは「淡泊」に見えても、後述するように福沢の内面では、「亥年の建白事件」に対して「淡泊」ではありえなかった）。このことは、建白の類いだけでなく、自己の「野心」実現のため、他を手段化するという政治性一般（「品行の厳」＝「瘠我慢の説」の対極にある）に対する福沢の「淡泊」さらには嫌悪についての根源を示しているといつてよい。こうした点は、福沢から何らかの影響を受けたはずの廣池『中津歴史』と大きく異なっている。

そうすると、「亥年の建白事件」で、糾弾・排斥の標的となった壱岐の不「品行」な「佞奸」「姦計」「奸曲」としての評価こそ、逆に不「品行」な政治性によって取沙汰されたもので、その後、さらにその実像以上に増幅され、御家狂言説話譚というある種の共同幻想で流布する原田甲斐像がそうであるように、「智謀深」い「佞悪姦横の邪心」の極悪人・大逆臣奥平壱岐として造形された側面を持つのである。実際、黒屋『中津藩史』『昌服公時代』では、先行する廣池『中津歴史』を参考にしながらも、「亥年の建白事件」と

壹岐について、次のように記している。

按ずるに亥年（文久3年）の建白事件の骨子は、下剋上にあり、下士の
 上士に対する噬螫（毒虫が人を刺すこと）なり。偶ま奥平壹岐（壹岐）、
 上府詰家老を以て、専権・威福を恣にするを以て、彼らの槍玉に上りたる
 に過ぎず。元来壹岐は、学和漢に通じ、加ふるに長崎に出でて蘭学を修め、
 砲術に精しく、詩を好くし、書画に巧に、器玩を愛し盆栽を賞する等、多
 芸にして趣味広く特に政治的の見識・手腕見るべきもの少しとせず。遠き
 宇都宮・宮津時代に於ける奥平定次（雨山）・奥平重平（夏山）・山崎信
 興・桑名勝成・同勝中等の如きは別とし中津時代以降の傑物にして、当時
 江戸詰老職を以て、遽然（にわか）に世嗣擁立を断行したるは刻下の情勢
 に処す最善の方策と称すべし。而して、伊予宇和島の城主十万石伊達家よ
 り幼弱なる儀三郎を迎へし一事は家格の均衡は無論特に君父宗城の賢明を
 考慮に入れたるにあらざるなからんや。唯其心術の不遜にして徳性の欠如
 たるが故に彼等の標的になり養君の嗣立を以て、私慾を逞ふせんとする奸
 計の如く弾劾せられたるは誤解・邪推の甚だしきものなるも其一半の責任は
 不徳の然らしむる所たるを自ら顧みて負はざる可らず。抑も養君の実父伊
 達宗城侯は三百藩中の名君として皇政回復に率先、尽瘁したる維新の元勳
 なり。是時に当たり、本藩（中津藩）が譜第（譜代）の親を以て、徳川氏
 三百年間、特殊の恩遇を蒙りしに係らず、克く尊王の大義を弁へ、順逆方
 向を誤らず、三河以来の辱めざりしは……豈に侯の指導・援護の力なし
 云はんや（伊達宗城侯の指導・援護の力があつたのに決まっている）。是
 に於て壹岐の功や妄りに没すべからざるなり。壹岐、禄を削られ、職を免
 ぜられ、怏々として終に藩を立退くや、薩藩、人をして本藩（中津藩）に
 伝へせしめて曰く、壹岐を抱へて千石を給せんと。藩庁、胥議して生田又
 右衛門を鹿児島に派し、是議を謝絶せしめたりと云ふ。明治に及んで一時、
 大蔵省（実は左院）に出仕したりしたが坎可（困難な状況に陥ること）・
 不遇、落莫として晩年を終へたり⁽¹⁵⁾。

著者黒屋直房は、中津藩門閥、「最先初期の五老」のひとつ、黒屋甚兵衛

重氏家の末裔でありかつ壱岐の中金奥平家の血縁（同時に怨念化した敵討関係も持つ）の末裔でもある（本稿注11・本稿(1)注25参照）。同じ門閥七族の壱岐に対する上士層からの観点（下士層から下剋上を受けた側の観点）も入っているが、廣池『中津歴史』の場合とは違った意味で、ここでも福沢からの影響が多く見られる。黒屋『中津藩史』では、明確に「亥年の建白事件」を、「下士の上士に対する」下剋上としてとらえており、その下剋上の内において、「偶ま」藩権力を集中掌握していた壱岐が、「偶ま」「彼ら（下士）の檜玉に上りたるに過ぎ」ないとしている。これは、『旧藩情』での「其執政（壱岐）を黜けて一時の人心を慰めたり」からの影響であるが、壱岐打倒について、「噬螯く壱岐はたまたま運悪く毒虫に刺されたようなものだ」とするのは、「亥年の建白事件」に対する辛辣な表現となっている。しかし、下士層による壱岐打倒が遂行できたのは、壱岐に対立する保守派（改革を志向しないで現身分と現秩序の維持のみを志向する）門閥・上士層の容認と隠然たる支持があったわけであるから、福沢がその不「品行」なる政治性に「冷淡」になるわけである。黒屋『中津藩史』では、「智謀深」い「佞悪姦横の邪心」の極悪人・大逆臣奥平壱岐像に対抗するように、「元来壱岐は、学和漢に通じ、加ふるに長崎に出でて蘭学を修め、砲術に精しく、詩を好くし、書画に巧に、器玩を愛し盆栽を賞する等、多芸にして趣味広く特に政治的の見識・手腕見るべきもの少しとせず」として、壱岐は「中津時代以降の傑物」として最上級ともいえる評価をしている。「元来壱岐は……」には、流布した「佞臣」壱岐像に対する大いなる反感が表されている。

そうして、建白書での「奸曲」壱岐糾弾の真の中核となる儀三郎養子問題については、「(壱岐が) 当時江戸詰老職を以て、遽然世嗣擁立を断行したるは刻下の情勢に処す最善の方策と称すべし」と、逆に壱岐の「政治的の見識・手腕」を高く評価し、「養君の嗣立を以て、私慾を逞ふせんとする(壱岐の) 奸計の如く弾劾せらるるは誤解・邪推の甚だしきものなるも」、建白書での表現でいう「道路の浮説」に過ぎないものとして、流布している儀三郎養子問題に関する壱岐「奸計」「姦計」説に対して痛烈に批判している。

黒屋直房は、建白書での文言「御家（中津藩奥平家）に於ては、長篠御籠城以来、二百年来、幕府の御厚恩蒙りなされ候儀は申す迄も之無く……先年来譜代諸侯の魁首として公武御合体・尊王攘夷の御周旋……絶て承知奉らず薩長等有志の諸侯方御周旋之有り候を御傍観遊ばされ候儀、恐れ乍ら、御家の御恥辱、幕府に対しなされ候ても、御不忠に之有る間敷哉」を逆手に取って、「是時（王政維新）に当たり、本藩（中津藩）が譜第（譜代）の親を以て、徳川氏三百年間、特殊の恩遇を蒙りしに係らず、克く尊王の大義を弁へ、順逆方向を誤らず、三河以来の辱めざりしは……豈に侯（伊達宗城）の指導・援護の力なし云はんや」と皮肉って表現している。「不忠」の臣として糾弾したはずの壱岐が決断実行した、宇和島藩主伊達宗城（1818文政11～1892明治25／文久3年時には隠居していたが有力な幕政参与として公武合体や後に大政奉還を推進した）への接近と、宗城三男儀三郎の、新中津藩主奥平昌邁（当時9歳）としての擁立によって、三河以来の譜代「魁首」として徳川家とは、「特殊の恩遇」を受け深い関係にあった中津藩が、尊王討幕派と佐幕派が激しく攻防する維新の際、徳川幕府滅亡と運命を共にすることなく、伊達宗城の「指導・援護の力」を受けて、尊王と佐幕の「順逆方向を誤らず」、中津藩奥平家の「御恥辱」を回避できたのであるとするのである。

福沢諭吉選集を編んだ富田正文も、『考証福澤諭吉』上（平成4年〈1992〉刊）での「福澤諭吉と奥平壱岐」で、次のようにポジティブに評している。

二年交代の江戸詰家老として出府していた壱岐は、藩主昌服まさもとに子がないかったので、伊予宇和島の前藩主伊達宗城の三男儀三郎を奥平家の養子に迎えた。中津藩最後の藩主奥平昌邁まさゆきとなったのがこの儀三郎のりさぶろうで、名君と称される人である。この縁組はむしろ壱岐の功績といってもよかったのであるが、この事が下士中の藩政改革派の口実に取り上げられた。すなわち壱岐は藩主の廃立を企て、現藩主を隠居させ幼主を挟んで己れひとり権勢を恣にしようとの陰謀であるというのである。……壱岐は歴代の家老中ではむしろ傑出した人物で、学問は漢蘭を兼ね、砲術に詳しく、施政上の見識手腕もあり、詩も作り書画にも巧みで、追放されて寄梅と号して風流に隠

れて日を過ごしていた。中津城下の市中には寄梅と署名した書画が今でも残っている⁽¹⁶⁾。

富田は、壱岐を評するについて、廣池『中津歴史』の見解と黒屋『中津藩史』の見解の吟味を通して、「壱岐は歴代の家老中ではむしろ傑出した人物で、学問は漢蘭を兼ね、砲術に詳しく、施政上の見識手腕もあり」とし、儀三郎擁立も権勢欲による「廃立」ではなく「むしろ壱岐の功績」としていることから、黒屋『中津藩史』の見解を採択したことがわかる。富田が編者代表となった『福翁自伝』（『福沢諭吉選集』第10巻）では、福沢の口述内容について綿密に校定していて、福沢の誤解・思い違いなどあれば、逐次注でそのことを指摘してある。富田は、『福翁自伝』の校定と考証を通して、『福翁自伝』での福沢の「亥年の建白事件」における壱岐についてのまったくの沈黙の深奥にある福沢の壱岐に対する感慨を察知したものと思える。それは、黒屋『中津藩史』での壱岐像に近いものであったのである。おそらく、事件当時、水島六兵衛らの建白書を熟読し、「亥年の建白事件」についても相当精通していたであろう福沢、長崎蘭学修行時代以来、壱岐との数々の重要なかかわりを持つ福沢が、「亥年の建白事件」における壱岐像を一番正確に理解していたはずである。その福沢が『福翁自伝』で、「亥年の建白事件」における壱岐のことについてまったく言及していない（「亥年の建白事件」そのものについてまったく言及していない）。この福沢の沈黙の意味については、後述するが、『福翁自伝』で福沢は、「亥年の建白事件」における壱岐について、暗示はしている。それは、「亥年の建白事件」の10年前、長崎蘭学修業時代についての箇所（本稿(1)参照）、上士・門閥の壱岐が、自分を凌駕する程の、下士の次男の福沢の蘭学修得の力量に「ヤッカミ」、福沢を底の浅い「計略」で長崎から中津に追い返すという箇所で、「全体、奥平（壱岐）と云ふ人は決して深い巧みのある悪人ではない。唯大家の我儘なお坊さん（お坊っちゃん）で、知恵がない度量がない。其時に旨く私（福沢）を籠絡して生け捕つて仕舞へば譜代の家来同様に使へるのに、却てヤッカミ出したとは馬鹿らしくて、ソコデ私を中津へ還へすやうな計略^{めく}を運らしたのが、私

の身には一大災難」と述べている。「全体、奥平（壱岐）と云ふ人は決して深い巧みのある悪人ではない」というのは、明らかに「亥年の建白事件」以後、喧伝されてきた「智謀深」い「佞悪姦横の邪心」の極悪人・大逆臣奥平壱岐像への福沢の密やかなるさらりとした異議であり、黒屋『中津藩史』での「元来壱岐は、学和漢に通じ、加ふるに長崎に出でて蘭学を修め、砲術に精しく、詩を好くし、書画に巧に、器玩を愛し盆栽を賞する等、多芸にして趣味広く特に政治的の見識・手腕見るべきもの少しとせず」は、この福沢の密やかなるさらりとした異議に影響され積極的な壱岐評価に発展させたものと理解できる。福沢は、〈壱岐が「運ら」す「計略」などというものは、かつて長崎で自分に仕掛けてきたような、底の浅い「馬鹿らしい」悪戯のようなものであり、喧伝されているような「智謀深」い「佞悪姦横の邪心」などというものでは決してない〉ということを示唆しているのである（事実としては壱岐自身は実は福沢の長崎追出し・中津召還の企みを知らなかったのではないかという指摘さえある⁽⁷⁷⁾）。黒屋『中津藩史』での「(壱岐が) 私慾を逞ふせんとする奸計の如く弾劾せられたるは誤解・邪推の甚だしきものなるも」と強調するのは、この福沢の暗示に応じたものと理解できる。福沢が「全体、奥平（壱岐）と云ふ人は決して深い巧みのある悪人ではない。唯大家の我儘なお坊さんで、知恵がない度量がない」というのは、実は壱岐への悪評ではなく、「智謀深」い「佞悪姦横の邪心」の極悪人・大逆臣奥平壱岐像への密やかな異議であるといえる。壱岐に「知恵がない」というのは「私慾を逞ふせんとする」ことを目的とする「深い巧みの」〈悪知恵がない〉ということなのである。福沢がかつて中津で「赤貧洗うがごとし」の貧窮と絶望のどん底にあって、壱岐所蔵の高価な原書をまるまる一冊、壱岐をいいくるめて、まんまと盗むように筆写した際（この写本は福沢の適塾復学と洋学者への再出発の際の重要な道具となるが、壱岐の方も福沢にいいくるめられた振りをして実は福沢の原書筆写を容認していて、さらに福沢もそのことは感づいていたもとみてよい）のことを、「原書の主人（壱岐）に毛頭疑ふやうな顔色もなく、マンマと其宝物の正味を偷み取て私の物にしたのは、悪漢

が宝蔵に忍び入つたようだ」と福沢は回顧している。福沢は、自分のことを「悪漢」盗人に擬しているのである。福沢が自身を「悪漢」盗人とする分、まんまと騙され盗まれた壱岐の方が相対的に余程、お人好しの善人ということになる。この原書写本（盗本）のことについて、福沢は余程のこだわりがあり、『福翁自伝』では、次のように再び述べられている。

壱岐と私（福沢）との関係に就ては、私は自ら自慢をしても宜いことがある。是れは如何しても悪感情がなければならぬ筈、衝突がなければならぬ筈、けれども私は其人（壱岐）と一寸とも戦たことがない。彼（壱岐）は私を敵視し愚弄して居ると云ふことは、長崎を立つ時に、「貴様は中津に帰れ。帰つたら誰に此手紙を渡せ。誰に斯う伝言せよ」と命ずるから、ヘイタ々と畏りながら、心の中では舌を出して、「馬鹿言へ、乃公は国に帰りはせぬぞ、江戸に行くぞ」と云はぬばかりに、席を蹴立て、出たことも、後になれば先方（壱岐）でも知て居る。けれども其後、私は毎度本人（壱岐）に逢ふて仮初にも怨言を云ふた事のない所ではない、態と旧恩を謝すると云ふ趣ばかり装ふて居る中に、又もや其大切な原書を盗写したこともある。先方（壱岐）も悪ければ此方（福沢）も十分悪い。けれども唯私が、其事を人に語らず顔色にも見せずに、御家老様と尊敬して居たから、所謂国家老のお坊さんで、今度私を江戸に呼寄せる事に就ても、家老に異議なく直ぐ決して幸であつたが、**実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ**⁽¹⁸⁾。

これは、福沢が、自分と壱岐の関係について、一番多言かつ踏み込んで述べたところでもあるが、「是れは如何しても悪感情がなければならぬ筈、衝突がなければならぬ筈、けれども私は其人（壱岐）と一寸とも戦たことがない」「先方（壱岐）も悪ければ此方（福沢）も十分悪い」「実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ」と何とも歯切れが悪く不明瞭だ。ここに福沢と壱岐の、外からは窺い知れない複雑な関係が示唆されている。「（壱岐に対して）如何しても悪感情がなければならぬ筈、衝突がなければならぬ筈、けれども私は其人（壱岐）と一寸とも戦たことがない」ということの対極に、

壱岐を糾弾しその暗殺まで企てた「亥年の建白事件」を明らかに意識している。福沢の「門閥制度は親の敵^{かたき}」とする激しい怨情の象徴的対象である「国家老のお坊さん」の壱岐、門閥制度・封建身分制度を背景にして悪戯を仕掛けてくる「猿松」の壱岐に対して、福沢は、「如何しても悪感情がなければならぬ筈、衝突がなければならぬ筈」なのに、壱岐と生涯「一寸とも戦たことがない」のである。福沢にとって壱岐は、不倶戴天ともいえる「門閥制度は親の敵」の象徴的対象とあると同時に、尊重すべき「品行の敵」＝「瘠我慢の説」を体現した典型である三河武士の気風を保持してきた門閥「七族」の継承者でもあった。しかも、トリックスター「猿松」壱岐が仕掛ける悪戯に導かれるように福沢は、洋学者として世に出ることができた。結果的には、福沢はどこかで壱岐をまんまとうまく使って世に出てきたのである。「実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ」なのである（こうした深い罪の自覚を持ちえることが福沢の思想の偉大さでもある）。「先方（壱岐）も悪ければ此方（福沢）も十分悪い」というのは、壱岐の「悪い」は、トリックスター「猿松」の兇戯に等しい悪戯であり、福沢が「悪い」のは、意識的にはないにせよ、結果的にはその壱岐をどこかでまんまとうまく使って世に出た「罪」である。「今度私を江戸に呼寄せする事に就ても、家老（江戸詰家老奥平壱岐）に異議なく直ぐ決して幸であつたが」（『福翁自伝』）と福沢自ら語っているように、福沢が大坂から江戸に出て中津藩邸内に洋学塾を主宰するようになったことは、欧米渡航体験や慶応義塾創設など福沢が洋学者として大きく飛躍する契機となる、福沢にとっての大きな「幸」であったが（本稿①参照）、「亥年の建白事件」で糾弾された程、当時の藩権力を専制的に掌握していた江戸詰家老壱岐が福沢の江戸藩邸招聘・洋学塾主宰を提議・決定したことは明らかであろう。長崎遊学以後も、福沢は、壱岐との交流を、「心の中では舌を出」すことが多々あっても、「仮初にも怨言を云ふた事のない所ではない、態と旧恩^{わづ}を謝すると云ふ趣ばかり装ふて」「御家老様と尊敬して居」る形、「其人（壱岐）と一寸とも戦たことがない」形で持続していた。こうした壱岐との交流の経緯が福沢の江戸藩邸招聘・洋学塾主宰を導

いたといえるのである。「実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ」との福沢の感慨は、「品行の厳」＝「瘠我慢の説」を尊重する福沢自身の、自己の「幸」のために装い、結果的に他を手段としてしまった不「品行」についての自虐ともいえる。

原書筆写の件でもわかるように、福沢と壱岐の交流は、福沢の方はどうであれ、壱岐にとって、蘭学・洋学について語り合える、格別な意味を持つ交流であったはずである。福沢との交流を通して、壱岐は、福沢の蘭学者・洋学者としての力量は、「ヤッカミ」を抱かせる程高く評価していたはずで、江戸藩邸内で洋学塾を主宰できるのは福沢以外にいないと確信していたであろう。そうでなければ、福沢の江戸藩邸招聘・洋学塾主宰などありえない。福沢江戸藩邸招聘・洋学塾主宰決定は、福沢の壱岐に対する「態^{わざ}と旧恩を謝すると云ふ趣ばかり装ふて」「御家老様と尊敬して居る」外面的「装^{よそおい}」だけから来るものではなく、壱岐の蘭学者・洋学者福沢、日本蘭学校の白眉適塾塾長福沢に対する実の評価なのである。しかし、「ヘイ々々と畏りながら、心の中では舌を出して、『馬鹿言へ、乃公^{おれ}は国に帰りはせぬぞ、江戸に行くぞ』と云はぬばかりに、席を蹴立て、出たことも、後になれば先方^{さき}（壱岐）でも知て居る」ということによく表れているように、壱岐は、「仮初にも悪言を云ふた事のない所ではない、態^{わざ}と旧恩を謝すると云ふ趣ばかり装ふて」という福沢の内面も察知していたし、福沢もそうした壱岐の察知についても察知していた。それでいて、福沢と壱岐は、封建身分制下であって、上下関係の「装^{よそおい}」を破ることはなかった。こうした福沢と壱岐の虚実が複雑に入り組んだ関係に先述のアンビバレントな関係が重なると、「先方（壱岐）も悪ければ此方（福沢）も十分悪い」「実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ」と歯切れ悪く不明瞭にいう以外、福沢は多くを沈黙する他なかったのである。

以上のことから、福沢は、「亥年の建白事件」によって造形・喧伝された「智謀深い」「佞悪姦横の邪心」の極悪人・大逆臣奥平壱岐像などはまったく噴飯ものであり、むしろ壱岐は、藩内の「一時の人心を慰め」るための中

津藩の不「品行」な「姑息の策」のスケープゴートとなったこと、「亥年の建白事件」そのものに不「品行」な政治性の腐臭があることを深く認識していたものといえる。ただ、「(壱岐は)唯大家の我儘なお坊さん(お坊ちゃん)で、知恵がない度量がない」という福沢の謂は、黒屋『中津藩史』での「其一半の責任(「亥年の建白事件」で壱岐が糾弾された責任)は(壱岐自身の)不徳の然らしむる所たるを自ら顧みて負はざる可らず」に反映されている。そこで指摘された壱岐自身の「不徳」とは、門閥「大家」の「お坊さん」育ちゆえの壱岐の「我儘」な性格、さらに「我儘」のし放しで、そこには様々な人心に配慮して組織をまくまとめていく深い「知恵」がなく(同時に「私慾」を全うせんとする「悪知恵」もないただの幼稚な「我儘」となっている)、したがって、他者を広く深く包摂していくことができるような「度量」のなさを示している。このことは、建白書では「(壱岐の)自儘(我儘)の御振舞」「(壱岐の)偏頗私論」と、廣池『中津歴史』では「姦横(横暴)」と、共通して指摘しているところのものである。つまり、藩組織を統括できるような政治的「知恵」(悪知恵にも転じるものでもあるが)と人間的「度量」が欠如している壱岐に、「偶^{たま}ま」に藩権力が異常に集中してしまったことに、壱岐の悲劇があったことになる。「私慾」を全うせんとする「悪知恵」も「邪心」もないただの幼稚な「我儘」の壱岐は、自分の才能をおだて褒めあげる者を嬉嬉として採用し、自分の「我儘」に表立って「戦」や「怨言」を表した、自分の気に入らぬ者を排除していき、壱岐派閥が出来上がるが、実は幼稚な「我儘」の壱岐は、派閥藩士から逆にうまく利用されていたのである。福沢のいう「実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ」ということが、個人間レベルではなく、藩政レベルで質悪くおこなわれていたものとみてよい。これが、壱岐から排除された側からすると、建白書で「殊に壱岐(壱岐)殿御役の後は、偏頗私論の義を以て執政其他正義の御方は御退役等に御取計、佞奸を以て御昵近の士を深く御結び」と表明されるものとなるのである。そうして、最後には壱岐は自分の派閥からも見捨てられ、藩の「姑息な策」により、「智謀深」い「佞悪姦横の邪心」

の極悪人・大逆臣として、門閥としての地位と特権を剥奪され、事実上藩から追放されるに至ったのである。

しかしまた、政治的「知恵」と人間的「度量」の欠如という壱岐の「不徳」と、壱岐が「中津時代以降の傑物」であるとの評価は、決して矛盾するものではない。具体的に組織を統括することがうまくできなくても、一点一点の大局での判断と遂行（「政治的手腕の見識・手腕」の試金石となる）は的確でありえるのは自明のことである。特に、壱岐の「政治的手腕の見識・手腕見るべきもの少しとせず」とする典型として、壱岐による、近い将来の新藩主擁立のための儀三郎養子縁組の判断と遂行がある。福沢は、壱岐の儀三郎養子縁組・新藩主擁立の判断と遂行について、黒屋『中津藩史』での「(壱岐が) 遽然世嗣擁立を断行したるは刻下の情勢に処する最善の方策と称すべし」、富田『考証福澤諭吉』での「この縁組(儀三郎養子縁組)はむしろ壱岐の功績といってもよかったのであるが」というようには明言していないし、そもそも壱岐の儀三郎養子・新藩主擁立の判断と遂行そのものについて沈黙している。だが、福沢も、奇遇か必然か、壱岐が擁立した儀三郎こと中津藩最後の藩主奥平昌邁まさゆきに大きくかかわっていき、壱岐同様、暗殺の危機(福沢生涯最大の危機)に遭遇することになるのである。黒屋『中津藩史』によれば、「公諱昌邁小字儀三郎・九八郎、官従五位・美作守、宇和島藩主伊達遠江宗徳の養弟、実は伊達伊予守宗城老公の第三子、母は侍女、安政二(1855)乙卯四月朔日江府に於て誕生」⁽⁹⁾と紹介したうえで、昌邁の養子縁組から明治維新までの経歴を次の通り記している。

文久三(1863)癸亥四月廿五日、江戸汐留上屋舗(中津藩江戸上屋敷)に入家す。五月十一日、願の通り養子仰付けられる時に十三歳実は九歳。五月廿八日、江戸発駕。七月十七日、中津着。九月十八日、九八郎と改む。元治元年(1864)四月二日、中津発。五月五日、江府着。八月十五日、西丸へ登城、初めて家茂公に謁す。太刀一腰、馬代黄金十両を献ず。八月廿四日、江戸発。九月廿六日、中津着。元治二年二月十六日、中津発。四月六日、江戸着。是歳、慶応と改元す。慶応元年(1865)十一月廿六日、登

城、従五位下美作守叙任。十二月廿五日、口宣^{くせん}頂戴。慶応四年（1868）二
月前將軍（徳川慶喜）の処置、寛容の儀に付き、朝廷へ嘆願書奉呈の爲め、
上京を差許され、二月廿六日、品川より外国船に乗り、三十日、神戸上陸、
陸路大阪へ入る。明治と改元（正確には明治への改元は9月8日）。三月
十日、左の歎（嘆）願書を太政官へ提出して允許さる（5月6日に家督相
続し正式に中津藩主に就く）⁽²⁰⁾。

文久3年5月、9歳で藩主奥平昌服の養子となった昌邁は（昌邁が養子と
なったとはほぼ同時に壱岐は建白事件によって排斥されている）、明治維新に
際して、藩主となった昌邁は、まだ14歳の少年であった。福沢と壱岐が共に
係わっていく〈商社の時代〉での中津藩主は少年君主であったのである。昌
邁が藩主に就く直前に太政官に提出した慶喜処置寛容の嘆願書とは次の通り
である。

慶喜大罪を犯し、追討仰せ出され候処、何共恐入り畏縮罷り在り候。私家
（中津藩奥平家）の儀は、従来の次第も之有り、今日、徳川家存亡の境に
至り、官軍御指回迄も之無く、臣藩（譜代）の身分、精々尽力謝罪の道立
てさせ^{たき}度は、山海の思に御座候処、幼弱微力、殊に昨年（慶応3年）以来
の次第、委^{つぎかけし}敷弁別仕らず、何共申上げ様、御座無く、当惑恐縮罷り在り
候処、慶喜、東帰後は現に恭順の処、見聞罷り在り候に付、何卒寛典の御
処置、幾重にも懇訴奉り候。重大の御事件大罪、実跡も少く一己の歎願申
上げ候も重々恐入り候得共、此上、御決末御処置の節、微情御汲取り成し
下され候はゞ、臣藩の情実、相貫き、重畳有難き仕合存じ奉り候。此段、
偏に懇願奉り候。

美作守（昌邁）自身御軍門に罷り出、相願候心得に罷り在り候処、大阪表
行幸中、同所御警衛仰せ付られ候に付、名代、重臣以て申上げ候⁽²¹⁾。

先に見た、黒屋『中津藩史』での「抑も養君の実父伊達宗城侯は三百藩中
の名君として皇政回復（王政復古）に率先、尽瘁したる維新の元勳なり。是
時（王政維新）に当たり、本藩（中津藩）が譜第（譜代）の親を以て、徳川
氏三百年間、特殊の恩恵を蒙りしに係らず、克く尊王の大義を弁へ、順逆方

向を誤らず、三河以来の辱めざりしは……豈に侯の指導・援護の力なしと云はんや」とのことは、この慶喜処置寛容の嘆願書に結実されているような事柄を指していたことがわかる。嘆願書では「幼弱微力」と謙譲しているが、幼少より聡明の誉れ高く、いかに名君として成長していく昌邁とはいえ、まだ13、4歳では、強力有能な補佐が掛値なく必要であった。「亥年の建白事件」で排斥されなければ、それは本来ならば壱岐の役割であったはずであった。壱岐排除後、壱岐に代って昌邁を補佐するようになった一人は、後述するように、元壱岐派の上士島津祐太郎とみてよい（島津は後に福沢を中津藩主奥平家に接近させる）。島津は、廣池『中津歴史』では「島津氏（島津祐太郎）の如きも壱岐の為に籠絡せられ居る人なれば……大に壱岐の為に尽せり、而れども後……壱岐の奸悪を知るや、奮然、壱岐に迫つて、其退職を促したりと云」と記されている。「壱岐の奸悪を知るや」というよりは、幼児的「我儘」・「度量」の狭さ・政治的「知恵」の乏しさ、など壱岐の性格的欠陥から来る指導者としての限界も、福沢同様認識していた島津は、姑息な手段とはいえ、もはや壱岐退職によってしか解決しない藩の現況を説明してその退職を論したのであろう。そうして、壱岐退職と引き換えにして、島津らは、壱岐体制の最良な部分と儀三郎擁立路線を継承して、新藩主昌邁の補佐と伊達宗城と中津藩の仲介に努めたに違いない。「皇政回復（王政復古）に率先」した実績のある実父伊達宗城の存在と昌邁に対する「指導・援護の力」があつてこそ、「徳川家存亡の境」での佐幕と尊王討幕入り乱れる複雑極まる状況において、「克く尊王の大義を弁へ、順逆方向を誤らず」と同時に、「山海の思」で慶喜処置寛容を「懇訴」する嘆願書を新政府・太政官に奉ずることで、中津藩の三河以来の「臣藩（譜代）の身分」としての「臣藩の情実、相貫」き、武家社会の大義名分も示すという際どい芸当ができたのであった。

伊達宗城は、嘉永元年（1848）に逃亡中の高野長英、嘉永6年（1853）には長州藩士大村益次郎（村田蔵六／適塾出身）など、先進的蘭学者を招聘して、洋式兵学導入など、宇和島藩の洋学に基く制度改革を積極的に取り組ん

できた。宗城自身の蘭学に対する理解は、年季が入っているのである。しかも宗城は、一時水戸学にも傾倒したように、和漢学の造詣も深い。壱岐と宗城が接近する際の大きな共通項のひとつは、洋式兵学など蘭学であったことは明確である。当時、下士の福沢を除外すると、宗城と蘭学のレベルで相対できる中津藩門閥要路は、壱岐以外にいなかったはずである。壱岐が藩権力を集中してしまったのは「偶ま^{なま}」であったかもしれないが、壱岐と伊達宗城の接近、そうしてその三男儀三郎の次代藩主擁立は「偶ま^{なま}」では決してなく、必然的に壱岐であらねばならなかったのである。しかし、造形・喧伝された「智謀深」い「佞悪姦横の邪心」の極悪人・大逆臣奥平壱岐像へのカウンターパンチとして、密やかに打ち出された、大思想家福沢が表したトリックスター「猿松」壱岐のイメージは、同時に、「学和漢に通じ、加ふるに長崎に出でて蘭学を修め、砲術に精しく」「中津時代以降の傑物」「特に政治的の見識・手腕見るべきもの少しとせず」との壱岐に対する評価の方に、より大きな打撃を与えてしまった。壱岐は、大福沢の『福翁自伝』によって後世忘却はされなかったが、「先方(壱岐)も悪ければ此方(福沢)も十分悪い」「実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ」という福沢の深く複雑な感慨の意味も顧られることもなく、後世〈門閥家老の馬鹿息子〉の道化役・敵役として漫画化されて記憶されることになってしまったのである(子供向けの漫画版福沢論吉伝などに登場する奥平壱岐は文字通り漫画そのものである)。福沢の愛惜の念さえ交えた複雑な思いの対象となったのは、幕末期、「漸次」に「懶惰不行儀の風」へと「退却」していく中津藩上士層の衰え(「品行の厳」=「瘠我慢の説」の衰弱)であり、壱岐を含めた中金奥平家も例外ではなかったことであった(本稿(1)注(20)(21)参照)。長崎蘭学修業時代、「原書と云ふものは始めて見たのであるが、五十日、百日と、おひおひ日を経るに従て、次第に意味が分るやうになる。所が奥平壱岐は、お坊さん、貴公子だから、緻密な原書など読める訳けはない」と壱岐は見限られ、果てはその底の浅い悪戯のような幼稚な計略まで見透かされて、福沢が、「ヘイ々々^{かじこ}と畏りながら、心の中では舌を出して」、「此猿松め、馬鹿野郎め」「馬鹿言

へ、乃公は国に帰りはせぬぞ、江戸に行くぞ』と云はぬばかりに、席を蹴立て、出た』との行為に至った時に、福沢の内側では本質的な意味での下剋上は終わっていた。福沢は、壱岐をトリックスター「猿松」として対象化し、「実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ」とのひっかかりを抱きながら、自己の内側に体系化することで、壱岐を乗り越えようとしたが、これは福沢個人の乗り越え方であり、トリックスター「猿松」壱岐像からはみ出す部分、「学和漢に通じ、加ふるに長崎に出でて蘭学を修め、砲術に精しく」「中津時代以降の傑物」「特に政治的の見識・手腕見るべきもの少しとせず」などが当然あったのである。

福沢が、儀三郎擁立を決定し断行した、壱岐の「政治的の見識・手腕」を内面で密かに評価していたであろうことは、壱岐排斥後の福沢と昌邁の関係が如実に表している。福沢が藩主奥平家及び藩主昌邁と接近する触媒となったのは、元壱岐派津島祐太郎としてよい。福沢は、自分が藩主奥平家と接近する契機について、『福翁自伝』で次のように述べている。

旧藩の奥平家（藩主家）に対して私（福沢）は如何なる者ぞと尋ぬるに、見る影もなき貧小士族が、洋学など修業して異様な説を唱へ、或は外国に行き、又或は、外国の書を翻訳して大言を吐散らし、剩さへ、儒流を輕蔑して憚る所を知らずと云へば、是れは所謂異端外道に違ひない。……藩主の奥なんぞには……兎に角に、福沢諭吉は大変な奴だと折紙が付て居たに違ひない。所が物換り星移り、段々時勢が変遷して、王政維新の世の中になつて見れば、藩論も自から面目を改め、世間一般、西洋流の喧ましい今日、福沢もマンザラでなし、或は之を近づけて何かの役に立つこともあらうと云ふやうな説が、チラホラと湧いて来た其時に、**嶋津祐太郎と云ふ奥平家の元老は、頗る事の能く分る、云はゞ、卓識の君子で、時勢の緩急を視察して、コリヤ福沢を疎外するは不利であると云ふことに着眼して居る折柄、奥平家の大奥に芳蓮院様（6代中津藩主奥平昌暢の正室で昌服の母）と云ふ女隠居がある、此貴婦人は一橋家から奥平家に下て来た由緒ある身分（芳蓮院は一橋齊敦の娘国子）で、最早や余程の老年でもあり、一**

家無上の御方様と崇められて居る。ソコデ嶋津が先づ其ご隠居様に対して、色々西洋の話をする中に、彼の国には文学武備、富国強兵、医術も精しく航海術も巧なり、其中には随分日本の風俗習慣に違た事も数々ありますが、爰に西洋流儀に不思議なるは男女の間柄で、男女相互に軽重なく、如何なる身分の人でも一夫一婦に限りて居ます。是れ丈けは西洋の特色で御座ると云ふ所を持込んだ所が、其御隠居様も、若い時には直接に身に覚えがある。此話を聞いて心を動かさずには居られない。恰も豁然発明した様子で、ソレカラ福沢を近づける気になつて、次第々々に奥向の方に入出入の道が開けて、御隠居様を始め所謂御上通りおかみどおの人に逢ふて見れば、福沢の外道も唯の人間で、角も生へて居なければ尻尾のある者でもない。至極穩かな人間だと云ふ所からして、段々懇親になつたと云ふ其話は、程経て後に内々嶋津から聞きました⁽²²⁾。

福沢は、津島のことを「嶋津祐太郎と云ふ奥平家の元老は、頗る事の能く分る、云はゞ、卓識の君子」と高く評価している。「頗る事の能く分る、云はゞ、卓識の君子」というのは、藩主奥平家「奥向」に対して、「彼の国には文学武備、富国強兵、医術も精しく航海術も巧なり」と「色々西洋の話」を教授できる程、島津が近代西洋・洋学について造詣が深いことを意味している。島津は、芳蓮院に対する場合と同様に次代少年藩主昌邁に対しても「色々西洋の話」をしたとするのは自然のことである。したがって、福沢は、島津を通して芳蓮院ら「御上通りの人」と接近したのと同様に、島津を通して昌邁と接近したとするのも自然である。島津は、元壱岐派であるだけあって、壱岐を通して蘭学・洋学及び西洋的世界について「頗る事の能く分る」素養を持していたものと理解できる。『福翁自伝』では、島津が芳蓮院に開陳した「色々西洋の話」の中で、芳蓮院を甚く感動させたという西洋の一夫一婦制についてのことが『福翁自伝』では妙な程詳細に述べられている。おそらくは、一夫一婦制についての内容は、福沢があらかじめ島津に説明したものである。一夫一婦制だけではなく、福沢は、奥平家元老島津に対して、壱岐以上に、「色々西洋の話」、西洋的世界について深く説明したのである。

維新後の昌邁の経歴について、黒屋『中津藩史』では次のように記している。

(明治4年<1871>)六月十一日、(中津藩知事奥平昌邁)令して藩士・卒の農商の籍に入るを許す……是令を拝し、士・卒の帰農・商を出願する者百七十余人、乃ち士族一人に対し五十円、卒族一人に対し二十五円の就産金を貸与す。蓋し明治三年十一月廿日太政官の命達を以て、府県隷属者の農商の籍に入らんとする者に資金を貸与するの制を定めたるに基く。七月十四日、廃藩置県の大詔煥発せられ、同日、中津藩知事を免ぜらる。十月天保義社を設立し、旧藩士族の緩急に^{こまや}応ぜしむ。十一月家禄を割きて、中津市学校を開始し、日新・文明の学事を講習するに供す。十二月十四日、米国ヒラデルヒヤ(ニュージャージー州ニューブランズウィック地区ともニューヨーク州ブルックリンのポリテクニク・インスティテュートともいわれる)へ留学の爲め、東京を出発す。小幡仁三郎(小幡篤次郎の実弟)随行、同人死没す。明治六年十二月、疾を獲て帰朝す。明治九年六月、出羽山形の藩主水野忠弘妹静子と婚を結ぶ。明治十三年九月東京府議員に当選す。明治十四年三月、時勢に鑑みて、中津市学校を閉鎖し直に開運社を設け、校資の残部を以て育英の資に利用せんとし、郷土秀才の留学費に充当す。六月東京府芝区長に任用せらる。明治十五年十一月芝区長の職を辞す。明治十七年七月、家格に依り、伯爵を授けらる。十一月廿六日、病んで東京芝三田、山上の邸に於て卒す、享年三十……按ずるに公(昌邁)、天資俊敏にして才智余りあり、態度平民的にして、尊大・倨傲の習気なし。維新の政変に処するや敢て方向・順逆を誤らず、知事を罷めたる後、家禄の若干を割きて、中津市学校を創立し、以て英学及び日新の諸学科を研究せしめ、天保義社を興して、士族の緩急に資し、開運社を設けて、子弟の育英を企て、田舎新聞(明治9年に中津にて村上田長により創刊、自由民権・主権在民を唱える)に補助して、人智の開発に努む。凡て旧藩に対する啓蒙誘導の至情頗る濃かなりと謂ふべし。其の米国より帰朝するに及んでは世態を冷視・静観し、官途に^{おもむ}趨かずして、東京府議員に列し、次いで東京府芝区長の職に就き、区の爲めに福利増進を企画・施設するの

所少しとせず。偶ま東京府知事芳川顕正と議協は、在任僅に一年有余、区民大に之を惜む。明治十七年四月、著者（黒屋直房）、東京へ留学し、初めて、公に謁す。一見旧の如く諄々として、激励の言辞を賜ふ。是歳十一月廿六日、病を以て溘焉として、卒す。聲音尚ほ、耳にあり、嗚呼悲哉。時に官、将さに公を拔擢して、特命全権公使に任じ、北米合衆国に駐劄せしめんとして而して及ばず。知る者、痛く之を遺憾とする所、蓋し計り知る可らざるものあらん。訃報一たび伝はるや、満都の新紙挙りて弔意を表して惜しむ。中に就き朝野新聞？如きは、華族中一あり二なきの士を亡ひたりと悲痛の辞を掲げたり。以て其如何に惜まれしかを知るべし⁽²³⁾。

中津藩の制度改革に取り組み明治3年頃16歳から30歳で夭折するまでの昌邁の短い経歴、「府県隷属者の農商の籍に入らんとする者に資金を貸与するの制を定めたる」「天保義社を設立し、旧藩士族の緩急に應ぜしむ」「中津市学校を開始し、日新・文明の学事を講習するに供す」「米国ヒラデルヒヤへ留学」「開運社を設け、校資の残部を以て育英の資に利用せんとし、郷土秀才の留学費に充当す」「態度平民的にして、尊大・倨傲の習気なし」「官途に趨かずして、東京府会議員に列し、次いで東京府芝区長の職に就き、区のため福利増進を企画・施設するの所少しとせず」などに、一環して福沢の理念・思想が色濃く投影されている。元壺岐派鳥津祐太郎が仲介となって福沢が昌邁及び「御上通りお上どおの人」と接近し、さらに藩制度改革に係わっていくのは、鳥津からの要請の根本が新時代に対応した藩制改革であったので、当然のことであった。維新後も封建制度・領主制は依然として存在している以上、改革は、藩身分最上位に位置する藩主昌邁から発せられる形を取らなければ、実施されない。昌邁は、自らの藩主権威を用いて、自らの存立基盤である藩制度・封建制度を解体していくという日本近代化の普遍的特質ともいえる逆説的な使命を担うことになる。福沢が具体的かつ本格的に藩制度改革に関与するのは、明治3年頃であることが、『福翁自伝』の次の福沢の述懐からわかる。

ソコデで私（福沢）が、明治三年、中津に母を迎へ行たことがある、所

が其時は、藩政も大いに變つて居まして、福沢が東京から来たから話を聞かうではないかと云ふやうな事になつて、家老の邸に呼ばれて行た。所が、藩の役人と云ふ有らん限りの役人重役が皆其処に出で居る。案ずるに、私が行たらば、^{さぞ}嘸ドウも大変な事を云ふだらうと待受けて居たに違ひない。夫れから私が其処に出席すると、重役達の云ふに、藩はドウしたら宜からうか、方向に迷つて五里霧中なんかんと、何か心配さうに話すから、私は之に答へて、イヤもう是れはドウするにも及ばぬことだ、能く諸藩では、或は禄を平均すると云ふやうな事で大分騒々しいが、私の考へでは、^{なん}何にもせず今日此儘で、千石取て居る人は千石、百石取て居る人は百石、太平無事に悠々として居るが上策だと、^{その}其説を詳に陳べると、列座の役人は大層驚くと同時に、是れは々々穩かなことを云ふもの哉と云はぬばかりの趣で、大分顔色が宜い。夫れから段々話が進んで来た所で、私は一つ注文を出した。今云ふ通り、禄も身分も元の通りにして置くが宜からう、ソレは宜しいが、茲に一つ忠告したいことがある。今、此中津藩には小銃もあれば大砲もあり、武を以て国を立てやうと云ふ其趣はチャント見えて居るが、併し今の藩士と此藩に在る武器で以て、果して戦争が出来るかドウか、私はドウも出来ないからうと思ふ……**ダカラ寧ろ此鉄砲を皆売て仕舞ひたい……**一切売て仕舞て、昔の琉球見たやうになつて仕舞ふが宜い……**そうして一方に於ては、ドウしても此世の中は文明開化にあるに極まつて**から、**学校を拵へて、文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云ふ方針を採るが一番大事である……**新政府は海陸軍を大に改革しやうとして、金がなくて困て居る、ソコで一片の願書なり届書なり認めて出して見るが宜しい、其次第は、此中津藩は武備を廢したために年々何万円と云ふ余計な金がある、此金を納めましたから、政府の方でドウでも為すつて下さいと斯う云へば、海陸軍では大に悦ぶ……爾うすば、**独り政府が悦ぶのみならずして、中津藩も誠に安楽になる、所謂一挙両全の策であるから爾う遣いなさいと云た⁽²⁴⁾。**

福沢は明治2年(1869)に、版籍奉還に應ずるよう、すでに、新政府へ

は幕臣を辞し「帰農して平民なる」旨を届け（福沢は中津藩士であると同時に元治元年〈1864〉に幕府外国方として幕臣に召し抱えられた）、「大小棄て、丸腰」になり、中津藩からの六人扶持も辞していた⁽²⁵⁾。明治3年に、福沢が中津藩の、封建的身分制度にしがみつくと因循姑息な「役人重役」達に対して、「何にもせず^{なん}に今日の此儘で、千石取て居る人は千石、百石取て居る人は百石、太平無事に悠々として居るが上策だと」といけしゃあしゃあと「陳べ」た時には、福沢は翌年実施の廃藩置県に基く藩・士族身分の廃絶の方策、「士・卒の帰農・商」の必然を明確に認識していた。「何にもせず^{なん}に今日の此儘で……」との謂は、無用な混乱を避けるための方便であった。その上で、福沢は、藩所有の「鉄砲を皆売て仕舞ひ」その代りに、「ドウしても此世の中は文明開化にあるに極ま^きつて居るから、学校を拵へて、文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云ふ方針を採るが一番大事である」と提案する形で、く間もなく廃藩となった後は、軍事は中央政府が一括統制するところとなり、従来の藩・地方単位の軍事は無意味となり、地方では「文明開化」に対応した学校教育が重要となることを、「役人重役」達に暗示しているのである。この時点で福沢は、昌邁に対する大きな影響力を持つ相談役として深く接近していたのである。封建的身分制度にしがみつくと因循姑息な「役人重役」ゆえに、彼らは、身分最上の藩主昌邁が発する「藩士・卒の農商の籍に入るを許す」の命には、まったく抵抗できず順々と従うしかないことを福沢は熟知していたのである。明治4年の廃藩置県に応じた、「藩士・卒の農商の籍に入るを許す」令、「府県隷属者の農商の籍に入らんとする者に資金を貸与するの制」、そして最後は、昌邁自らが「中津藩知事を免ぜらる」と締めくくる、昌邁による一連の士族帰農商策に相談役としての福沢の強い影響を容易に読み取ることができる。

そうして、中津藩知藩事罷免後の、「天保義社を設立し、旧藩士族の緩急に応ぜしむ」「家禄を割きて、中津市学校を開始し、日新・文明の学事を講習するに供す」「米国留学」との昌邁の一連の動向にも福沢の理念の影響が大きく投影されている。特に、昌邁の家禄（旧藩主・華族は石高の十分の一

を禄として新政府から支給された)の一部を割いて「日新・文明の学事を講習するに供す」べく創設した中津市学校(廣池千九郎少年もここに学ぶ)と昌邁アメリカ留学は、福沢が、明治3年に中津藩の「役人重役」達に開陳した「まどうしても此世の中は文明開化にあるに極まつてるから、学校を拵へて、文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云ふ方針を採るが一番大事である」がほぼそのまま実施されたものである。黒屋『中津藩史』は、中津市学校の概要について次のように記している。

明治四年十一月、三ノ丁、逸堂老公(奥平昌服)の旧隠殿に中津市学校を創立す。是歳、廢藩置県に際し、旧藩知事昌邁公、大に士族の前途を憂慮し、子弟をして有用の新知识を習得して、独立自営の生計を立てしめんとし、毎年家禄の五分之一、即ち米一千六十石宛を出資し又天保義社の資金中二万金を割かしめ、之を以て校費に充当する事となし、自ら市学校記を述べて曰く「……学問は身の為にするべきなり、人の為にするにあらず、況や一時職分の輕重に由て学問に勉不勉のあるべきに非ず。又政府に願ひ、外国の遊学を決したるは、願くは旧藩の士民、余(昌邁)が心事を察して、此度の挙動を怪しむ勿れ。独事を為すは衆と共にするの楽しきに若かず。余此度、独外国に遊学すれども、旧藩内の士族も余が志を助け、余が学ぶ所の道を学ばんとするは、固より願ふ所なれば、本県の吏人に謀り、年々家禄の内、五分之一を費し旧藩士の積金(天保義社の資金)に合して、文学の資となし、此度中津に一処の洋学校を開き、其外、当県内の諸方に郷校を設くるの議を決したるは、旧藩の士族は勿論、百姓町人も余が微意を体して、勉強を致し、三、五年の後、余も亦外国より帰り、互に学業上達の上、再会致すべき事、今より楽しむ所なり云々」。是に於て、福沢諭吉、小幡篤次郎、浜野定四郎等在京の先輩は、中津の旧官員及市学協議人等と相談し本校の組織学制を決定し、本科別科の二大科に分ち、本科は英書により、別科は訳書により、欧米の国勢・歴史・政治・経済・究理の諸課目を主とし、并に和・漢・欧米の簡易なる歴史・地理、欧米一般の網目的国勢の外、裁縫・諸礼式等、女子必須の技芸及算数・習字を教授し又付属小

学校は本校へ進入するの予備科となせり。斯くの如くして、市学校の開設さるるや、講師として、福沢・小幡・浜野の諸先輩及び猪飼麻次郎・須田辰次郎・中上川彦次郎・手島春司・野本某其他中津出身の慶応義塾社員交互、東京より出張して、英学を教授し……英学の教員は、講学の傍、師弟相率ひて会議法を究め又演説会討論会を催す等、大に世潮に順応して新智識の開発・啓明に勉めたるを以て、新学問を好むの青年学徒は九州諸国は勿論四国・中国、遠くは青森・仙台地方より来集せり。而して洋書の類及訳書の備付、多く教科書は悉く生徒に貸与し又諸種の新器械を使用して究理を説示するが故に、便利にして新奇の教授法を伝聞して年々隆興に赴き明治六、七年より八、九年に至るの交は最も盛大を極め、全校の生徒千人に近く、関西第一の文明的学校を以て、称せらる。……各室の結構、善美にして、築山泉池の巧妙なる廣大偉麗の設備は邦内、之に比すべき校舎なしとの評ありたり⁽²⁶⁾。

黒屋『中津藩史』では（廣池『中津歴史』でも同じ）、上の記述に続いて、『旧藩情』で中津市学校について福沢が記した次の箇所を長く引用している。

明治四年廢藩の頃ろ、中津の旧官員と東京の慶応義塾と商議の上、旧旧事の家禄を分ち、旧藩の積金と合して洋学の資本と為して、中津の旧城下に学校を立て、之を市学校と名けたり。学校の規則、固より門閥貴賤を問はずと、表向の名に唱るのみならず、事實に此趣意を貫き、設立の其日より釐毫も仮す所なくして、恰も封建門閥の殘夢中に、純然たる四民同権の一新世界を開きたるが如し。蓋し慶応義塾の社員は、中津の旧藩士族に出る者多しと雖ども、從來少しも其藩政に嘴を入れず、旧藩地に何等の事変あるも、恬として呉越の觀を為したる者なれば、往々誤て薄情の譏は受るも、藩の事務を妨げ其何れの種族に党するなど、評せられたることなし。故に此市学校を設立するにも、真に旧藩地一般の為にするの事實明白にして、何等の陋眼を以て之を視るも、上士を先にすると云ふ可らず、下士を後にすると云ふ可らず、其目的とする所は、正しく中津旧藩の格式りきみを制し、之を制了して共に与に日本社会の虚威を圧倒せんとするもの、如

くにして、藩士の此学校に帰すると否とは、其自然に任したりしに、士族の上下に別なく、漸く学に就く者多く、就中、上等士族の有力なる人物にて、其子弟を学校に入る、者も少なからず。既に学校に心を帰すれば、門閥の念も同時に断絶して其痕跡を見る可らず。市学校は、恰も門閥の念慮を測量する試験器と云ふも可なり。[余輩固り市学校に入らざるものを見て悉皆これを門閥守旧の人と云ふに非ず。近来は市校の他に学校も多ければ、子弟のために適當の場所を選ぶは全く父母の心に存することにして、之が為、敢て其人物を軽重するには非ざれども、真に市校に心を帰して疑はざる者は、果して門閥の念を断絶する人物なるが故に、本文の如く之を証するのみ。] 下等士族の輩が、上士に対して不平を抱く由縁は、専ら門閥虚威の一事に在て、然も其門閥の内にて有力者と称する人物に向て敵対の意を抱くことなれども、其好敵手と思ふ者が、首として自ら門閥の陋習を脱したるが故に、下士は恰も戦はんと欲して忽ち敵の所在を失ふたる者の如し。敵の為にも、味方の為にも、双方共に無上の幸と云ふ可し。故に云く、市学校は旧中津藩の僥倖を重ねて固くして真の幸福と為したるものなり⁽²⁷⁾。

中津市学校は、まさしく慶応義塾の姉妹校と評される内容・構成であることがわかる。学校の講師陣は、福沢自らと、小幡篤次郎（1842天保13～1902明治33／中津市学校初代校長後に慶応義塾塾長）・浜野定四郎（1845弘化2～1909明治42／慶応義塾初代塾長後に中津市学校校長）などの江戸の福沢塾の中津藩出身塾生と、中上川彦次郎（1854安政1～1901明治34／福沢諭吉の甥、後に時事新報社長・山陽鉄道会社社長を経て三井重役として三井の近代化・工業化改革をおこなう）ら中津出身の慶応義塾出身者で固められており、学校のカリキュラムは、「英学」「欧米の国勢・歴史・政治・経済・究理の諸課目」「和・漢・欧米の簡易なる歴史・地理、欧米一般の網目的国勢」など慶応義塾ですでに実施している福沢の洋学教育の内容そのままが移植されたものである。「新智識の開発・啓明」の場、「全校の生徒千人に近く、関西第一の文明的学校」となる中津市学校は、公式の創設の命と資金を出した

のは旧藩主昌邁であるが、その創設の発端は福沢の理念・思想に基づくものであり、その建学の理念・思想は福沢の理念・思想がぎっしりと凝縮されたものであった。中津市学校創設と同時に、率先して「新智識の開發・啓明」に努めるべく旧藩主昌邁自らがアメリカ留学をおこなうことを勧めたのは福沢であることは明らかである⁽²⁸⁾。昌邁は、慶応義塾に学び、終生、福沢の近く、「東京芝三田」に居て、福沢の影響を大きく受けて成長した。「官途おとむに趨かずして」「態度平民的にして、尊大・倨傲の習気なし」という昌邁の在り方には、私立を重視し生涯、「官途」に就かず、身分を笠に着た「尊大・倨傲」の「虚威」を何よりも嫌った福沢の在り方が大きく投影されている。「瘠我慢の説」の対極にあり、大なり小なり他を自己目的実現の手段とする政治性を忌み嫌う福沢が、少年藩主昌邁に接近し、昌邁への影響を通して、旧藩主昌邁を含めて旧中津藩丸ごとの「新智識の開發・啓明」化を実現するという、生涯唯一といってもよい、ある種の政治性をういたのは、そこに福沢の並々ならぬ強く深いこだわりがあったことの左証である。そのこだわりとは、福沢は、中津市学校創設を、その9年前の壱岐が主人公となった「亥年の建白事件」の下剋上の在り方の、福沢自身の理念・思想による超克として、取り組もうとしたことである。福沢にとって、「亥年の建白事件」は過去の終わってしまった出来事ではなく、中津市学校創設の試みは、「亥年の建白事件」の延長線上にあったのである。福沢の旧中津藩丸ごとの「新智識の開發・啓明」化、中津市学校創設への強く深いこだわりの根源には「亥年の建白事件」への強く深いこだわりがある。「学校（中津市学校）の規則、固より門閥貴賤を問はずと、表向の名に唱るのみならず、事実^{まこと}に此趣意を貫き、設立の其日より釐毫も仮す所なくして、恰も封建門閥の残夢中に、純然たる四民同権の一新世界を開きたるが如し」「此市学校を設立するにも、真に旧藩地一般の為にするの事実明白にして、何等の陋眼を以て之を視るも、上士を先にすると云ふ可らず、下士を後にすると云ふ可らず、其目的とする所は、^{まさ}正しく中津旧藩の格式りきみを制し、之を制了ともして共に与ともに日本社会の虚威を圧倒せんとするもの、如くにして」との福沢の中津市学校創設の理念の表

明は、下剋上としての「亥年の建白事件」への福沢の回答となっている。「上士を先にすると云ふ可らず、下士を後にすると云ふ可らず」として、下剋上の構図を超克し、「中津旧藩の格式りきみを制し、之を制了して其^{とも}に与^{とも}に日本社会（封建的身分制度）の虚威を圧倒せんとする」と、「格式りきみ」や「虚威」の根源となる、上士と下士を区分する封建的身分制度そのものの廃絶の実施を、政治的下剋上ではなく、「関西第一の文明的学校」の創設を通して断行することで、福沢は、「亥年の建白事件」を超克しようとしたのである。福沢の個人的な下剋上は、長崎蘭学修業時代に、内心で壱岐に対して「此猿松め、馬鹿野郎め」と罵倒した時、すでに終わっていたし、下剋上からは何も新しいことが生まれないこともよく認識していた。

そうして、中津市学校の教科書として著された『学問のすゝめ』は、福沢個人の思惑を超えて、全国的大ベストセラーとなり、これもまた、福沢の思惑を遙かに超えて、結果的に開明思想家福沢諭吉の名を、現在に至るまで確固たるものにして、紙幣の肖像に祭られる程にまでになるに至る。こうした維新後の福沢にとって重要事となる、旧中津藩丸ごとの「新智識の開発・啓明」化・中津市学校創設へと至る契機と経緯に壱岐の存在が色濃く影を落としている。旧中津藩丸ごとの「新智識の開発・啓明」化・中津市学校創設の起点となる「亥年の建白運動」を心ならずも惹起したのは壱岐であり、とりわけ壱岐の儀三郎（昌邁）擁立であった。福沢は、壱岐が擁立した昌邁に、旧中津藩要路島津祐太郎を仲介にして接近したが、島津は元壱岐派であった。そうして、福沢は、まるで江戸家老壱岐の役割を継承するがごとく、少年昌邁に大きな影響を与え、藩知事昌邁を通して、旧中津藩丸ごとの「新智識の開発・啓明」化・中津市学校創設を実施したのである。

次に重要なことは、壱岐失脚後、福沢が中津藩に影響力を持ちえるようになったのは、維新後ではなく、すでに維新以前からその萌芽があったことである。後述するように、ここにはまた、福沢のまったく知らないところで、福沢の周辺に薩州商社の影が落ちていたのである。福沢は、『福翁自伝』で次のように回顧している。

仙台藩の留守居役を勤めて居た大童^{おおわら}信太夫と云ふ人があつて、旧幕府時代から、私は其人と極懇意にして居ました。と云て、其人が蘭学者でもなければ英学者でもない、けれども兎に角に、西洋文明の風を好み、洋学書生を愛して楽しみにして居る所は、気品の高い名士と申して宜しい。当時諸藩の留守居役でも勤めて居れば、芸者を上げて騒ぐとか、茶屋に集まるとか、相撲を最辰にするとか云ふのが、江戸普通の風俗で、大童も大藩の留守居役だから、随分金廻りも宜かつたらうと思はれるに、絶えてそんな馬鹿な遊びをせず、唯何でも書生を養て遣ると云ふことが面白くて、書生の世話ばかりして、凡そ当時仙台の書生で、大童の家の飯を喰はない者はなからう。今の富田鉄之助を始め、一人として世話にならない者はない。所が幕末の時勢、段々切迫して、王政維新の際に、仙台は佐幕論に加担して忽ち失敗して、其謀主は但木土佐と云ふ家老であると定まつて、其人は腹を切て仕舞つた其後で、但木土佐が謀主だと云ふけれども、其実は謀主の謀主がある、ソレは誰だと云ふに大童信太夫、松倉良助（良輔）の兩人だと斯う云ふ訳けで、維新後其兩人は仙台に帰て居た所が、サア其仙台の同藩中の者から妙な事を饒舌^{しゃべ}り出した⁽²⁹⁾。

維新直後、仙台藩内で、維新体制に対応した御家安泰策を巡って、ある種の御家騒動が起こり、結果、仙台藩の保守派及び尊攘派は、姑息策として、奉行（他藩の家老に相当）但木土佐（1817文化14～1869明治2／大槻磐溪門下で奥羽越列藩同盟の中核を担い、東京に護送され斬罪に処せられる）ら洋学派・佐幕派の藩士に佐幕謀主のレッテルを貼り、彼らの首を新政府に差し出すべく、次々と処刑し始めた。洋学派・佐幕派で、奥羽越列藩同盟結成のため奔走した、江戸留守居役大童信太夫（1832天保3～1900明治33）と兵器奉行・軍艦奉行松倉良輔（1827文政10～1904明治37／恂。江戸で勝海舟と交流）は、身の危険を察知して、明治3年、仙台藩を逃れて、東京の、懇意の福沢のところ相談を請う顛末となる。藩の姑息策のためスケープゴートにされた点において仙台藩奉行但木土佐は、中津藩家老奥平壱岐を彷彿させるものがあるが、洋学について理解が深く「気品の高い名士」である仙台藩留

守居役大童信太夫は、元壱岐派の中津藩要路島津祐太郎を彷彿させるものがある。「西洋文明の風を好み、洋学書生を愛して楽しみにして居」り「書生の世話ばかりして、凡そ当時仙台の書生で、大童の家の飯を喰はない者はないからう」というように、大童が大いに世話をした富田鉄之助（1835天保6～1916大正5／勝海舟塾で蘭学・航海術・砲術を学ぶ）ら仙台藩士・洋学書生の内に、大槻文彦（1847弘化4～1928昭和3／国語学者・文学博士。日本最初の近代的国語辞典『言海』を編著・刊行する）がいた（この他に大童は高橋是清〈1854安政元～1936昭和11／二・二六事件で暗殺された政党政治最後の大蔵大臣〉の世話もした）。慶応3年末、京都で、当時21歳の洋学書生大槻文彦が、起草されたばかりの「薩州商社発端」「薩州商社条書」（福沢『西航記』での商社紹介からも少なからざる影響を受けている）を筆写した（本研究はこの筆写された「薩州商社発端」「薩州商社条書」を「大槻版」と称した）ことの契機は、江戸留守居役の大童が、幕末・維新前夜の政治的大混乱に際して、今後の仙台藩のとるべき政治的指針のための京都にての情報収集を大槻青年に命じたことにある（大槻青年は「薩州商社発端」「薩州商社条書」はじめ重要と思われる様々な文書を収集しては筆写し3巻本にまとめ、これを『慶応卯辰実記』と題して大童に提出した）。慶応3年6月、薩摩藩へと向かう途中の壱岐が、大坂の薩摩藩百間町屋敷にて、石河確太郎から渡され、大きな感動でもって手にとり閲覧した「薩州商社発端」「薩州商社条書」（慶応3年6月付で起草された）が筆写収録された『慶応卯辰実記』原本は、大童に提出された後も長く大童家が保管することになるのである⁽⁵⁰⁾。大槻文彦の父大槻^{ばんけい}磐溪（1805享和1～1878明治11／磐溪の父は、江戸に蘭学塾芝蘭堂を開設し、蘭学入門書『蘭学階梯』など著した江戸期蘭学興隆の功労者、仙台藩蘭学者大槻玄沢〈1757宝暦7～1827文政10〉）は蘭学者にして儒学者であり、仙台藩における奥羽越列藩同盟の思想の支柱的存在となる。そのため、維新後、磐溪は、仙台藩から大童・松倉らと同様の弾圧・仕打ちを受ける（斬罪リストに載る）が、大童・松倉と違うのは、東京に護送され投獄・収監されることになることである（処刑されずに釈放されるが）。福

沢は、大槻磐溪とは深い交流があったし、大槻文彦についても「大槻の倅」(『福翁自伝』)⁽³¹⁾として周知していた。以上の大槻磐溪・文彦父子及び大槻版のことについては、次回以降本稿で詳述したい。

福沢が「癩癘」を起こしたのは、維新後、「佐幕論」の責任を、江戸で幕府と交渉し佐幕派を支援した大童や松倉良輔らに転嫁し、スケープゴートとして処罰して済まそうとする仙台藩の「姑息の策」に対してである。これは「亥年の建白運動」において壺岐が、中津藩の「姑息の策」によって、スケープゴートとして事実上藩から追放されるという構図と通底している(敗戦降伏側が一部の者を戦争指導者・極悪人のレッテルを付してスケープゴートとする構図は78年後の太平洋戦争敗戦の際、そっくり再現される)。しかも仙台藩は、巷説、「佞悪姦横の邪心」の極悪人と評される伊達家一門伊達兵部と家老(奉行)原田甲斐が登場する寛文11年(1671)のいわゆる「伊達騒動(寛文事件)」⁽³²⁾、それを基にさらに脚色した御家狂言『伽羅先代萩』⁽³³⁾の舞台であり、奥平昌邁の出身である宇和島藩伊達家(伊達政宗の子、伊達秀宗が初代宇和島藩主)と仙台藩伊達家は兄弟(本家・分家)関係の系譜にある。維新に際しての仙台藩御家騒動では、洋学派・佐幕派の但木土佐とその師大槻磐溪(文彦の父)や大童・松倉らが「佞悪姦横の邪心」の極悪人とされた。奥平家一門にして家老の壺岐も、巷説、「亥年の建白運動」において、「伊達騒動」『伽羅先代萩』における伊達兵部・原田甲斐のごとく評されていたものと理解できる⁽³⁴⁾。父磐溪の釈放のため、東奔西走した大槻文彦は、明治42年(1909)に、巷説・流説の不正確さを打破すべく大著『伊達騒動実録』を刊行した⁽³⁵⁾。大槻文彦は明らかに、維新の際の父磐溪の過酷な命運と伊達騒動を重ねている。

権力者の一部を「佞悪姦横の邪心」の極悪人に脚色して(一方でこれら極悪人に対決する英雄の存在も脚色して)、彼らを「無情残酷」な「姑息の策」で断罪・追放することで御家・藩の安泰を計るという御家狂言の構造を福沢は知悉している。福沢は、仙台藩の大童らに対する「無情残酷」な「姑息の策」の一件から、「亥年の建白運動」での壺岐に対する中津藩の「姑息の策」

の処置を想起したに違いない。

『福翁自伝』での福沢の回顧は次のように続く。

実に困つた身の有様だと、毎度兩人（大童と松倉）と話す中に、私（福沢）は兩人の為に同情を表すると云ふよりも、寧ろ此仙台藩士（大童らをスケープゴートとして処罰しようとする仙台藩の連中）の無情残酷と云ふことに酷く腹が立ちました。弱武者の意気地のない癖に酷い事をする奴だ、ドウかして呉れたいものだと思ふ考へた所で、夫れから私が大童に面会して、ドウか青天白日の身になる工夫がありさうなものだ、私がつ試みて見やう、何でも是れは一番、藩主を引捕へて談ずる（伊達宗敦と強引に面会して直談判する。ただし維新後の形式上の仙台藩主は伊達宗基となる）が上策だらうと相談して、私は大きに御苦労な訳だけれども、日比谷内にある仙台の屋敷に行て、藩主に御目に懸りたいと触込んで、藩主に面会した。ソコで私が、此藩主に向て大に談じられる由縁のあると云ふのは、其藩主と云ふ者は伊達家の分家宇和島藩から養子に來た人で、前年養子になると云ふ其時に、私が与つて大に力がある、と云ふのは、当時大童が江戸屋敷の留守居で、世間の交際が広いと云ふので、養子選択の事を一人で担当して居て、或時私に談じて、「お前さん（福沢）の処（中津藩奥平家）の殿様（儀三郎・昌邁）は宇和島から來て居る、其兄さんが国（宇和島）に居る、其人（昌邁の兄）の強弱知愚如何を聞いて貰ひたい」と云ふから、早速取調べて返事をして、先づ大童の胸に落ちて、今度は宇和島家の方に相談をして貰ひたいと云ふので、夫れから又、私は麻布竜土の宇和島の屋敷に行て、家老の桜田大炊と云ふ人に面会して其話をする、一も二もなく、本家（仙台伊達家）の養子にならうと云ふのだから、唯有難いと即答、一切大童と私と二人で周旋して、夫れから表向きになつて、貰つた其人（伊達宗敦）が、其時の藩主になつて居るので、ソコで私が其藩主に遇ふて、「時に尊藩の大童、松倉の兩人が、此間、仙台から逃げて參つたのは、彼方に居れば殺されるから此方に飛出して來たのであるが、彼の兩人は今でも見付け出せば、藩主に於て本当に殺す気があるのか、但

し殺したくないのか、ソレを承りたい」「イヤ決して殺したいなど、云ふ意味はない」「然らばモウ一步進めて、お前さんにはソレ（大童と松倉）を助けると云ふ工夫をして、ドウかして、命の繋がるやうにして遣ては如何で御座る。実はお前さんは、大童に向て大に報いなければならぬことがある。知るや知らずや、お前さんが仙台の御家に養子に来たのは斯う云ふ由来、是れ々々の次第であつたが、夫れを思ふても殺すことは出来まい。屹度御決答を伺ひたい」と、顔色を正しくして談じた処が、「決して殺す気はないが、是れは大参事に任かしてあるから、大参事さへ助けると云ふ気になれば、私には勿論異論はない」と云ふ。マダ若い小（子）^{ママ}供でしたから、何事も大参事に任かしてあつたのでせう。「然らばお前さんは確かだな」「確かだ」「ソレならば宜しい、大参事に遇はう」と云て、（大参事は）直ぐ側の長屋に居たから、其処へ扨込んだ³⁶。

こうした福沢の大童・松倉助命の東奔西走が功を奏して、大童らは仙台藩の圧力から赦免されることとなる。「兩人の爲めに同情を表すると云ふよりも、寧ろ此仙台藩士の無情残酷と云ふことに酷く腹が立ちました」というところに福沢のこだわりがあり、かつて、「亥年の建白事件」での「遂に姑息の策に出で、其執政（^{ししぎ}壱岐）を黜けて一時の人心を慰めたり」という中津藩の処置の仕方に対して、福沢が「酷く腹」を立てたであろうことは確実である。福沢は大童とは生涯、深い親交を結ぶのであるが、注目すべきは、昌邁の中津藩主就任・壱岐失脚後、伊達宗城の次男（五男の説もある）、昌邁の兄、伊達宗敦（1852嘉永5～1907明治40）が次代仙台藩主に就任するべく、仙台藩主伊達慶邦（^{よしくに}1825文政8～1874明治7）の養子となる縁組交渉が、「一切大童と私と二人で周旋して」というように、仙台藩側大童と中津藩側福沢の共同作業で遂行されたことである（慶応4年3月に伊達宗敦は養子縁組により嫡子となるが、維新後養父慶邦の奥羽越列藩同盟についての責任に連座し謹慎・廃嫡となり、14代仙台藩主は慶邦の四男、幼少の伊達宗基が就く。しかし、明治3年に宗敦は、謹慎が解かれ、仙台藩主宗基のまま、仙台藩知藩事に就いた）。これは、壱岐失脚後、福沢は、輕輩身分ではあるが、維新

前すでに中津藩に対して、特に島津祐太郎を通して、一定の影響力を持していたことを示唆している。仙台藩という実高百万石近い評価のある大藩の新藩主擁立に、無力なただの平下士が参画できるはずがない。実は、福沢は、壱岐失脚以前、「亥年の建白事件」以前に、すでに中津藩要路、壱岐派の島津祐太郎とも交流があった。津島は200石の上士で、「亥年の建白事件」に際しては、壱岐に家老職退役を勧める役割を果たした。福沢は、会社制度の啓蒙的紹介の契機となった、幕府の文久遣欧使節団（本稿(1)参照）随行の際、文久2年（1862）4月11日付で、ロンドンから島津宛に書翰（封筒表には「島津先生 福沢諭吉」とある）を郵送している。その書翰の箇所は次の通りである。

小生義も今般は幸に西航の員に加はり、再び得べからざるの好機会、右に付旅行中、學術研究は勿論、其他ヨーロッパ歐羅巴諸州の事情風習も探索致すべき心得にて、已に仏英両国にても諸方に知己を求め、国の制度、陸海軍の規則、貢税の取立方等ききただ聞糺し、一見瞭然と申すには参りがたく候得共、此まで書物上にて取調候とは百聞一見しかに若ずの訳にて、大に益を得候事も多く御座候。就ては 御家（中津藩奥平家）おゐても、兼て御軍制御変革、洋学御引立等の御仕組は之有り候得共、遅々今日に至り、廉立ち候義も之無く、右は私任府中、彦三郎（中津藩士岡見彦三郎）殿始め、知己の人えは議論いたし候ことも御座候得共、多年姑息の風習、俄に改め難く、徒に空論に属し申し候。しかし併、今般諸外国の事情、篤と相察し候所にては、本邦も此までの御制度は抛無きも、御変革之無くては相済み間敷、左候節は、諸藩も其分したがに随ひ、夫々改制之有るは必然の義、肥前（佐賀藩）など抔は疾く（素早く）其御見込之有る義と相見へ、此度も家来三人医者、砲術家、蘭学者使節従僕え御頼込み相成り、全くヨーロッパ歐羅巴諸州実地研究の為めと存じられ候。何卒 御家にては、肥前侯え先鞭を着けられざる様、大変革の御処置之有り度、私義も微力の及ぶ所は勉強仕り、亡父兄の名を損ぜらる様仕り度丹心に御座候。右に付、先づ洋法（洋式の方法）を採用するには、実地の探索は勿論候得共、逆も壱人にて僅の時日に尽しがたく、後は書籍取

入れ候より外手段之無く、既に当府ロンドンにて英書も大分相整候得共、尚又和蘭え参候は、十分に買取候積つもりに御座候。江戸にて頂戴仕候手当金は残らず書物相整、玩物一品も持帰らざる覚悟に御座候。御在所表にも医学所御取建相成り候由候得共、よじ迎も洋書杯御備は未だ出来間敷、私帰府の上は、先づ一通り、辞書、究理書、医書類、其外砲術書等は、御在所えも相揃候積に御座候。其段は有志の人え御話置下されるべく候。い才（委細）の義は帰府の上、建白も仕るべく候得共、先づ当今の急務は富国强兵に御座候。富国强兵の本もとは人物を養育すること専務に存じ候。此まで御屋敷にて人物を引立には、漢籍よむを読よむを専務と致し来り候得共、漢籍も読様にて実地に施し用をなし申さず。……左候得ば、富国强兵の本、人物を養育するは、必ず漢籍を読にも在らざること、存たいじんぜざれ候。大人は中津にて人望を得候こと、て、事を始め候にも、稍やや容易の御場合之有るべく、何卒、右の件に御考慮下され、行おこなべき事候は、一日も早思召立はやくおほしめしたち、実地に施し用を為し候人物出来候様致し度、存じ奉り候。右は私帰府の上、申上げ候ても宜敷義候得共、帰帆の期も未だ確と定まらず、且思付候事に付、一日も早くわざと存じ、業と申上げ候義に御座候⁽⁶⁷⁾。

長く引用したのは、「い才（委細）の義は帰府の上、建白も仕るべく候得共」と福沢がいうがごとく、この書翰が一個の堂々たる藩政改革建白書草案になっているからである。福沢は、『福翁自伝』では、「藩の政庁に対しては誠に淡泊で、長い歳月の間、只の一度も建白なんと云ふことをしたことはない。能く世間にある事で、イヤどうも藩政を改革して洋学を盛んにするが宜いとか、兵制を改革するが宜いとか云ふことは、書生の能く遣ることだ、けれども私に限り、只の一度も云出したことがない」と、駄目を押して、書生のやるような藩政改革建白など、一度もおこなっていないと強調していた。しかし、福沢は、この津島宛書翰で、「御家（中津藩奥平家）おゐても、兼て御軍制御変革、洋学御引立等の御仕組は之有り候得共、遅々今日に至り、かど廉立ち候義も之無く」ということ、まさしく「藩政を改革して洋学を盛んにするが宜いとか、兵制を改革するが宜いとか」ということが眼目となる、洋

学派・改革派としての若き福沢の面目躍如たる、藩政改革建白を中津藩要路に提示していたのである。もちろん福沢は、自分が建白するものは従来の「従に空論に属」する「書生論」（本稿注37参照）とは次元がまったく違うという自負を持っている。その意味では「書生の能く遣ることだ、けれども私に限り、只の一度も（書生談義の「空論」の建白などということ）を）云出したことがない」というのはある意味本当なのである。福沢が島津宛書翰で特に強調したのは、「先づ当今の急務は富国強兵に御座候。富国強兵の本は人物を養育すること専務に存じ候。此まで御屋敷にて人物を引立には、漢籍を讀を専務と致し来り候得共、漢籍も読様にて実地に施し用をなし申さず」というように、漢学はもはや、現在の急務である「富国強兵」に関して「実地に施し用を」なさないことを前提に、漢学に変わる洋学に基づく人材育成、「先づ洋法を採用する」こと、さらにいえば「洋学御引立等の御仕組」の総決算である洋学校の開設の提唱であり、原理的には、それ以降の福沢の一貫した理念となっているものである。文久2年4月11日付島津宛福沢書翰で表明した藩政改革の眼目「御軍制御変革、洋学御引立等の御仕組」についてのことは、先に見た、明治3年（1870）の帰省中の中津での藩重役を前にした、藩政改革の方針に関する福沢の演説の主意「ダカラ寧そ此鉄砲を皆売て仕舞ひたい……そうして一方に於ては、ドウしても此世の中は文明開化にあるに極まつているから、学校を拵へて、文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云ふ方針を採るのが一番大事である」と、9年後の「文明開化」の環境の中でアレンジされ、さらに明治4年（1871）、廢藩置県（地方の軍制は廢され軍制も中央集権化される）を経て、洋学校・中津市学校の開設となって実現化されたものともいえるのである。

果たして、福沢は、「い才（委細）の義は帰府の上、建白も仕るべく候」というが如く、帰国後、正式の詳細なる建白書を提出したのであろうか。福沢の主観では「只の一度も建白なんと云ふことをしたことはない」「私に限り、只の一度も云出したことがない」という執拗な程の否定となっているが、実質的には先の島津宛書翰での理念を基本としたより詳細でより具体的な建

白を、福沢はまず島津や岡見など壱岐派要路に対して何らかの形で発露したと考えてしかるべきである。「一日も早くと存じ」と遙か異郷で焦燥の思いで、島津宛書翰で示唆した建白の草案は、帰国後速やかに完成させ提示されてしかるべきであるからである。その際、正式に刊行していない自家版の『西航記』の複製も提出したものと考えられる（島津・岡見は間違いなく『西航記』を閲覧している）。近代西洋の進んだ諸制度の紹介・啓蒙書である『西航記』は、福沢の建白に一層の説得力を与えたはずである。福沢が『西航記』をまとめた動機の大きなひとつに、この中津藩政改革建白があるものと推測できる。

福沢の建白は壱岐に提出した建白でもあったのである（商社〈会社制度〉を紹介した『西航記』も壱岐は当然閲覧している）。それは、西洋現地から発せられた洋学に基づく藩政改革の建白である。福沢には、蘭学者でもある藩最大の権力者奥平壱岐が、その的確な実行力はともかく、洋学に基づく藩政改革の建白の趣旨に大きく共鳴することの確信があったであろう。福沢建白に対して壱岐はどのように対処したかは、不明であるが、この約1年後に、反洋学派・尊攘派の水島六兵衛ら下士層による、洋学派・開国派の壱岐派に対する揺さ振りである「亥年の建白事件」が起こるのである。水島らの建白にも「武備御充実は御声聞のみにて、新古混乱致し」「武備御充実は当今の御急務に候得ば……是等の儀（武備御充実の儀）も捨置き」と、福沢建白での「兼て御軍制御変革……遅々今日に至り、^{かど}廉立ち候義も之無く」と共通するものがあるが、大きく違うことのひとつは、福沢建白は「先づ洋法を採用する」ことに基づく藩政改革案であるのに対して、水島らの建白は、せいぜい「武備御充実は……新古混乱致し」というのみで、洋学・洋法の導入についてまったく言及していないことである（その背後には洋学に対する拒否反応が存在している）。もっとも水島ら下士層の洋学・洋法についての知識は、皮相・風聞の域を出るものではない。むしろ、当時の攘夷的環境にある国内では一般的になっていた、皮相的風聞や偏見・無知に基づく、洋学・洋法に対する反感・嫌悪、ある種のショービニズムを水島ら下士層も抱いていたも

のと理解できる。水島ら下士層が建白で強調したのは、「(藩主奥平家は) 先年以来譜代諸侯の魁首として公武御合体・尊王攘夷の御周旋御座有り度存じ奉り候処、其砌より右等の儀(公武合体・尊王攘夷の周旋)、絶て承知奉らず……御家(藩主奥田家)の恥辱」ということであつた。水島ら下士層らは、その建白で、「殊に壹岐(壹岐)殿御役の後は、偏頗私論の義を以て執政其他正義の御方は御退役等に御取計成され、佞奸を以て御昵懇の士を深く御結び」と強く批判している。そこで攻撃されている壹岐の「偏頗私論」の内には、壹岐の個人的性格からくる我儘勝手な振舞だけではなく、洋学・洋法を重視した(水島らからすると甚だ「偏頗」な)壹岐の人材抜擢(下士福沢に江戸藩邸内で洋学塾を主宰させたことも含めて)・政策決定が含まれているであろう。「佞奸を以て御昵懇の士を深く御結び」とされる「御昵懇の士」の内には、福沢が「彦三郎殿始め、知己の人えは議論いたし候ことも御座候」という、鳥津祐太郎や岡見彦三郎など福沢の洋学・洋法に基づく藩政改革案に深く共鳴できる、開明的な藩要路がいるのは明白である。壹岐派は、頭目の壹岐自身がそうであるように、洋学派の側面を持っており、藩主奥平昌服の開国方策の下で、洋学導入に基づく改革派でもあつたのである。嘉永6年(1853)に江戸湾に強行来航したペリー提督兼外交官からフィルモア大統領の国書(交易要望、アメリカ船への薪・水・食料補給及びアメリカ船員の保護のための一港用意の要請などを内容とする)を強行受理させられた幕府は、〈国書への回答を求めて翌年再来航するペリーに対していかなる対応をすべきか〉について、まったく異例なことに、身分制を越えて広く意見を求めた。諸藩主に対しては、これもまったく異例なことに、親藩・譜代・外縁関係なく、全国諸藩主から意見を求めた。一切の正式外交文書を受理しないとする鎖国原理と譜代のみによる幕政が動揺し始め、既成秩序全般が急速に崩壊へと傾斜していくのであるが(この既成秩序の動揺と崩壊によって下士次男の21歳の福沢諭吉もペリー来航の翌年、生まれた初めて、箱庭のような中津を出て、長崎に蘭学修業に行くことができた)、譜代である中津藩主奥平昌服が幕府に提出した意見書の一部は、次の通りあつた。

一体通信交易と申す事は、今の世に至り候ては、国の貧富強弱に拘らず必ず致さずては相叶はざる理合の事と存じ奉り候。たとひ如何様の富国に御坐候共、自国の土物どぶつを以て自国の民を養ひ候へば、其余の土物は少分にこれ有るべし。右小分の土物を以て海陸の二軍を整へ、国威を張り候て万国の侮あんどりを禦ふせぎ候事は、所詮自国限りの力にては出来難く、これにより世界一統ふりあいの振合（状況）、諸国と通信結好致し候て互い相扶たすけ、交易を開き候て大利を興し、其利益を以て兵備を整へ国力を強く致し候義かと勘考仕り候へば、是迄の御旧法（鎖国の国是）を御改革成され、航海交易の大利を御興し成されず候はでは、御兵備御行届き成されず、恐れながら御国威次第に相縮み、海防の御苦勞永く相止み申すまじく存じ候⁽³⁸⁾。

「此度亜墨利加あめりかへ通商差し免され候はば、其他の諸夷よりも同様相願ひ、終に日本の国力通商の為に相衰へ候様成り行き申すべきや……かつ日本は弘安度こうあんど（蒙古襲来による弘安の役）其外夷あんどへ対し武威を示し、国勢ますます熾昌しじやうに相成り候儀もこれ有り、かたがた願の趣夷賊共の心肝を打挫きゆき候程にも堅く御断り仰せ聞され……後年外夷の覬覦きゆう相絶ち候様仰せ付けられ候方、かへつて万全の御策にはこれ有るまじきやと存じ奉り候⁽³⁹⁾というように、西洋諸国を「諸夷」「夷賊共」「外夷」と呼んで憚らず、「日本の国力通商の為に相衰へ」という認識の基に「外夷へ対し武威を示し」「夷賊共の心肝を打挫き候程にも堅く御断り」と断固たる攘夷・鎖国堅持を主張する、同時期に幕府に出された、外様・長州藩主毛利慶親の意見書のあからさまな硬直性と、「一体通信交易と申す事は、今の世に至り候ては、国の貧富強弱に拘らず必ず致さずては相叶はざる理合の事と存じ奉り候」という認識の基に「世界一統の振合、諸国と通信結好致し候て互い相扶け、交易を開き候て大利を興し」とする、奥平昌服意見書の世界認識の柔軟性とを比すれば、奥平昌服意見書の持つ開明性は際立っている。譜代の立場から奥平昌服意見書は、「是迄の御旧法を御改革成され」と鎖国の抜本的緩和を幕府に提案しているのである。奥平昌服意見書の草案作成は、洋学派・開国派の改革派家臣によるものであろうが（毛利慶親意見書の場合も逆の立場で同様である）、それ

を認可したのは昌服自身であり、幕末期中津藩の意思表示となっていることは確かである。この中津藩の開国策・開明策の姿勢を背景にして、下士次男福沢の長崎蘭学修業も許容された。「是迄の御旧法を御改革成され」と幕府に迫る開明的姿勢は、当然中津藩内における「是迄の御旧法」に対する「御改革」として反映されるはずである。

奥平昌服意見書から4年後、安政4年(1857)江戸詰家老に就任し、藩権力を掌握した壱岐(当時29~32歳)は、藩主昌服の下、開国・開明策を継承して藩内の「御旧法」の「御改革」に着手したものと理解できるのである。その質はともかく蘭学者でもある壱岐による、江戸詰家老就任=藩権力掌握は、奥平昌服意見書以来の開国・開明策の当然の帰結であったともいえる。壱岐の江戸詰家老就任の翌年安政5年、日本蘭学校の泰斗適塾の塾長福沢諭吉を大坂から召喚して江戸藩邸内に洋学塾(慶応義塾の起源)を主宰させたことは、壱岐派の改革の早速の実施といえる。福沢の文久2年4月11日付鳥津宛藩政改革案は、壱岐派の洋学導入に基づく藩政改革についての、「遅々」たる現状を叱咤し、一層の実施を促したものとといえる。この時期について、福沢は、「私(福沢)は毎度本人(壱岐)に逢ふて仮初にも怨言を云ふた事のない所ではない、態^{わざ}と旧恩を謝すると云ふ趣ばかり装ふて居る……御家老様と尊敬して居たから」(『福翁自伝』)と回顧している。したがって、こうした福沢と壱岐の関係の外観からしても、水島六兵衛ら反壱岐派からすると、同じ下士でありながら福沢は壱岐派末席と目されていたであろう。先にも述べたように、文久2年の福沢の中津藩政改革建白が実際に壱岐や中津藩政にどのような影響を与えたのはかは不明ではあるが、その1年後に水島ら下士層の反洋学派・尊攘派による「亥年の建白事件」が起きて、壱岐及び壱岐派は糾弾の対象となり、壱岐はまるでスケープゴートのように藩政から排除された。

「亥年の建白運動」とは、単なる下士層の上士層に対する下剋上ではなく、壱岐及び壱岐派(及び福沢の)の進めようとする洋学・洋法に基づく藩政改革に対する反動でもあったと理解することができる。中津藩の上士層に、壱

岐及び壱岐派の洋学・洋法に「偏頗」した藩の制度改革の動向に対して、反感・嫌悪を抱くものが多数存在してむしろ自然である。そうした保守派（いずれの改革にも本質的に無関係で、ひたすら自己保身のみを志向する）・攘夷派上士層の広範な支持があって、「亥年の建白運動」は、以前の時代では考えられないな程、下士層に対する弾圧がなく、遂行が可能となったのである。壱岐の排除は、特に保守派・攘夷派上士層の望みでもあったことは確実である。保守派・攘夷派上士層は、間接的に下士層を使って壱岐を排除したともいえるのである。また島津ら壱岐派要路も、福沢がいうような、壱岐個人の「大家の我儘のお坊さんで、智恵（他者を柔らかく包摂し組織を統率するような智恵）がない度量がない」という指導者としての器量の欠如を認めざるを得なかった。島津ら壱岐派要路も、よりふさわしき洋学派の指導者へと交替することを潜在的・顕在的に望んでいたとみてよい（福沢もそう望んでいたが、「一時の人心を慰め」るために、壱岐一人をスケープゴートとして追放するという、藩の「姑息の策」は許し難かった）。廣池『中津歴史』での、「島津氏（島津祐太郎）の如きも壱岐（壱岐）の為に籠絡せられ居る人なれば……大に壱岐の為に尽せり、而れども後……奮然、壱岐に迫て、其退職を促したりと云ふ」という記述は、こうしたことを反映したものと理解できる。

しかし、攘夷派の下士層と保守派・攘夷派の上士層が連携して、壱岐個人を排除できても、洋学派・開国派としての壱岐派を排除することはできなかった。壱岐は排除しても元来洋学派・開国策を許容する藩主昌服（慶応4年に昌邁に家督を譲る）は不動であり、幕末、近代西洋の世界からの圧力が急激に強まるにつれて、国内状況は、「此まで御屋敷にて人物を引立には、漢籍を讀を専務と致し来り候得共、漢籍も読様にて實地に施し用をなし申さず」と福沢が鋭く指摘したように進展し、福沢が提唱したように、もはや「實地に施し用をなす」方法は、「先づ洋法を採用する」以外にないことは誰の眼にも明白になってきたのである。以後、中津藩では、洋学派・開明派と反洋学派・攘夷派、二つの改革派は危うく微妙な均衡を保っていくことに

なる（しかし福沢は洋学派・開明派に対しても表面的な贗開国主義と見なし
ていたであろう）。結局、中津藩政としては、壱岐排除以後も、藩主昌服の
下、壱岐が擁立した次代藩主奥平昌邁（洋学について理解の深い開明君主伊
達宗城を強力な基盤にしている）を島津祐太郎ら元壱岐派の洋学派・開明派
が補佐する形をとらざるを得なかったのである。つまり、壱岐が排除された
分、島津ら元壱岐派要路が次代藩主により接近することが可能となったもの
といえる。最低限文久年間（1861～1864）には、洋学・洋法に基づく藩政改
革について福沢は、島津ら壱岐派の洋学派・開明派要路と協議していた（お
そらく福沢と島津らは壱岐の指導者としての資質の欠如についても共通認識
にしていたであろう。したがって、その壱岐が、水島六兵衛ら下士層の運動
によって、要職からあっけなく退いた「亥年の建白事件」は、福沢にとって
ますます複雑な対象となるのである）。したがって、壱岐排除直後から、福
沢は島津らを通して、壱岐が排除された分、より直接的に藩政に影響力を持
ち得るようになったものと理解できる。福沢が「物換り星移り、段々時勢が
変遷して、王政維新の世の中になつて見れば、藩論も自ら面目を改め、世間
一般、西洋流の喧ましい今日、福沢もマンザラでなし、或は之を近づけて何
かの役に立つこともあらうと云ふやうな説が、チラホラと湧いて来た其時に、
嶋津祐太郎と云ふ奥平家の元老は、頗る事の能く分る、云はゞ、卓識の君子
で、時勢の緩急を視察して、コリヤ福沢を疎外するは不利であると云ふこと
に着眼して居る折柄」と回顧しているような事態は、正確に言えば、維新後
忽然と現出したのではなく、すでに少なくとも文久年間以降、潜在的に顕在
的に進行していたことは、先の文久2年4月11日付島津宛福沢書翰からも明
らかである。またしたがって、島津らを介した昌邁への福沢の一定の接近も
文久年間以降、何らかの形ですでにあつたものと理解できる。維新後は、そ
れまでなだめつつ抑止してきた、中津藩政に占める保守派や攘夷派の影響
力が急激に低下して、福沢の昌邁及び藩主奥平家への接近がより積極的にな
り、文久年間以降の福沢の藩政改革構想がより一層遂行しやすくなっただけ
なのである。維新後、特に版籍奉還後・廃藩置県前の明治3年（1870）頃から、

昌邁を先頭に立て、福沢が中津で遂行した一連の改革の支柱のひとつは、文久2年4月11日付島津宛書翰で福沢が建白した、「富国強兵の本、人物を養育するは、必ず漢籍を読にも在らざること、存せざれ候」を前提にして「先づ洋法を採用する」ことを基にした「洋学御引立等の御仕組」の確立であり、それは慶応義塾の姉妹校たる中津市学校の開設に収斂されていくものであり、もうひとつの支柱も、同島津宛書翰で福沢が示した「御軍制御変革」に関わることであった。これは、明治初期の段階では、藩主はじめ全中津藩士に、廃藩置県を速やかに受け入れさせ、武家特権としての武力と家禄を明治新政府に返上させることに昇華していった。その結果、軍制は、近代的軍制として、近代国家としての中央統一政府のみが保持し、武力保持を特権とする封建身分としての武家も消滅することになった。このように、文久年間以降の福沢の藩政改革建白は、「亥年の建白事件」と明治維新を経て、実現されることになったのである。

福沢は、「亥年の建白事件」に、少なくとも内面的には深く関わっている。「亥年の建白事件」は、福沢が壱岐を媒介にして提起した洋学・洋式に基づく藩政改革建白への反動でもあり、下士層の成長振りを表すものであると同時に下士層の成熟の限界を表すものであり、ある種の歴史的役割を終えた壱岐が排除されることで、結果的に福沢の藩政改革建白をかなり直接的に進捗させるものであり、事件を壱岐一人を佞臣・極悪人に仕立てて排除するという「姑息な策」で終わらせたことではひどく福沢を憤らせるものであり、他を手段とする政治性の欺瞞に満ちたものであり、「我親の敵」の象徴である「大家の我儘のお坊さんで、智慧がない度量がない」壱岐が自らもたらした当然の帰結となったものであり、やすやすと他の手段に陥れられる壱岐のお人好しと品行の良さが表れたものであり、ほぼすべてを失い排除された壱岐と藩政・藩主奥平家に接近していく福沢の対照性を表したものであり、まるでまんまと壱岐所有の原書を丸写し盗み取った時のように、結果的に壱岐との関係を使って自己の改革建白を実現している福沢の「先方（壱岐）も悪ければ此方（福沢）も十分悪い」「実を申せば壱岐よりも私の方が却て罪が深

い」という自責の念を引き起こさせるものでもある。こうした、福沢にとって、否定的、肯定的、アンビバレントな評価が複雑に絡み合った「亥年の建白事件」及びそこでの壱岐について、福沢はとでも一口では述べることはできるものではなく、多くは沈黙するしかなくとも不思議ではないのである（先述したように『福翁自伝』では「亥年の建白事件」とそこにおける壱岐のことについてはまったく沈黙している）。また、「亥年の建白事件」は、長崎蘭学修業以来の10年に及ぶ福沢と壱岐のアンビバレントで複雑な関係が、最高度に凝縮されたものであり同時に、その関係の終わりを告げるものとなった。壱岐の「猿松」トリックスター、狂言回の役割も「亥年の建白事件」にて終わるのである。

他を自己の目的の手段にする政治性（「瘠我慢の説」の対極にある）を嫌う福沢が、生涯最初で最後の政治性に関わったのが、維新後、版籍奉還から廃藩置県へと展開する時期（明治2年〈1869〉～明治4年〈1871〉）を頂点とする藩主昌邁を先頭に立てた、一連の中津藩改革の実施であった。この時期、島津ら壱岐派要路を介しての藩主昌邁及び藩主奥平家に急激に接近し、藩主昌邁の名の下に旧秩序解体・新秩序樹立の藩改革をおこなう福沢の姿は、外側、特にかつての保守派と攘夷派からすれば、「亥年の建白事件」における江戸詰家老奥平壱岐の姿と瓜二つに映ったはずである（福沢は従来から壱岐派・洋学派のブレインと見られていたであろうし）。ここでも主に動いたのは、「亥年の建白事件」の場合と同様、かつての下士層の反洋学派・尊攘派である。〈福沢諭吉〉は「偏頗私論の義を以て執政其他正義の御方は御退役等に御取計、佞奸を以て御昵懇の士を深く御結び」、〈福沢諭吉〉は「御養君（儀三郎・昌邁）を擁し奉り、権を専にし、令を國中（中津藩中）に下し候御心体、明白顕然に御座候」というように、かつての「亥年の建白」のなかで記された「壹岐殿」の箇所を〈福沢諭吉〉に置き換えれば、そのまま福沢糾弾の趣旨となるであろう（福沢糾弾書は認められてはいないが）。かつての佞臣・極悪人壱岐が佞臣・極悪人福沢に置き換えられ、福沢自らが「私の万死一生（助かる見込みのない絶対の危機的状況であり、助かることは奇

跡に等しい)、恐ろしい時」⁽⁴⁰⁾と認める、いわば福沢の生命の生涯最大の危機となった〈明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件〉が起こるのである。事件は、福沢がまさに学校設立に向けた中津藩政改革に取り組んでいる最中、中津に帰省・滞留している時に起こった⁽⁴¹⁾。福沢は『福翁自伝』で次のように回顧している。

頃は明治三年、私が豊前中津へ老母の迎ひに参つて、母と姪と兩人を守護して東京に帰つたことがあります。其時は中津滞留も、左まで怖いとも思はず、先づ安心して居ましたが、数年の後に至つて實際の話を開けば、恐ろしいとも何とも、実に命拾ひをしたやうな事です。……此宗さん（福沢の再従弟増田宋太郎。増田はこの時、血縁の親密さを装い、福沢暗殺目的の探索のため滞留中の福沢の所に入入りしていた。水島六兵衛の義弟の増田は、従兄の水戸学系国学者で国学私塾道生館を主宰する神官渡辺重石丸まるく増田の母の実家は神官であり、渡辺はその神官の子息）から水戸学の影響を強く受けた攘夷家で、後に西南戦争の際、西郷軍に参加して戦死する）が、胸に一物、恐ろしい事（福沢暗殺）をたくらんで居て、其ニコ々々優しい顔をして私方に入入りしたのは全く探偵の為めであつたと云ふ。扱、探偵も届いたか、いよ々々今夜は福沢を片付けると云ふので、忍び々々に動静を窺ひに来た。……所が丁度其夜は私の処に客（福沢の中津での漢学の師、服部五郎兵衛）があつて……主客相對して酒を飲みながら談論は尽きぬ。其間宗太郎（宋太郎）は外に立て居たが、十二時になつても寝そうにもしない……何時までも二人差向ひで飲んで話をして居るので、余儀なく（福沢襲撃を）お罷めになつたという（1回目の偶然の命拾ひ）。是れは、私が大酒夜更かしの功名でない僥倖である⁽⁴²⁾。

明治3年の福沢の中津帰省は、単に母・姪を東京に引き取るためだけではなく、福沢が構想し密かに取り組んでいる、洋学校開設など藩政改革建白実施の一環としてでもあった。「ソコで私が、明治三年、中津に母を迎へに行つたことがある、所が其時は、藩政も大いに變つて居まして、福沢が東京から来たから話を聞かうではないかと云ふやうなことになつて、家老の邸に呼ば

れて行た」と述べているが、「藩政も大いに変つて居まして」もなにもない、
〈藩政を大い変えようと〉しているのは、当の福沢であった。それで、先に
みたように、家老邸宅で福沢は、因循姑息な保守派「役人重役」達に対して、
軍制改革（軍備を放棄して中央政府に返還するもので、「士・卒の帰農・
商」に繋がっていく）と教育改革（軍備を放棄した分を藩内教育に投入する
もので、洋学・洋式の学校開設に繋がっていく）という福沢の藩政改革建白
の二大支柱について、彼らが拒否反応が起ころぬようなレトリックを用いて
説諭している。これは、事前に福沢が島津ら元壱岐派の洋学派の中津藩要路
と十分協議したものであることが推測できる。しかし、尊攘派の下士層は、
壱岐をリメイクしたような福沢の洋学・洋式導入の藩政改革の方策に対して、
大きな拒否反応を引き起こしていた。それは、福沢が壱岐のような上士・門
閥でなく、同じ下士層出身であるだけに、福沢に対しては近親憎悪のような
殺意を反洋学派・尊攘派の下士層に惹起させた。暗殺者団からのスパイに、
昔より慣れ親しみ、にこにこした又従兄弟の増田宋太郎（1849嘉永2～
1877明治10）がなっていたこと（文字通り近親憎悪そのもの）に後に福沢は
大きなショックを受けたに相違ない。いずれにしても、壱岐暗殺も射程に入
れた「亥年の建白事件」の縮図が福沢の身において再現されることになっ
たのである。福沢は、自ら知らぬまま、1回目の襲撃をまったくの偶然で間一
髪、躲している。襲撃はこれで終わらず、すぐ2回目の襲撃が福沢の知らぬ
ままに遂行されようとしていた。2回目の襲撃計画は、1回目の襲撃が未遂
に終わった直後、福沢一行が東京に戻るべく、中津近郊、鵜ノ島（現豊前市
宇島）の港で出航を待つ一夜に仕掛けられた。『福翁自伝』での福沢の回顧
は次のように続く。

其晩（翌朝乗船のため鵜ノ島に来た夜）、鵜ノ島の船宿のやうな家に泊
りましたが、知らぬが仏とは申しながら、後に聞けば此夜が私の万死一生、
恐ろしい時であつたと云ふは、其船宿の若い主人が例の有志者（福沢暗殺
者団）の仲間であるとは恐ろしい。私（福沢）の一行は、老母と姪と其外
に近親今泉の後室と小兒（今泉秀太郎）、役に立ちさうな男は私一人、是

れも病後のヒヨロヒヨロと云ふ其人数を留めて置いて、宿の奴が中津の同志者に使を走らして、「今夜は上都合云々」と内通したから堪らない。ソコデ以て中津の有志即ち暗殺者は、金谷と云ふ処に集会を催して、今夜いよいよ鵜ノ島に押掛けて福沢を殺すことに議決した。其理由は、福沢が近來奥平の若殿様（奥平昌邁）を誘引して亜米利加に遣らうなんと云ふ大反れた計画をして居るのは怪しからぬ、不臣の奴だと云ふ罪状であるから、満座同音、国賊の誅罰に異論はない。福沢の運命はいよいよ切迫した。老人子供の寝て居る処に血気の壮士が暴れ込んで、逆も助かる道はない。所が爰に不思議とや云はん、天の恵とや云はん、壮士連の中に争論を生じたと云ふのは、如何にも今夜は好機会で、行きさへすれば必ず上首尾と極つて居るから、功名手柄を争ふは武士の習ひで、仲間中の両三人が、「乃公が魁する」と云へば、又一方の者は、「爾う甘くは行かん、乃公の腕前で遣つて見せる」と言出して、負けず劣らず、とうとう仲間喧嘩が始まつて、深更に及ぶまで如何しても決しない（その内、隣の老人中西与太夫が騒ぎを聞きつけて、一同に暗殺を止めるべく議論に加わり事態はさらに混乱する）。……ヤレ（暗殺を）止まれ、イヤ止まらぬと、今度は老人を相手に大議論を始めて、彼れ此れと悶着して居る間に夜が明けて仕舞ひ、私は何にも知らずに、其朝、船に乗て無事、神戸に着きました（2回目の偶然の命拾い）⁽⁴³⁾。

1回目の襲撃計画の模様もそうであるが、2回目の襲撃計画の模様も後からの風聞を基にしたものである。「武士の習い」の「功名手柄」を争う「仲間喧嘩」が原因で襲撃が未遂に終わったということなど、俄かに信じ難いものがあるが、当時、保守派と攘夷派下士層に、福沢に対する激しい（近親憎悪のような）拒否反応が惹起され、彼らによる福沢糾弾（暗殺）集団が結成され（かつて壱岐糾弾暗殺集団が結成されたように）、福沢は「誅罰」（暗殺）を加えるべき「不臣」「国賊」と定められたこと、連続する複数の福沢襲撃計画があり、いずれも福沢は、実に実に間一髪のところ命拾いをしたというのは確かなのである（100%近く福沢は暗殺されていたのであるが、

くもし福沢暗殺が完遂されていたとするならば、一体その後、日本近代史・思想史はどのような違う道筋を進んだのであろうか」ということを想定しただけでも、〈明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件〉の持つ意味の大きさがわかるであろう)。この福沢糾弾（暗殺）集団には、「亥年の建白事件」のあの水島六兵衛―増田宋太郎の義兄であるのでつまりは福沢の縁戚でもある（本稿注(7)参照）も加わっていたものと理解できるのである⁽⁴⁴⁾。もしそうであれば、「亥年の建白事件」での水島のリーダー・シップの高さからすれば水島が福沢暗殺計画の中心的存在でさえありえる。増田が福沢滞留先を「探偵」して得た情報は義兄水島に届けられていたのではないか。さらにその背後にその従兄渡辺重石丸（1837天保8～1915大正4）も当然想定できる⁽⁴⁵⁾。水島六兵衛の福沢暗殺策計画加入は、壱岐と藩主（昌服）との関係が福沢と藩主（昌邁）の関係にそっくり移行しているように見える外観からしても、実に納得できる。〈明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件〉は、「亥年の建白事件」での水島（及び増田）ら下士層集団がかなりそっくりそのまま実行主体となっているものと理解できるのである。まさしく、〈明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件〉は、「亥年の建白事件」と相似形を成しているわけである。その背後には「亥年の建白事件」と同様、福沢の少年旧藩主を奉戴した、改革方針に拒否反応と危機感を起こした保守派上士層の暗黙の支持・示唆があったであろう。「亥年の建白事件」と違うのは、ひとつは、超上士壱岐と違って、福沢は同じ下士層出身だけあって、下士層に強い近親憎悪を惹起させ、糾弾建白提出という段階を飛び越して暗殺という排除方法に直線的に至っていることであること、ひとつは、壱岐排除の大義名分が封建制度内の改革にあったのに対して、福沢排除の大義名分は、封建制度・武家階級そのものの解体を企む〈福沢の邪心〉を阻止し藩体制及び旧藩主を防護することであったであろうことである。両者の根底には共通して西洋化政策に対する武家階級の根深い憎悪・拒否反応と危機感が在るが、福沢の場合の方が、封建制度・武家階級そのものの解体を射程に入れているだけあって、壱岐の場合よりも、その憎悪・拒否反応は格段と強いものであったことは明白であり、背後に保守派上

士層の支持・示唆も広範に在ったことも大いに推測できる。つまり、〈明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件〉は、その後の、佐賀の乱（明治7年〈1874〉）・萩の乱（明治9年〈1876〉）・秋月の乱（同年）・神風連（敬神党）の乱（同年）・西南戦争（明治10年〈1877〉）⁽⁴⁶⁾など全国各地で連続して起こったいわゆる「不平士族」の反乱の雛型のひとつを示していたともいえる。

福沢糾弾で特に大きく強調されたことのひとつは、「福沢が近来奥平の若殿様（奥平昌邁）を誘引して亜米利加に遣らうなんと云ふ大反れた計画をして居るのは怪しからぬ」ということであった。実際、福沢の指導で昌邁は、明治4年（1871）、廃藩置県直後に、小幡篤次郎の弟、小幡仁三郎を供にしてアメリカ留学に出掛けることになる（まことに興味深いことに同じ明治4年に、昌邁の兄、福沢がその養子縁組に骨を折った、当時20歳の元仙台藩知藩事伊達宗敦もイギリス留学に出ている）⁽⁴⁷⁾。昌邁が中津市学校創設に際して、「学問は身の為にするべきなり、人の為にするにあらず。況や一時職分の軽重に由て学問に勉不勉のあるべきに非ず。又政府に願ひ、外国の遊学を決したるは、願くは旧藩の士民、余（昌邁）が心事を察して、此度の挙動を怪しむこと勿れ。独事を為すは衆と共にするの楽しきに若かず。余此度、独外国に遊学すれども、旧藩内の士族も余が志を助け、余が学ぶ所の道を学ばんとするは、固より願ふ所なれば……此度中津に一処の洋学校（中津市学校）を開き……旧藩の士族は勿論、百姓町人も余が微意を体して、勉強を致し、三、五年の後、余が外国より帰り、互に学業上達の上、再会致すべき事、今より楽む所なり」と述べた。そこで昌邁が強調しているのは、「外国の遊学を決したるは、願くは旧藩の士民、余が心事を察して、此度の挙動を怪しむこと勿れ」と自らのアメリカ留学の正当性である。特に「此度の挙動を怪しむこと勿れくこの度の自分のアメリカ留学については決して怪しんではない」と強い禁止命令口調さえ帯びているのは、〈明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件〉の背景にあった「福沢が近来奥平の若殿様を誘引して亜米利加に遣らうなんと云ふ大反れた計画をして居るのは怪しからぬ」という福沢糾弾に対する強い反駁意思を反映したものと理解できる。しかし、〈これから旧

中津藩は、旧藩主（知藩事）から旧藩士・町人・百姓に至るまで、丸ごと、洋学に基づく新しい学問を勉強をすることになった。旧藩士・町人・百姓は洋学校の中津市学校で学び、旧藩主は自ら洋学の本場アメリカで率先して学ぶのであるから、今度の旧藩主アメリカ留学は実に首尾一貫した正当な根拠のあるものであり、何ら怪しむべきことはない」という道筋自体が福沢の思想・理念に即したものであることも明白である。「亥年の建白事件」も「明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件」も糾弾の大きな主柱のひとつが、前者では、「種々奸曲を以て君公（藩主奥平昌服）の御英明を欺き奉り」「君公御隠居の思召しも存らせられ候哉」「御養君（儀三郎・昌邁）を擁し奉り、御一人（壱岐）、権を専にし、令を国（中津藩）中に下し候御心体」「君公御内命も之有る由を以て当地の建議悉く御攘斥成され、自儘（我儘）の御振舞も之有り候哉」というように、臣下の壱岐が藩主奥平昌服・奥平昌邁を恐れ多くも利用して「偏頗私論」の専制をおこなっている「佞臣」であるということであり、後者では、下士出身の福沢が若年の藩主（知藩事）奥平昌邁を恐れ多くも洗脳を施し利用して藩を西洋化し壊滅することを、果ては昌邁を「誘引して」アメリカに連れ出すこと（藩主の西洋化洗脳の極み）を企てる「不臣の奴」ということであった。両者とも、その「罪状」は恐れ多くも藩主を自己の「偏頗私論」（その西洋主義を含めて）の企みに利用しようとする「佞臣」「不臣の奴」で、「国賊の誅罰」を下すべき対象であることで共通している。福沢は明らかにかつての「佞臣」壱岐に擬されされていくような道筋を進んでいくことになったのである。壱岐が中津藩から追放され、そのトリックスターとしての役割を終えた後も、福沢は、結果的にあたかも壱岐の残した足跡に導かれるように、啓蒙思想家福沢諭吉の後世の評価を不動のものとした『学問のすゝめ』刊行まで進捗していくことになるのである。福沢にとって、壱岐とは、アンビバレントな要因が幾重にも織り込まれて成された、何とも複雑な存在である。福沢は考えたことがあったであろうか、壱岐がいなければ、果たして今の自分は存在したか？と。最終的に本稿が述べたいのは、トリックスター化された「猿松」奥平壱岐でもなく、極悪人・佞臣

として伝承化された奥平壱岐でもなく、薩州商社取建構想に真摯に向き合い
 参画した奥平壱岐、福沢諭吉がその啓蒙的紹介の先駆となった〈商社の時代〉
 の証人としての奥平壱岐である。なお、黒屋『中津藩史』での、前出「〔^{コンベンニ}亥
 年の建白事件〕よって）壱岐……職を免ぜられ、快快として終に藩を立退く
 や、薩藩、人として本藩（中津藩）に伝へせしめて曰く、壱岐を抱えて千石
 を給せしめたりと云ふ。藩庁……生田又右衛門を鹿児島に派し、是議を謝絶
 せしめたりと云ふ」の箇所こそ、壱岐が「適薩俗記」を記す契機（「文久の
 建白事件」がなければ「適薩俗記」は記されなかった）を示す重要箇所なの
 であるが、これは本稿の主要テーマに直接関わることなので後に詳述するこ
 ととする。（つづく）

注

- (1) 富田正文編者代表『福沢諭吉選集』第12巻、岩波書店、1981年、52～53頁。ゴシックと（ ）内とルビの削除・追加は長谷川。以下、富田正文編者代表『福沢諭吉選集』からの引用について同じ。
- (2) 同上、53頁。
- (3) 『福翁自伝』、富田正文編者代表『福沢諭吉選集』第10巻、岩波書店、1981年、176頁。
- (4) 奥平壱岐の生年・没年について、壱岐の曾孫中金武彦氏（故人）が貴重な記述を残している（本稿も壱岐の生年・没年については中金武彦氏のこの記述に依拠してきた）。壱岐の生年については、中金武彦「奥平壱岐覚書」（福沢諭吉協会『福沢手帖』第78号、福沢諭吉協会、1993年）で、次のように述べている。「**正衡【奥平壱岐】の出生月日については【中金奥平家「系図書」に】一切記載がない。**出生年推定の一資料として、正衡の祖父に当る第十五代正名が、時の藩主奥平昌鹿へ御目見の条に『如旧例十三歳ニテ』と前書きがある。これを、前記正衡の昌猷公へのそれが初御目見として当てはめると、この年から十三年遡って文政十二年（一八二九）となる。正衡が生まれた翌年には、父正韶から家督を継承したことになるが、このようなことが藩から認められたかどうか。『福翁自伝』には、壱岐について『歳は私より十ばかり上』とあるが、諭吉は天保五年十二月十二日、陰暦では年が改まって一八三五年一月十日の生まれだから、それを十年遡ると、一八二六年（文政九年）となる。『適薩俗記』慶応三年六月五日の条に『余誕辰ナル故朝市ニテ 鮮魚沢山ニ買イ前寓ニモ送ル』との記載あり、これで六月五日と月日ははっきりしたが、生年については文政九年から十二年にかけての頃とするほかない」（21頁／ゴシックと〔 〕内は長谷川）。4歳程の幅

があるが、本稿もこれに依った。壱岐の没年については、中金武彦「奥平壱岐から中金正衡へ—奥平壱岐覚書・その二—」（福沢諭吉協会『福沢手帖』第80号、福沢諭吉協会、1994年）で、次のように述べている。「明治十七年五月九日、正衡は世を去った。父正韶（香雪庵）、母千世（香樹院）が眠る四谷・長善寺（笹寺）に葬られた。政二郎の名による養父正衡（吟狎菴寄梅居士）の死亡広告が『時事新報』に掲載されたが、野辺送りの時までには及ぶ福沢諭吉との不思議な縁をしみじみと思わざるをえない」（11頁）。中金政二郎は壱岐（正衡）の娘千代と縁組した婿養子である。明治17年5月9日の壱岐の死去が、福沢諭吉が明治5年（1882）に創刊した日刊紙『時事新報』（戦後『産経新聞』に吸収）に報ぜられたことについては、本稿が追究してきたテーマにとっても、「野辺送りの時までには及ぶ福沢諭吉との不思議な縁」という武彦氏の感慨に深く共鳴するものであるが、明治17年5月に、51歳になった福沢が、「野辺送りの時までには及ぶ」「不思議な縁」としかいいようのない壱岐の死去（享年56歳～59歳）の知らせを複雑で深い感慨をもって受け取ったことは間違いない。なお中金武彦氏は、「私ども兄弟四人は〔奥平とは〕全く血はつながっておりませんで、姉の三人が奥平の血を受けました母から生まれたということでございます」（鼎談〈中金武彦・河北展生・長谷山彰〉「福沢諭吉と奥平壱岐」、『三田評論』第939号、慶應義塾、1992年、83頁／〔 〕内は長谷川）と自ら述べているように、戸籍上の壱岐の曾孫である（本稿巻末掲載「中金家系図」参照）。

- (5) 廣池千九郎『中津歴史』、『廣池博士全集』第1冊）、廣池学園出版部、1937年、212～213頁。原文は片仮名文。（ ）内は長谷川。以下、同書からの引用に際しては、漢字の一部を現在のものに換えルビを振り、〔 〕を付し中黒・句読点を加えた。以下同書からの引用について同じ。
- (6) 同上、213～214頁。
- (7) 生田重倫編修『奥平藩家臣略譜集録』下巻（1972年、中津市立小幡記念図書館所蔵）では、水島六兵衛について、次のように記している。「水島六兵衛家 始め六兵衛と称す。後、均と改む。亥年建白事件の首謀者なり。之により江戸詰家老奥平壱岐は禄二百石を削られ停職になり、六兵衛等同志十五人は、各禄二石を削られ職を免せられて、落着した。維新後、明治政府の官吏となり、福岡県小倉支庁長たりしが、中津支庁長に転じ、明治十年十月突然、病を以て急死した。六兵衛は従目付より後、御目付役になり、御小姓格に躍した（旧藩時代）。嫡男は神戸高等商業学校初代校長の水島鏡也氏である。当時の御小姓水島六兵衛、小役人山口広江、同棟形忠太夫の三人は逸材にして数百年に亘る奥平家家格の厳制を打破して上達の道を拓きたる人達である」（356頁／ルビと句読点を補った）。この記述によれば、亥年建白事件の時、事件首謀者の水島は御小姓格であり、役職のある下士層〈逸材三人〉の内の一人であったことになる。注目すべきは、水島は、明治3年（1870）の福沢諭吉暗殺未遂事件の首謀者の一人である、福沢の母方の再従兄弟「宋さん」こと増田宋太郎と義理の兄弟（増田の妻は水島の妹鹿）であったことである（平山洋『福澤諭吉』収録「福澤諭吉関係家系図」、ミネルヴァ書房、2008年、参照）。増田は義兄の水島からの影響が極めて大きかったことは容易に理解できる。水島がリーダーとなった「亥年の建白事件」に

は増田も参加していたことも容易に推測できる。逆にいえば、福沢諭吉暗殺未遂事件の増田の背後には水鳥が存在していたものと理解できるのである（本稿注(4)参照）。奥平壱岐暗殺も射程にいられた〔亥年建白事件〕ばかりか、福沢諭吉暗殺未遂事件にも大きく関わったと目される水鳥であったが、そうであるならば福沢暗殺未遂事件の後、おそらくは明治4年の廃藩置県以降に、水鳥は改倭して（?）、明治政府官吏として福岡県小倉支庁長・中津支庁長に任じたことになる。

- (8) 黒屋直房『中津藩史』、碧雲荘、1940年、473頁。ゴシックは長谷川。以下、同書からの引用に際しては、漢字の一部を現在のものに換エルビを振り、句読点を加えた。
- (9) 廣池前掲『中津歴史』、214～217頁。ゴシックは長谷川。文の一部を読下文に直した。
- (10) 同上、219頁。
- (11) 「浄瑠璃坂讐討」事件は、藩主奥平家領地が宇都宮時代の奥平一門の内紛（本稿(1)注(25)でも少し紹介した）の結末であるが、この結果、奥平壱岐へと至る系譜である奥平中金家嫡家（本家）が断絶した。事件の発端は、寛文8年（1668）の前藩主奥平忠昌葬礼の場（宇都宮・興禅寺）で、奥平隼人守雄（8代中金奥平嫡家／35歳）と奥平内蔵允（39歳）が些細なことをきっかけに日頃の両者のわだかまりが激突、刃傷騒動となり、内蔵允は傷がもとで死亡したことにあった。奥平隼人と奥平内蔵允は、母方の従兄弟関係であるが、内蔵允は元々は五老のひとつ、黒屋家5代目であったが、「奥平」の称号を藩主より賜ったのである（『中津藩史』の著者黒屋直房は、内蔵允の末裔である）。両者わだかまりの原因について、黒屋前掲『中津藩史』「浄瑠璃坂讐討の顛末」では、「内蔵允は兼て隼人が高慢チキの振舞を憎み居る」（613頁）としているが、これは福沢『福翁自伝』での壱岐評である「全体、奥平（壱岐）と云ふ人は決して深い巧みのある悪人ではない。唯大家の我儘なお坊さんで、知恵がない度量もない」を想起させるものがある。黒屋の隼人評「高慢チキの振舞」と、「中津時代以降の傑物」と高く評価しながらも「唯其心術の不遜にして徳性の欠如」とする黒屋の壱岐評は重なるものがある。この刃傷騒動は藩内で高まるばかりとなり、幕府（公儀）の内意を伺い、それに即して藩の裁定を出すことになった。それは、武家の道理である喧嘩両成敗ではなく、「内蔵允は乱心なれば源八（内蔵允の嫡子）へ改易仰付けられ、隼人は不慮の手に出合ひ是非無き事故、其処分は勝手たるべしとの（幕府内意）旨を得たるより、内蔵允の死は乱心に出で其刃傷沙汰を不謹慎の行為として……源八に追放を命じたり」（同上、617頁）という、隼人側無罪、内蔵允側追放処分とするものになった。しかも「是（幕府内意）より先き隼人方は親類・縁者たる公儀の役人衆……其他へ内々取計方を依頼し在りたれば是内意ありたるものなりと云ふ」（同頁）という隼人側の不正の働きもあったという。しかし、この処置に激怒した藩士とその家来、数十人が源八とともに脱藩し、「源八党」を結成する事態となり、藩内動揺は高まった。その結果、隼人最員の藩主奥平昌能も隼人を庇い切れず、藩内動揺を抑えるため、遂に隼人も追放処分となった。藩主昌能は、源八党襲撃からの隼人防護策を計り、隼人を安全な地に匿うが、その都度、源八党は策略を巡らせて、その地に隼人が居られなくなるように仕向けるので、隼人は、源八党の執拗な追跡から逃れるべく、関東・東北各地を転々とし、結局一番安全な地と目された江戸・牛込浄瑠璃坂上の屋

敷に常に数十人に守られて棲息することになった。そうして、寛文12年(1672)、「千辛・万苦を嘗め尽くし、五年の間、忍耐を続け愈討入の手筈、万端整ひたれば」(同上、622頁)と、源八(15歳)はじめ源八党40人は、浄瑠璃坂上の屋敷に討入るのである。討入の様子を「浄瑠璃坂讐討の顛末」では次のように記している。「寛文十二年二月二日夜浅草駒形に勢揃ひの上、幼年・老者は駕籠・馬に乗り槍・大斧・松明・大鋸及必要の武具は長棹に入れて馬に駄し、巧に番所を通過して小石川水戸藩邸前に至りて乗物を捨て武具を取り出し隊伍を整へて浄瑠璃坂上に於て討入の順序・手筈を定めたる後、頼母(桑名頼母)は近所辺の各家を訪ひ、今夜仇の爲め討入るも一切御迷惑は相掛け間敷何卒御静肅に願ひ度旨丁寧に挨拶に及び、寅の刻(午前4時頃)に先づ大斧を揮ふ事二回にして門扉を打破り一同闖入したり。此時槍は特に門内に残し置き松明を振り翳し刀を抜き払ひ、老人・婦女子は殺傷する勿れと相誡め……隼人の父、半齋は槍を以て刃向ひたれば巴むなく殺し、第九兵衛家来・浪人等十六人を討取る。其他の者共は悉く逃げ去る」(同上、622~623頁)。まるで、これより31年後の元禄15年(1702)に起きた赤穂事件の討入風景と瓜二つであるが、「浄瑠璃坂讐討の顛末」は黒屋直房(仇を討った側奥平内蔵允・源八父子の系統でもある)の家に伝わる浄瑠璃坂讐討に関する文書「讐討ノ書」「報讐禄」に基づき書かれているのである。この黒屋家伝来の文書を黒屋直房から借りて小説「浄瑠璃坂のあだうち」を書いた小説家中里介山は、「彼の大石良雄の如きは其討入(吉良義央屋敷討入)の手段は此の頼母(源八党幹部桑名頼母/「浄瑠璃坂讐討の顛末」よれば、江戸では頼母を司令塔にした源八党は、変装して住居を転々としながら、隼人側が浄瑠璃坂上の屋敷に追い込められるように策謀し、屋敷周辺の地理・地形・住宅など調査・作図して討入準備を整えた)の爲す所に学びし形蹟甚だ多く、この意味に於て大石のお師匠役とも称すべきに……」(同上、633頁)と評している。また、黒屋直房も、「抑も浄瑠璃坂の復讐は風教を維持し随氣を啓発するの義拳・美事として江湖(世間)の絶賛を博したれば、諸種の脚本・院本(浄瑠璃正本)・続出し芝居・講談等盛行したるが、一度び『忠臣蔵』の出づるに及びては君臣を主題となせる局面の大なると脚色の巧妙なるとに由りしものか『浄瑠璃坂』は之に押されて漸次衰退に赴きたりと云ふ」(同上、635頁)と述べている。いずれにしても、浄瑠璃坂讐討事件が後の赤穂事件の原型を成していることは間違いない。浄瑠璃・狂言歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』の脚本の筋道も、浄瑠璃坂讐討事件やそれを脚色した「脚本・院本(浄瑠璃正本)」「芝居・講談等」から大きな影響を受けているわけである。さらに浄瑠璃坂讐討事件での隼人討取りの状況、「而も肝腎の敵隼人の姿を(屋敷内に)見ざるより家中は無論、天井・椽下・隠れ家迄、隈なく探索せるも更に見当らず……夜もホノボノと明け初めければ人員を点検して隼人の何れよりか突然出て来るを警め、隊伍堂々と引き上げ坂を下り……」(同上、623頁)は、赤穂事件の義央討取りの状況とよく似ている。違うのは、夜明けの探索の結果、隼人は発見できなかったのに対して、義央は発見され討たれたことである。しかし、浄瑠璃坂讐討事件の場合も、いったん屋敷から逃亡した隼人は、手勢20人許りを引連れて、屋敷から引き上げる途中の源八党の隊伍を襲撃するが、結局、逆に討取られてしまうのである。浄瑠璃坂讐討事件も赤穂事件も両者とも、刃傷

事件と喧嘩両成敗ではなく一方に偏した処分と一方の無念の死を発端にしている。興禅寺での、内蔵允が「忍びに忍びたる無念の恨み、思ひ知れよと大刀を抜き払ひ突然隼人に切り付けたり」（同上、615頁）とする刃傷場面は、芝居・演劇の「忠臣蔵」物でもすっかり馴染みとなった場面、（史実としてではなく芝居での吉良義央の度重なる仕打ちに）堪えに堪えてきた浅野長矩が、遂に堪え切れずに、吉良義央に、〈この間の遺恨覚えたか〉と叫び切り付ける、「刃傷松之廊下」の場面とぴったり重なる。壱岐の祖、奥平隼人守雄は、共同幻想の作用により、芝居「忠臣蔵」での悪人・敵役吉良義央のイメージを容易に喚起するものとなる。隼人の「高慢チキの振舞」は芝居「忠臣蔵」もでの義央の「高慢チキの振舞」に重なっている。その「高慢チキの振舞」の負のイメージ遺産は、「唯大家の我儘なお坊さんで、知恵がない度量もない」「唯其心術の不遜にして徳性の欠如」と評される末裔の壱岐に、引き継がれることになる。浄瑠璃坂豐討事件、伊達騒動、赤穂事件といういずれも巨大な共同幻想の強力な磁場を形成する三大震源が重なってすべて壱岐個人に関連している。したがって、共同幻想化された悪人・敵役としての、奥平隼人、伊達兵部・原田甲斐、吉良義央の三重の負のイメージが相乗し合っ、壱岐糾弾の建白書にも散見される「偏頗私論の義」「佞奸」「奸曲」「権を専」「自儘の御振舞」「姦計」というような形で、「亥年の建白運動」における壱岐個人に投影されることになるのである。しかし、壱岐との関係において、こうした共同幻想化された壱岐像から解放されている福沢は実にあっさりと簡潔にいうのである、「全体、奥平と云ふ人は決して深いたく巧みのある悪人ではない」。また、福沢は、壱岐の祖である奥平隼人が討たれる浄瑠璃坂豐討事件のことをある点で注目していたものと思われるのである。『学問のすゝめ』においては、偶像化された「忠臣義士」に対する批判は重要な要素のひとつになっている。『学問のすゝめ』では、偶像化された「忠臣義士」の典型として、格別に「赤穂の義士」「四十七士」のことは、様々な観点から引き合いに出されている。『学問のすゝめ』では、「赤穂の義士」を例にして、「敵討」の無意味さと害悪を次のように、述べている。「昔徳川の時代に、浅野家の家来、主人の敵討として吉良上野介を殺したることあり。世にこれを赤穂の義士と唱へり。大なる間違ならずや。……四十七士の家来、（徳川政府に）理を訴て命を失ひ尽すに至らば、如何なる悪政府にても遂には必ず其理に伏し、上野介へも刑を加へて、裁判を正ただふすることある可し。幸にして其時、徳川の政府にてこの乱妨人を刑に処したればこそ無事に治りたれども、若しこれを免すことあらば、吉良家の一族、又敵討として赤穂の家来を殺すことは必定なり。然るときは、此家来の一族、又敵討として吉良の一族を攻るならん。敵討と敵討にて、はてしもあらず、遂に双方の一族朋友、死し尽るに至らざれば止まず。所謂無政無法の世の中とはこの事なる可し。私裁の国を害すること斯の如し。謹まざる可らざるなり」（編者代表富田正文『福沢論吉選集』第3巻、岩波書店、1980年、94～95頁）。福沢の説く敵討の無意味さは、「敵討と敵討にて、はてしもあらず、遂に双方の一族朋友、死し尽るに至らざれば止まず」という敵討の果てのない繰り返しのところに極まっている。だが、赤穂事件の後、討たれた吉良側が、今度は「赤穂の家来」に報復の敵討を実行して「赤穂の家来」を殺害したという事実は、少なくとも表立った形では存在していない。しかし、浄瑠璃

坂警討事件の場合は、事件後、討たれた隼人側による源八党への報復の敵討が実際に大掛かりにおこなわれ、源八党の2人が殺害されているのである。「浄瑠璃坂警討の顛末」では次のように記している。「寛文十二年四月廿六日（浄瑠璃坂警討から約3ヶ月後）夜、阿部伊予守家来本多次郎左衛門〔千五百石隼人叔父〕同嫡子瀬兵衛・松平下総守家来奥平源四郎〔千石隼人叔父〕同嫡子弥市郎以下二十八人は元源八同志菅沼治太夫・上曾根甚五右衛門を本郷の寓居に討てり。初め次郎左衛門等は隼人の討たれるを恨み、源八等に復讐せんとせしも既に大島に流罪されし折柄、治太夫等を仇の片破れと思ひ此挙に及びしものなり。公儀は四人を隠岐島へ流罪せり」（黒屋前掲『中津藩史』、625～626頁）。源八党40人討入に引けを取らぬ、いわば隼人党というべき28人の組織的討入である（しかし討取られた菅沼治太夫と上曾根甚五右衛門は「元源八党」とあるように浄瑠璃坂警討の討入には参加しなかった脱退組であった）。浄瑠璃坂警討事件がその後の赤穂事件と大きく違うのは、敵討の結果、討入した大石良雄らはことごとく切腹させられているのに対して、一人も処刑させられておらず、奥平源八・夏目外記・奥平伝蔵の首謀者3人は「義烈の士」として、6年の大島流刑の後、伊井掃部頭直澄侯に百人扶持で召し抱えられ彦根に邸宅を与えられているし（同上、624～625頁参照／奥平源八の伊井侯召抱えにより五老黒屋家の系譜は彦根藩へと移る）、討入に参加した源八党のメンバー及び関係者の多くは、同じく「義烈の士」として、様々な形で召し抱えられている。たとえば、桑名母頼などは松浦肥前守侯に百人扶持で召し抱えられている（同上、625頁参照）。このような幕府の裁定に当然、討たれた隼人側では新たな敵討を企てるわけで、源八ら3人の大島流刑の際にも、幕府は「八丁堀船着場より（大島への）乗船に当り、途中警戒の為め老職をして兵を率ひて護送せしめ」（同上、同頁）というように隼人党の襲撃を厳重に警戒している。そうして、源八ら幹部の襲撃を断念せざるをえなかった隼人党の矛先は、菅沼治太夫・上曾根甚五右衛門に向けられることになったのである。そうしてまた、幕府は、隼人の叔父の本多次郎左衛門ら隼人党首謀者4人も、処刑することなく隠岐島流刑に処している（同上、626頁参照）。そうなると、福沢が「敵討と敵討にて、はてしあらず」というがごとく、さらにまた今度は討たれた元源八党の菅沼・上曾根の縁者らが隼人党の本多次郎左衛門らへの敵討を企てるのではないか？という思いが出てくる。この悪夢のような敵討の果てのない連鎖の予兆は、「敵討と敵討にて、はてしあらず、遂に双方の一族朋友、死し尽るに至らざれば止まず」との福沢の謂が決して誇張ではないことを示している。福沢の「若しこれを免すことあらば、吉良家の一族、又敵討とて赤穂の家来を殺すことは必定なり」という自信に満ちた断言は、赤穂事件の前身ともいえる浄瑠璃坂警討事件での実例を背景にしていることは間違いないのである。『学問のすゝめ』で、中津藩関係の浄瑠璃坂警討事件ではなく、赤穂事件を例にあげたのは、黒屋直房が「一度び『忠臣蔵』の出づるに及びては君臣を主題となせる局面の大なる脚色の巧妙なるとに由りしものか『浄瑠璃坂』は之に押されて漸次衰退に赴きたりと云ふ」というように、明治初期において、『忠臣蔵』や赤穂事件についての国民的知名度は、浄瑠璃坂警討事件のそれを凌いで圧倒的であり、若年層に対する啓蒙書としての『学問のすゝめ』で実例とし

てあげるには「赤穂の義士」「四十七士」の方が適例であったからである。宇都宮時代の奥平藩を揺るがした刃傷事件とその結末である浄瑠璃坂讐討事件について中津藩出身の福沢が知らぬはずはない（むしろ熟知しているであろう）。さらにいえば、福沢には、赤穂事件の構図が示す敵討の不毛さと害悪の本質をよりよく体現しているのは、浄瑠璃坂讐討事件であるとの認識があったものといえる。いずれにしても、福沢は、傍流ではあるが隼人の系譜である壱岐の「亥年の建白事件」における命運に刃傷事件・浄瑠璃坂讐討事件における隼人の命運を重ねて見ていたものと理解できるのである。最後に、「昔徳川の時代に、浅野家の家来、主人の敵討とて吉良上野介を殺したることあり。世にこれを赤穂の義士と唱へり。大なる間違ならずや」という、艱難辛苦に耐えての敵討に対する福沢の否定的評価と福沢の持論「瘠我慢の説」（本稿(1)注(2)参照）の関係について、述べなければならない。黒屋直房は、源八党の討入・本懐に至るまでの「千辛・万苦を嘗め尽くし」との活動について、「抑も浄瑠璃坂の復讐は風教を維持し随気を啓発するの義挙・美事」と積極的に肯定しているが（源八が自分の祖であることも加味されているであろうが）、福沢はこうした「千辛・万苦を嘗め尽くし」で成し遂げた敵討を「義挙・美事」とすることは「大なる間違」であるとしているのである。しかし、不義の敵を討つために、「千辛・万苦を嘗め尽くし」耐えていくことは、文字通り「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」ではないのか。確かに浄瑠璃坂讐討事件・赤穂事件に体現した「千辛・万苦を嘗め尽くし」で耐えたこと自体は、「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」ではあるが、福沢の思想的観点からすれば、この「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」が酵母となって、「文明独立の大義」へと収斂していくものかどうかということが問題となる。「文明独立の大義」とは〈世界史の普遍的課題〉ともいえる。福沢の思想的観点からすれば、「千辛・万苦を嘗め尽くし」で敵討を遂げても、たとえば、「権理通義」（すべての人間がそれぞれの生命をまっとうする権利）の保障を実現できる国家制度・社会制度の確立のような〈世界史の普遍的課題〉に如何ばかりの影響を与えたわけでもない。浄瑠璃坂讐討事件の討入（及びそれを手本にした赤穂事件の討入）もその本懐に至るための「千辛・万苦を嘗め尽くし」た膨大なエネルギーと手が込んだ策略は、福沢の思想的観点からすれば、とても「風教を維持し随気を啓発するの義挙・美事」と称賛すべきことではなく、〈世界史の普遍的課題〉にとって無価値な、実に虚しい徒労・浪費ということになる。せっかくの「瘠我慢の説」＝「士族に固有する品行の美」も〈世界史の普遍的課題〉へ展開する契機を持ちえなければ、虚しいただの徒労・浪費の空回りということになるのである。しかし、壱岐の曾孫中金武彦氏が、次のように、戦前の祖母光（本稿巻末「中金家系図」参照）について、印象深い回想をしている。「まず自分史的記述から一。私が奥平の流れをひいていることを意識するようになったのは祖母光の存在が大きい。中学一年の頃であったか、祖母のお伴をして、牛込台から市ヶ谷に下る浄瑠璃坂を下っているときであった。光は私にむかって言った。『ここで家のご先祖が仇討ちなさった【お討たれなさった】のです』。顔つきと声の口惜しさが耳目にやきついている。もうひとつ、これは幾度か光がいったことだが、『曾祖父様は背中に鉄砲傷があるのをたいそう残念に思っていたらそうで

す』。曾祖父様とはもちろん壱岐である。幾度も語ったのは壱岐の無念を子孫に伝えたいという光の気持の強さであろう(中金武彦前掲「奥平壱岐覚書」、17頁)。武彦少年をはっとさせ生涯脳裏に焼き付かせた、祖母光の「顔つきと声の口惜しさ」には、たとえ「文明独立の大義」に結び付かないことにも人間は、その存在すべてを賭けて生涯を費やしてしまうものであり、それは、無知なるこということで決して切り捨てられない重さがあることが表されている。その重さの意味を対象化することが思想の最終的課題である。祖母光の内では、浄瑠璃坂讐討事件における奥平隼人と「亥年の建白事件」での奥平壱岐は円環している。壱岐が生涯残念がっていたという「背中」の「鉄砲傷」がいかなる由緒によるものか不明であるが(「亥年の建白事件」か壱岐が結局薩摩藩召抱えが中止となり松山藩に召し抱えられた際の戊辰戦争の関連かと推測できる)、光には、その壱岐の生涯の「残念」「無念」の契機となったのは「亥年の建白事件」であったことはよく理解していたはずである。両者とも狂言の悪人・敵役として口伝化され、その実像は歴史の奥に深く埋没されてしまったことへの身も震える「残念」「無念」「口惜しさ」は、光に伝わり、その核心と重さのようなものは武彦少年にも確実に伝えられたのである。光のような名も無き日本人の「顔つきと声の口惜しさ」のようなことに対して敏感であり、その意味を掘り下げようとしたのは、福沢ではなく、むしろ、近代西洋に倦み、極東アジア・日本人の存在の意味を探るため明治23年(1890)に来日した、異邦人であるラフカディオ・ハーン(小泉八雲/1850嘉永3~1904明治37)であった(長谷川洋史「国家と資本」(4)〈経済学研究科紀要編集委員会『経済学研究科紀要』第14号、関東学院大学大学院、1989年4月)参照)。壱岐の貴重な手記「適薩俗記」は、この光の信玄袋からその死後数十年を経て発見されたものなのである。中金武彦氏は、「適薩俗記」発見の模様について、次のように記している。「その祖母(光)も去って三十三年になる。数年前のことだが、『おい、ばあさま(光)の信玄袋からこんなものが出てきたぜ、頼むよ』と兄から渡されたのが、壱岐の遺文を含む三点であった。『適薩俗記』と題した冊子、奥平の『系図書』および『覚書』で後の二点は題簽はなく、私が仮りに名付けたものである」(同上、17頁)。光が生涯、壱岐と中金奥平家の記憶を、人知れず信玄袋に潜ませ守っていたことの意味の一端へでも接近したいというのは、本稿の志向するところでもある。

- (12) 廣池前掲『中津歴史』では、「当時(幕末期)士族中無情の輩頗多く……(藩校進脩館の)学生[上士の子弟]通学の往来には町家の戸を破り瓦を落し、店前の看板を毀ちて、毫も意に介せざるもの往々これあるに至る。されば下士中の最下等にありては粗暴驕悪破廉恥の徒一層多く、其官にありて賄賂を貪るは勿論、或は市中町家の吉凶に乗じて之に執し以て飲食財物を貪るあり、或は村落に入りて芋菓物を掠むるあり。或は仲津(仲間)・興昇き・雲助等悪徒の為所(ところ)を学て、良民をゆするものあり。或は、自城門の番人ある公職にありつゝ、其関門出入の野菜売・薪売をゆするおものあり」(210頁)というように、上士層だけではなく、下士層、特に足軽など最下層の下士層の混乱振りをこと細かくあげている。
- (13) 前掲『福沢論吉選集』第12巻、53頁。慶応2年(1866)2月6日付島津祐太郎(奥平壱岐に退職勧告をした壱岐派要路である)宛書翰で、福沢論吉は、次のように述べ

ている。「中津に文学の教なし。世間見ずの田舎風にて、才も不才も門地を以て無上の天爵と思ひ、世間普通の道理を知らず、去迎又真の田舎風を守り、尽忠報国の外他事なしと一片の丹心あるにあらず。才ある者は狡猾姦佞に流れ、才なき者は頑癖固陋に陥り、人々己が所業を好き事と思込み、更に一和することなし。狡猾の才を圧せんとするも、共に行はれざる事にて、遂には争鬪の基を醸し、始末の出来兼る場合に至るべく、既に中津の旧習にて、集会和云、徒党と云、義絶と云、中間喧嘩と云、格式論と云、御役争と云ふ等、皆是争鬪の一端に御座候。加之、近来は世上不穩、動もすれば下より上を凌ぎ、国法を恐れざるの悪風流行するに付、御家中多人数の内には軽狂の者有之、前後を不弁、徒に平生の不逞を訴へ、意外の災害を生ずべきも難計……」（編者代表富田正文『福沢諭吉選集』第13巻、岩波書店、1981年、25～26頁）。

「亥年の建白事件」から4年経過した中津藩の現状、因循姑息策ばかりで遅々として改革が進まぬ現状は、福沢にとって、絶望と失望が募るばかりのものであることがわかる。そこで表された憤激が「中津に文学の教なし」なのである。ここには、もはやふたつの改革派、洋学派・開国派と反洋学派・尊攘派の区分も意義もなく、ただ「才」か「不才」の違いがあるだけである。いずれにしても、「世間普通の道理」も知らず、「門地を以て無上の天爵」と思う「世間見ずの田舎風」であるから、「才」は「狡猾姦佞」に流れる「狡猾の才」に止どまり、「不才」は「頑癖固陋」に陥り、結局その「田舎風」もひたすら盲目的に「尽忠報国」を志向する「丹心」の一片もない中途半端なものになっているというのである。福沢はこの様な現状では、上士・下士すべて「争鬪の基」のみが醸されて、中津藩内の改革に向けての「一和」など程遠いというのである。福沢が、「中津の旧習にて、集会和云、徒党と云、義絶と云、中間喧嘩と云、格式論と云、御役争と云ふ等」の「争鬪」、「御家中多人数の内には軽狂の者」による「近来は世上不穩、動もすれば下より上を凌ぎ、国法を恐れざるの悪風流行」という場合、特に4年前の下剋上の様相を呈した中津藩御家騒動、「亥年の建白事件」を想起していることは明白である。これより維新を経て、12年後経過（「亥年の建白事件」からは15年経過）した明治10年（1877）に著された『旧藩情』では、「亥年の建白事件」については、かつての「中津に文学の教なし」との憤激は抑えられ、「世上不穩、動もすれば下より上を凌ぎ、国法を恐れざるの悪風」は後退して、「上士の気風は少しく退却の痕を顕はし、下士の力は漸く進歩の路に在り。一方に鬻の乗ず可きものあれば、他の一方に於て之を黙せざるも亦自然の勢、これを如何とす可らず」と、特に「下士の力」を客観的に一定に評価しながら、洗練化して理解されている。しかし、福沢が初発に抱いていた、「亥年の建白事件」に対して根本的に冷淡で否定的にならざるを得なかった感慨は変わることはなかったのである。

- (14) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、176～179頁。
- (15) 黒屋前掲『中津藩史』、380～382頁。
- (16) 富田正文『考証福澤諭吉』上、岩波書店、1992年、92～93頁。「福澤諭吉と奥平老岐」では、「亥年の建白事件」に関して、『旧藩情』からの引用はもちろんのこと、廣池『中津歴史』から事件の顛末を紹介し、黒屋『中津藩史』から引用している。
- (17) 平山洋『福澤諭吉』（ミネルヴァ書房、2008年）では、次のように指摘している。「論

吉はそのように解釈して(中津召還は沓岐の企みであると解釈して)ますますプライドを傷つけられたのだが、この事が起きてから一五〇年以上が経過した今日、冷静に『福翁自伝』を読み返してみると、沓岐は実際に何も知らなかったのではないか、という印象を受ける。思うに、与兵衛(沓岐の父奥平正韶)は論吉からある種の情報を引き出そうとしていたのではないか(52頁/()内は長谷川。以下同書からの引用について同じ)。奥平与兵衛が中津藩政のための長崎情報を得るために、福沢の中津召還の適当な口実として福沢の母病気のことを作りあげたのではないか、沓岐本人はこうした経緯を知らなかったのではないかと、という指摘である。事実としてはこれは十分にあり得る。それ程、あの福沢に対する長崎追出し・中津召還のトリックは、底が浅く稚拙過ぎていた。しかし、一方、ドラマとしての『福翁自伝』の展開においては、沓岐は、福沢青年に底が浅く稚拙な「悪戯」を仕掛けて、逆にすっかり見透かされ、福沢青年を適塾のある大坂へと向かわせる、トリックスター「猿松」としての役割を演じねばならなかった。

- (18) 前掲『福沢論吉選集』第10巻、95～96頁。
- (19) 黒屋前掲『中津藩史』、411頁。
- (20) 同上、411～412頁。
- (21) 同上、412～413頁。文の一部を読下しにした。
- (22) 前掲『福沢論吉選集』第10巻、294～295頁。福沢論吉は、維新後も鳥津祐太郎と親交を深めていく。病気の鳥津の治療について、福沢は親友の医師石井謙道に懇願する書翰(明治4年と推測される10月27日付)で、鳥津について次のように紹介している。「此人は鳥津祐太郎と申、中津の士なり。旧同藩の中にも兼て別段の懇意、先頃まで参事杯相勤、洋学に志篤く、一藩の標的(模範)とも相成べき正直の人物に御座候。……当人(鳥津祐太郎)は固より分を安んずる人なれば、不如意の中より金を費し老病を救んより、寧ろ子弟の洋学執行に其金を費し度との素志のよきに承及候。……何卒治療の叶ふものならば、一日の命をも延し候はゞ、本人(鳥津)一己の幸のみならず、中津一藩少年の裨益を成すことも多かるべく……」(富田正文編者代表『福沢論吉選集』第13巻、岩波書店、1981年、93頁)。福沢にとって鳥津が、幕末以来、維新後も自分の洋学導入に基づく藩政改革を託することのできる「兼て別段の懇意」であることが切実によく表されている(本稿注37でも見るように鳥津は子息万次郎を慶応義塾に入門させている)。また「固より分を安んずる人なれば、不如意の中より金を費し老病を救んより、寧ろ子弟の洋学執行に其金を費し度との素志」には、福沢が鳥津を「瘠我慢の説」の士として敬愛していることもよく表されている。もし奥平沓岐が鳥津祐太郎のようであったとしたらどうなっていたであろうか(同じ上士でも沓岐の禄高は鳥津のそれを遥かに凌いでいるが)という想像をすることは禁じ得ない魅力がある。
- (23) 黒屋前掲『中津藩史』、425～427頁。奥平昌邁に随行した小幡仁三郎がアメリカにて客死した際の福沢論吉の悲嘆と悔やみには一方ならぬものがあり、明治6年(1873)4月15日付鳥津祐太郎(復生)宛書翰で、次のように訴えている。「仁三郎君凶聞…唯々驚駭愁傷するのみ、同人は生涯の一親友、これまで共に謀りしことも多く、尚

此後、互に依頼して成すべき事共沢山^{これあり}有之、仁三郎君帰国の上は、斯くも可^{いたすべし}致、ヶ様にも可^{とりはからうべし}取計、此も彼もと、様々に後日の事のみ^{あらかじ}預め斯して相楽み居候処、豈^{あにはからん}図此度的一条、心中の百事一時に瓦解、何事も手に付^{つきもうさず}申不、今日に至るまで日々夜々、唯同様の愚痴を申暮し居候」（前掲『福沢諭吉選集』第13巻、102頁）。

- (24) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、267～269頁。
- (25) 同上、261頁。
- (26) 黒屋前掲『中津藩史』、587～590頁。
- (27) 前掲『福沢諭吉選集』第12巻、54～55頁。
- (28) 福沢諭吉は、明治16年（1883）に自分の子息、長男一太郎（21歳）・次男捨次郎（19歳）をアメリカに留学させている。奥平昌邁は17歳でアメリカ留学をしている。福沢自身も27歳で咸臨丸で初めて渡米体験をしている。10代後半～20代青年の欧米留学奨励は当時の福沢の教育方針ともいえる。しかし、福沢は留学中の一太郎・捨次郎への手紙で「学問を勉強して半死半生の色の青い大学者になつて帰て来るより、筋骨逞しき無学文盲なものになつて帰て来い、其方が余程悦^{かりそめ}しい。仮初にも無^{またにく}法な事をして勉強し過ぎるな」（『福翁自伝』、前掲『福沢諭吉選集』第10巻、293頁）と戒めている。これは「先づ獸身を成して後に人心を養ふ」（同上、290頁）とくまはずは丈夫な身体が第一とする福沢の教育論からすると当然ともいえるが、かつて「唯学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」（『学問のすゝめ』、富田正文編者代表『福沢諭吉選集』第3巻、岩波書店、1980年、58頁）「無知文盲の民ほど憐むべき^{またにく}亦悪むべきものはあらず」（61頁）「或は才智逞ふして、役人と為り商人と為りて、天下を動かす者もあり、或は知恵分別なくして、生涯飴やおこしを売る者もあり」（65頁）などと青少年に学問を勧めた『学問のすゝめ』の著者福沢の「学問を勉強して半死半生の色の青い大学者になつて帰て来るより、筋骨逞しき無学文盲なものになつて帰て来い、其方が余程悦^{かりそめ}しい」との謂は、いかにも自説への逆説的な自虐と皮肉に満ちていて興味深く面白い（自己の学説に対してさえ自虐化・相対化できるところに思想家福沢の懐の深さと偉大さがある）。文明開化・啓蒙主義・近代化の試行錯誤から百年以上経過した現在、「学問を勉強して半死半生の色の青い大学者」よりも「筋骨逞しき無学文盲なもの」の方が、「才智逞ふして、役人と為り商人と為りて、天下を動かす者」よりも「知恵分別なくして、生涯飴やおこしを売る者」の方が、遥かに、人間としてまじであり、「其方が余程悦^{かりそめ}しい」ことであることがすっかり露呈してしまっている。
- (29) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、238頁。
- (30) 長谷川洋史「大概版『薩州商社発端』『薩州商社条書』の出自・経緯について」（東亜大学『研究論叢』第23巻第2号、1999年3月）、長谷川洋史「薩州商社と大童信太夫と奥平操と—『薩州商社発端・『薩州商社条書』をめぐって—」（福沢諭吉協会『福沢手帖』第98号、1998年）参照。『慶応卯辰実記』原本（江戸日本橋金花堂のブランドの和綴を用いている）は、現在、宮城県立図書館が保存している。
- (31) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、198頁。慶応3年から4年にかけての戊辰戦争最中の、「慶応塾生には）一方に脱走して賊軍に投ずるものあるかと思へば、一方にはチャ

ント塾に這入^{はいっ}て居る官軍もある」との慶応義塾の慌ただしさについて、福沢は同頁で次のように述べている。「其時（朝敵となった仙台藩の慶応義塾出身の一条某がアメリカ留学からの帰国途上発病して慶応義塾に運び込まれた時）、（慶応義塾生には）薩州の者も居れば土州の者も居る、其官軍一味の者が居て、朝敵だから捕縛しやうと云ふ位な病人（一条某）を扶^{たす}けて看病して居る。爾^そうすると仙台の者が忍んで来る。大槻の倅（当時 21 歳位の仙台藩洋学書生大槻文彦である。文彦はこの頃、大童信太夫の命を受け、「薩州商社発端」「薩州商社条書」を筆写集録した『慶応卯辰実記』を仕上げて居る）なども内々見舞に来て、官軍と賊軍と塾の中で混り合て、朝敵藩の病人を看病して居ながら、何も風波もなければ苦味もない。ソナ事が塾の安全であつた訳けでせう。眞実平等区別なし、疑はんとする疑ふ可き種がない」。学校という存在の意義が一番輝くのは、いつの時代でも、平時よりもこうした混乱期においてである。太平洋戦争の敗戦直後、九死に一生を得て戦地から戻ってきた青年達が焼け跡のような大学にぞくぞく集まったのは学歴でも学閥ゆえのこともなく、再生の時代の新しい知識を渴望してであった。それは乾いた砂地に水が吸い込まれるようであったであろう。こうした状況は、慶応義塾に集まってきた戊辰戦争後の青年達についてもまったく同じであった。慶応義塾が一番輝いていたのも、おそらく、学歴や学閥の影もない創設間もないこの時である（そうであるならば、〈学閥制度は親の敵^{おたがひ}〉との怨嗟が随所から聞こえる現在の学校制度を、福沢がもし見たならば、一体どういう顔をするかは明らかである。福沢が目指した「自主独立」「不羈独立」「独立自主」の精神の形成のための学校の本質が、「自主独立」「不羈独立」「独立自主」の対極にある、組織への隷属しか意味しない学歴を製造する機関に成り果てた現状を、福沢がもし見たならば、一体どういう顔をするかは明らかである。こうした輝いていた瞬間を体験したがゆえに、創設者福沢は慶応義塾の運営・存続に精一杯努めたのである。このように、福沢は文彦を、文彦が若年の頃から、大槻馨溪を通して、よく知っていた。文彦は維新後、当然の如く、日本初の近代国語辞書『言海』完成の報告をし、明治 24 年（1891）の『言海』出版祝賀会には、福沢を招待したのである。この時の模様を、高田宏『言葉の海へ』（新潮社、1978 年）では、次のように描いている。「芝紅葉館の『言海』出版祝賀会に集まった顔ぶれを見ていただきたい。東京日日、日本、読売の記事に挙げられている名前と、文彦が後年自伝で挙げている名前を合わせると、次のようである。明治二十四年六月二十三日の、各人の主な役職等を付しておく。伊藤博文 伯爵 枢密院議長、山田顕義 伯爵 貴族院議員（前司法大臣）、勝安房（海舟） 伯爵 枢密院顧問官、大木喬任 伯爵 文部大臣、榎本武揚 子爵 外務大臣、谷干城 子爵 貴族院議員（元農商務大臣）、土方久元 子爵 宮内大臣、杉孫七郎 子爵 貴族院議員（前宮内大臣）、花房義質 宮内次官（元露国特命全權公使・前農商務次官）、細川潤次郎 貴族院全院委員長（元司法次官）、辻新次 文部次官（旧明六社員）、加藤弘之 帝国大学総長・貴族院議員（旧明六社員）、西村茂樹 宮中顧問官・貴族院議員（元文部省編輯局長・旧明六社員）、津田真道 衆議院副議長（旧明六社員）、浜尾新 専門学務局長・貴族院議員、菊池大麓 理科大学長・貴族院議員、重野安繹 文科大学教授・貴族院議員、物集高見 文科大学教授（元文部省記録課長）、

木村^{まさこと}正辞 文科大学教授、黒川^{まより}真頼 東京音楽学校・美術学校教授、関直彦 東京日日新聞社長・衆議院議員、高田早苗 読売新聞主筆・衆議院議員、^{くがかつなん}陸羯南 『日本』主筆、矢野竜溪（文雄） 前郵便報知新聞主宰者（慶応義塾卒）、伊達菊重郎 旧仙台藩主次男（英国留学前の青年）、伊達宗教 男爵 貴族院議員（元仙台藩主別家）、船越衛 宮城県知事、松平正直 熊本県知事、大槻修二（如電） 日本音楽学者（文彦の兄）、宮崎正風 男爵 宮中顧問官、富田鉄之助 貴族院議員（前日本銀行総裁・旧明六社員）……福沢諭吉が、当初は出席予定であった。明六社のメンバーの一人であり大槻家の家と縁の深い福沢にはスピーチもお願いしたいと言って、富田鉄之助が福沢を訪ねて承諾を得た。ところが数日後、祝宴での演説次第書を見て、福沢は出席を止めてしまう。一貴顕（たぶん伊藤博文のような大物政治家）の次に自分の名前があったため、『私は貴顕の尾につくのはいやだ、学者の立場から政事家と伍をなすを好まぬ』と、一度は約束した出席を断ったのだ。……富田が祝宴への出席を依頼に行く前に、出来たばかりの『言海』を持って、文彦が福沢の家を訪ねた。そのとき福沢は、『結構なものが出来ましたナ』と言いながら、『言海』の語順が五十音順であるのに眉をひそめた。『寄席の下足札が五十音でいけますか』。五十八歳の福沢にはイロハ順が染みついている、五十音は感覚の上で受入れにくかったのだろう。『小学でもハヤ二十年来五十音を教へて居ることに思ひ至られなかつたのもあろうか』と、文彦が抑えた口惜しさを洩らしているが……」（20～26頁／（ ）内は長谷川。句点と中黒と『 』を補った）。招待客には明治初期の福沢諭吉らによる啓蒙集団、明六社の主要メンバーが揃っていることは、文彦が、青年期、明治の啓蒙主義・開明主義に育まれたこと、『言海』上梓はその育みのひとつの成果であること、を大いに反映している。『言海』の語順の五十音順については、「大槻の倅」が福沢（福沢自身の内なる習慣化の保守性・非開明性）に対して見事一本取ったが、福沢が、日本初の近代的国語辞書『言海』の完成に対して、自分達が導入し切り開いてきた啓蒙主義・開明主義の大きな果実として感嘆したことは確かである。それでいて、福沢が、『言海』出版への祝、幕末以来の大槻磐溪家との交流、明六社の関連などで、一度は出席しようとした『言海』出版祝賀会を結局、欠席した理由は、祝賀会招待客の、伯爵・子爵、ずらりと並んだ綺羅星の豪華な顔触れを見れば、わかるような気がする。「私は貴顕の尾につくのはいやだ、学者の立場から政事家と伍をなすを好まぬ」とのことの他に、とりわけ福沢の精神を大いに苛立たせたのは、伯爵・枢密院顧問官勝海舟、子爵・外務大臣榎本武揚など、元幕臣でありながら、爵位（福沢が嫌悪した虚威の典型）まで授与されている明治政府高官の存在であったであろう。勝・榎本は、福沢の「不羈独立」思想の根本をなす「我慢の説」の対極にあり、福沢の思想としては、一定の趣意を持った集まりを共にすべき存在ではなかった。

- (32) 4代將軍徳川家綱の時、万治3年（1660）、江戸での遊里通い・遊蕩など不行跡・不届を理由に、幕府から逼塞を命じられた3代仙台藩主伊達綱宗（父は2代藩主伊達忠宗）を隠居・廢黜させ、その子、2歳の亀千代丸（4代仙台藩主伊達綱村）に襲封させた伊達一門・重臣内では、藩権力を掌握し専制をおこない、反対者には厳しく弾圧する伊達家一門伊達兵部宗勝（伊達政宗の十男、綱宗の叔父）・奉行（家老職相当）

原田甲斐宗輔らとそれに反発する湧谷伊達氏の伊達安芸宗重（湧谷伊達氏は藩主伊達家の重臣であり、藩主伊達政宗から湧谷邑主として伊達姓を名乗ることを許された）らによる内紛・抗争が、亀千代丸暗殺未遂事件（亀千代丸の後見役であるはずの伊達兵部らの権力的野心の陰謀によるものとも見られた）や伊達式部（伊達忠宗の五男で伊達綱宗の兄。寛文事件の1年前に急死、巷間、伊達兵部による毒殺説もある）と伊達安芸の知行地争いによって一層激化した。この一連の仙台藩内紛は、伊達安芸の幕府への訴えによって、幕府大老酒井雅楽頭忠清らが審問・裁定するところとなり、寛文11年（1671）、その審問中に、突如、原田甲斐が伊達安芸に斬りかかり殺害、乱闘となり、原田はじめ数名が死亡するという凄惨な刃傷事件の形で終結した（寛文事件）。この刃傷事件の結果、藩主後見役の伊達兵部は所領没収の上、土佐藩預かり（伊達兵部は数年後土佐で死去）、原田一族は死罪、その代わり、藩主伊達綱村は仙台藩62万石の本領安堵を許され、12年にわたる伊達騒動は着落した。奇しくも寛文事件の4年前の寛文8年（1668）、奥平中金家嫡家（8代奥平隼人守雄）が廃絶となる刃傷事件が起こり、「八代隼人守雄に至り、寛文八年三月二日、宇都宮興禪寺に於ける忠昌公（藩主奥平忠昌）二七日法会の上、同僚奥平内藏允正輝と喧嘩刃傷事件を惹起し、永く追放を命ぜらる。武勲名門の嫡家、是に於て断絶す。支流（庶子流・分家）、中津（奥平壱岐へと繋がる）及松平下総守家にあり」（黒屋前掲『中津藩史』、446～447頁）という事態となり、寛文事件の翌年、寛文12年（1672）に「浄瑠璃坂讐討」事件の大流血の結末となっている（本稿注①参照）。これより196年後の文久3年に今度は、9歳の伊達儀三郎擁立に努めた奥平壱岐が「追放」されることになるのであるが、興禪寺刃傷事件・「浄瑠璃坂讐討」事件は、伊達騒動よりは規模は小さいが、奥平一門内でのある種の御家騒動であった。仙台伊達家とは兄弟関係にある宇和島伊達家出身の幼主が大きく絡んだ「亥年の建白事件」における壱岐についての巷説・風説は、ひとつの共同幻想として定着していた伊達騒動の御家狂言に引き付けられて理解されやすい要因を実に多く内包していたのである。

- (33) 寛文事件から1世紀以上にわたり、伊達騒動を基に脚色され上演された歌舞伎・浄瑠璃の類いは、実に多数ある。現在わかっている伊達騒動狂言の最も古いものは、寛文事件から43年経過した正徳3年（1713）に江戸市村座で上演された歌舞伎『泰平女今川』である。当然、寛文事件後の43年間にも、伊達騒動についての口伝・巷説は広く醸成されていたわけである。『伽羅先代萩』はそうした伊達騒動狂言の内の代表的ひとつである。1世紀以上にわたるこの膨大な口伝・巷説と説話の集積の存在は、これら説話が純粹に特定の作者個人による創作ではなく、伊達騒動が事実の次元を遙かに超えたひとつの共同幻想として確立していったことを示している。本稿で用いた『伽羅先代萩』は、寛文事件から110年後の安永6年（1777）に大坂中之芝居で初演された歌舞伎狂言『伽羅先代萩』（作者奈河亀輔）が、8年後の天明5年（1785）に浄瑠璃（作者松貫四・高橋武兵衛・吉田角丸）として、江戸結城座で初演されたものであり、鶴見誠校注『浄瑠璃集下』（『日本古典文学大系』52、岩波書店、1959年）と宇野信夫訳『浄瑠璃名作集』（『古典日本文学』24、筑摩書房、1976年）を参照した。『伽羅先代萩』では、鎌倉幕府・将軍源頼朝時代に設定替えしてある。その内容

は、情愛・義理・忠義・善悪入り乱れたドラマ展開、無慈悲な悪人設定、豪傑や妖術使まで登場する剣劇と伝奇、駄洒落の類いまで出てくる滑稽劇、など多様な要素が盛り込まれた、化政文化へと展開する爛熟した江戸文化が集約されているものであるが、本稿に関連した部分だけ要約すると、次の通りである。鎌倉幕府の頃、奥州54郡の領主冠者太郎義綱の「伯父」にして「家老同然」である錦戸刑部とその配下の重臣貝田勘解由らは、所領を横領するため、島原遊女高尾をあてがって、義綱を遊興に溺れさせて政治から遠のけて隠居させ、更には幼君鶴喜代丸（義綱の嫡子）を毒殺しようと奸計をめぐらす。忠臣の伊達明衡・松ヶ枝節之助はその奸計を阻止するために立ち上がる。その結果、この騒動は、鎌倉幕府に訴えられ、佞臣貝田勘解由は伊達明衡に敗れ（原田甲斐の斬殺に対応）、首謀者錦戸刑部は流刑に処されて（伊達兵部の所領没収・土佐藩預かりに対応）、騒動は落着する。

- (34) 淨瑠璃『伽羅先代萩』の冠者太郎義綱は藩主伊達綱宗に、鶴喜代丸は亀千代丸に、悪の錦戸刑部は伊達兵部に、悪の貝田勘解由は原田甲斐に、善の伊達明衡は伊達安芸に、鎌倉幕府重臣畠山重忠は徳川幕府老中酒井忠清に、將軍源頼朝は將軍徳川家綱に、忠臣の伊東新左衛門・伊東七十郎・里見十左衛門らは松ヶ枝節之助・稲妻郷助らにそれぞれ対応しているが、「亥年の建白事件」を伊達騒動・『伽羅先代萩』に擬するとすれば、冠者太郎義綱・伊達綱宗は藩主奥平昌服に、2歳の鶴喜代丸・亀千代丸は9歳の伊達儀三郎（奥平昌邁）に、伊達明衡は奥平家一門・門閥奥平図書に、忠臣松ヶ枝節之助・稲妻郷助らは水島六兵衛らに、そうして伊達家一門・門閥の錦戸刑部・伊達兵部と奉行（家老職相当）の貝田勘解由・原田甲斐を合成したイメージに、奥平家一門・門閥にして江戸家老である奥平峯岐を対応させることができる。
- (35) 大槻文彦『伊達騒動実録』上・下（復刻版）、名著出版、1970年。同書上の「序言」で、明治四十二年七月の日付で、大槻文彦は次のように述べている。「此事件（伊達騒動・寛文事件）につきて、世には、小説に、軍談に、歌舞伎に、年ごろ、あらぬ事を作りものしてもてはやし、まことの事跡は、いとゞしくおしやすめられてあり（はなはだしくごまかされていて）、文彦が祖父玄沢茂質、これをなげきて、嘗て、此事件の実録を作らむの志ありて、年ごろ材料をあつめ、伯父玄幹茂楨、これに増補して、寛文秘録と題する一書を編せしかど、材料を得るに難き世なりしかば、尚、物足らぬもなりき。此事、固より、一侯家の内訌にて、国史に大きな関係あるにもあらねど、妄伝を破りて、事実をあきらかにし、忠臣の蹟をあらはさむも、亦史筆の任なるべければ、おのれ、あらたに編纂せむの志を起して、明治二十五年よりはじめて、……拮据綱繆すること、十年にして、記載の材料、積み々々て、……又、数年をつひやして、遂に前後十六年にて、始めて作り畢へて、……この事件の事実顛末、こゝにはじめて闡明となりぬ。頗る世の蒙を啓くに足りなむか。因て、伊達騒動実録と題して、活字の摺物として、世にいだすものぞ此書にはある。祖父伯父の世は、秘密の世なりき。縦ひ、事実の材料を得たりとも、世に発表することを得ざりけむ。然るに、今、開明の氣運、あまねく世の秘府を開くに至り。おのれ文彦、こゝに生れあひて、大に史料の蒐集に力を尽すことを得て、終に、この書を大成し、刊行して、その遺志を達したり。ひとつには、世の妄伝を破りて、忠臣の蹟を顯はし、祖父伯父の靈を慰すること

を得て、心の甚だ闊然たるをおぼゆるぞかし」(3~6頁/()内は長谷川。漢字の一部を現在のものに換エルビを振り句読点・中黒を補った)。文彦は、『言海』上梓の翌年明治25年(1892)に『伊達騒動実録』の編纂に着手している。宿願であった『言海』上梓直後に矢継ぎ早に着手していること、完成まで18年を費やしていることは、文彦にとって、『伊達騒動実録』の上梓が『言海』に次ぐ宿願であり大事業であったことをよく示している。大槻文彦が『伊達騒動実録』に込めた強いこだわりは、伊達騒動についての「世には、小説に、軍談に、歌舞伎に、年ごろ、あらぬ事を作りものしてもてはやし」とする「妄伝」を「破りて、事実をあからかに」するために、祖父大槻玄沢・伯父大槻玄幹以来の伊達騒動史料編纂事業を完遂させる(『伊達騒動実録』の内容の半分は蒐集した史料が占めておける)ということにあるのである。たとえば、冠者太郎義綱(藩主伊達綱宗がモデル)を遊郭と酒色に誘い導いた「佞臣」を『伽羅先代萩』では、錦戸兵部(伊達兵部がモデル)・貝田勘解由(原田甲斐がモデル)にしているが(錦戸兵部は、義綱の伽羅下駄に郭に自然に足が向くようになる呪いを掛けさせさしている)。『伊達騒動実録』では、藩主伊達綱宗を直接遊里と遊興に誘い導いた「佞臣」は、伊達兵部・原田甲斐ではなく、浪人あがりで綱宗昵懇の側近、坂本八郎左衛門・渡辺九郎左衛門・畑与右衛門・宮本又市らであると、蒐集史料を基に述べている(同書では坂本らについて憎々しげに「佞臣共」と表記している(同上、75頁))。さらにいえば、『伊達騒動実録』上巻では、「世には寛文仙台の悪政に付きては、偏に、兵部少輔・原田甲斐を称すれど、其实、奸魁は、渡辺金兵衛、今村善太夫にて、兵部、固より驕横なれど、簸弄せられてありし痕跡なきにあらず、甲斐は、奸魁に附随雷同せし姿なり」(同上、778頁)と述べているのように、伊達兵部・原田甲斐は確かに「佞臣」ではあるが、騒動をもたらした真の「佞臣」「奸魁」は、家老(奉行)原田甲斐らの配下にある下級クラスの官吏渡辺金兵衛らであり、上級クラスの伊達兵部・原田甲斐は、渡辺らに利用され「簸弄」された(これもある種の下剋上)のが真相であると結論づけているのである。「亥年の建白事件」で作られた奥平壱岐像は、伊達兵部と原田甲斐のイメージの複合体であったが、上の伊達騒動の伊達兵部・原田甲斐のことは、配下のものにおだてられ利用されて「佞臣」の汚名を一身に負わされて追放された壱岐と類似しているし、「兵部、固より驕横なれど」などは、「唯其心術の不遜にして徳性の欠如」「唯大家の我儘なお坊さん」との壱岐への評価と実によく対応している。注目すべきは、文彦が「妄伝を破りて、事実をあからかにし、忠臣の蹟をあらはさむ」「世の妄伝を破りて、忠臣の蹟を顯はし」と繰り返していることである。つまり、『伊達騒動実録』の最終的目的は、分厚く流布している「妄伝」が深く覆い隠している真実の「忠臣の蹟」を明らかにすることにあつたのである。伊達騒動について「妄伝を破りて、事実をあからかにし、忠臣の蹟をあらはさむ」とする時に文彦が常に脳裏にあつたのは、維新直後、仙台藩において、父磐溪はじめ奥羽越列藩同盟と佐幕を担った重臣達が藩主を陥れ伊達家を危機に導いた「佞臣」の刻印を付けられ惨く処刑されるいは藩から追放されたこと、その父磐溪の助命歎願のため必死に東奔西走した若年の自分の姿であつたはずである。維新の変動期において、
 <真の忠臣は誰だったのか? 維新直後保身と藩安泰のため変節して一部重臣をスケー

プゴートにする姑息の策を弄した^{えんせ}似非忠臣は誰だったのか?。『伊達騒動実録』上梓の前年明治41年(1908)、磐溪の事跡について大槻家の子孫に伝えるべく『磐溪事畧』(文彦の養子大槻茂雄が著者・発行者、宮城県立図書館所蔵)が自家出版された。そこで、次のように記されている。「(磐溪祖父様は)夫れから又明治の世の中が西洋文物流行となつたを見られて、夫れ見ろ、おれが攘夷論の火のやうな中で開国せにやならぬと云つて居た。其通りであらう。あの時、鎖国攘夷を唱へた者は本当に世界の形勢を知らぬ大たわけだなどと御酒さげんでは大気焔も度々吐られた」(119～120頁)。磐溪は、儒学者(仙台藩藩校養学館学頭)ではあるが父玄沢の次男だけあって、佐幕であるが、蘭学も修得している反攘夷の開国派であり、大の攘夷嫌いの福沢諭吉と幕末期、深い交流があるのも当然ではある。磐溪にとって、維新に際して自分らをスケープゴートにする姑息策を弄する仙台藩の忠臣面した風見鶏の俄か開明派の連中(本当は頑迷な攘夷主義者)もまた「本当に世界の形勢を知らぬ大たわけ」なわけである。明治4年(1871)の釈放後、自適の隠遁生活を送っている外観があるが、自らを「亡国の臣、何の面目」とも自虐していた父磐溪(釈放後8年後の明治11年<1878>に没)の胸奥にある払拭しがたい憂憤を文彦自身も深い憂憤の内に見取っていたはずである。「亡国の臣、何の面目」と官途の誘いを断った、釈放後の「亡国の臣」磐溪の生涯は、福沢の目にはひとつの「瘠我慢の説」と映ったに相違ない。文彦が『伊達騒動実録』で踏み止どまり、(仙台藩維新騒動実録)に及ばなかったのは、福沢諭吉没後、約10年経過して福沢らが推進した如く「今、開明の気運」が高まって、「あまねく世の秘府を開くに至り」、父磐溪らが、原田甲斐のように「極悪人」「佞臣」の「妄伝」に塗り込まれることがなく、一定の名誉回復がおこなわれ、あえて全面的に父磐溪らの「忠臣の蹟をあらはさむ」必要がなかったからであろう。それにしても磐溪・文彦父子は、維新に際して共に体験したあの過酷な光景を生涯、決して忘れることがなかったことは確かである。

(36) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、239～241頁。

(37) 前掲『福沢諭吉選集』第13巻、14～15頁。福沢諭吉は、この洋学導入に基づく藩政改革建白から5年後、同じく島津祐太郎宛の慶応2年2月6日付書翰(本稿注(13)ではその一部を引用)で藩政改革建白に関係したことを、ある種建白して、次のように述べている。そこには文久2年にロンドンから訴えた藩政改革建白を発して以来、5年間、まるで遅々として進まぬ藩政改革の現状に対する苛立った憤激に満ちている。「両三年来、江戸の形勢も一面目を改め、専ら西洋法(西洋的方法)に赴き、既に公儀にては横浜え英仏学校取建相成、其外海陸軍の御世話も不相替盛にて、追々人物も出来申候。就ては諸藩にても自から其風に従ひ、何れも西洋学の心配いたし、諸所より出府のもの多く、先を争ひ開国に進歩いたし候姿に御座候。然^{しか}延^び奥^平家におゐては、今日に至るまで無^そ其^の儀、所謂古法旧例を守る者歟、富国強兵の事に就ては一事も見るべきものなし、残念不少候。扱、国家の弊を歎息するも書生論にて、国家の弊を救ふも是亦書生の関する所と存候。依て今、中津の弊を枚挙し、亦之を救ふの策を論ずべし」(同上、25頁)。福沢が唾棄する「書生論」とは、現実認識に欠けたやたら複雑に捻った言葉の遊戯、「空論」である。福沢が建白する「中津の弊を枚挙し、亦之を救ふの

策」とは、「則其策は文学（福沢はこれを「此迄の漢学にあらず」としている）を盛にするなり」と実に簡潔にいい及んでいるように、幕府が横浜に「追々人物」を育てることが期待できる「英仏学校」を開設したことに習い、中津に洋学に基づく学校を広く開設し「文学」を普及させることであった。福沢は同書翰で次のことを確信し結論づける。「方今、中津中に文学を引立、人々見聞を博くし、人の人たる道理を知らしめ、銘々向ふ所を知り安ずる所を得ば、各才不才の分を守るを知り、之を小にすれば一身の樂にもなり、之を大にすれば国家を憂ふるの大趣意を解し、豈計らんや此まで喜びし事は喜ぶべきにあらず、此まで怒りし事は怒るべきにあらず、昨日の争は今日の譲りとなり、昨日捨てたるものは今日争ふに至り、御家中の喜怒哀楽一変して人気調和し、従ては富国強兵の道も開け可申哉に存候」（同上、26頁）。福沢の従来「書生論」式建白への嫌悪と唾棄は、福沢の文久年間以来の、藩政改革の要、洋学導入による学校開設とそれに基づく「文学」普及・人物育成の建白を一点、現実的に徹底的に推し進め、遂に明治4年の旧藩主・元知藩事奥平昌邁のアメリカ留学と中津市立学校開設実現に至らせた動力源のひとつになっている。また、島津祐太郎は、自分の子息万次郎を明治3年に慶応義塾に入門させている（同上、27頁の注参照）。

- (38) 小野正雄「大名のアヘン戦争認識」（『岩波講座 日本通史』第15巻、岩波書店、1995年）、308～309頁。（ ）は長谷川。句点を補った。
- (39) 同上、300～301頁。
- (40) 『福翁自伝』、前掲『福沢論吉選集』第10巻、224頁。
- (41) 平山洋前掲『福澤論吉』では、暗殺計画は、福沢が中津へと渡る前、大阪ですでに始まっていたことを、次のように紹介している。「論吉たちの大阪着と相前後して、増田（宋太郎）も（中津へ）帰省のため大阪に立ち寄ることになったのである。増田は密かに朝吹（福沢の従兄弟の医師藤本元岱の従者、朝吹英二）を呼び出して、論吉の暗殺を命じると、そのまま船に乗ってしまった。朝吹が論吉暗殺の絶好の機会を逃したのは（明治3年）十一月八日頃のことであった。上町の緒方洪庵未亡人宅を訪問した帰り、本町橋に差し掛かったとき、駕籠の中の論吉を外から刺し貫こうとしたところ、突然鳴り響いた寄席のハネ太鼓に驚いて、すっかり拍子抜けとなってしまったのである。論吉は朝吹が自分を狙っていたことなどまったく知らぬまま、十一日出港の船で中津に向かった」（252頁）。京都で福沢暗殺をしようとしていた増田宋太郎が弟分の朝吹英二（1849嘉永2～1918大正7／耶馬溪出身の朝吹は後に尊攘派から転向、福沢の甥中上川彦次郎の妹と結婚、慶応義塾に入学、慶応義塾出版社主任となり、岩崎弥太郎の三菱商会を経て、義兄中上川の推挙で鐘淵紡績会社に入り、さらに中上川の三井工業化方策を担うべく三井工業部専務理事に就き、三井合名会社参事を務める）に福沢暗殺を託したというのであるが、偶然の「突然鳴り響いた寄席のハネ太鼓」、暗殺者の一瞬のためらいで未遂に終わるところは、映画の場面のような緊迫感がある。いずれにしても福沢が〈魔の明治3年〉（この年の5月に福沢は発疹チフスに罹り一時重篤な状態に陥っている）を生き抜けたことは奇跡としかいいようがないのである。
- (42) 前掲『福沢論吉選集』第10巻、222～223頁。
- (43) 同上、224～225頁。

(44)、(45) 昆野和七校訂『新版 福翁自伝』（角川文庫、2008年）の「解説」で平山洋は次のように述べている。本稿にとって、非常に示唆に富む内容なので長めに引用する。「フランクリンの自伝〔ベンジャミン・フランクリン『フランクリン自伝』〕には、『成功者への道はいかにして開かれたか』というはっきりしたテーマがあった〔本稿も『福翁自伝』のサクセス・ストーリー、〈福沢青年世に出る物語〉の側面に焦点を当て、そこにおけるトリックスターの役割を演じる奥平老岐の意味を探ってきた〕。福沢のそれも、『独立自尊への道を示す』という主題があって、それにそぐわない事実は扱っていない可能性がある。このことを裏付ける事柄として、『福翁自伝』には、語られるべきだが触れられていない人々が数多くいる。維新前についていうならば、中津とともに暮らしていたはずの祖母福沢^{おらく}於^{いかりまる}楽や、面授の師匠である野本^{しんじょう}真城、親戚で中津尊王派の渡辺^{いかりまる}重石丸、同じく中津尊王派の水島六兵衛、また適塾の先輩で後に明治政府高官となる大鳥圭介、幕府外国方の上小栗^{ただまさ}忠順、熊本実学党^{おわた くみただのぶ}の太田黒惟信らとの交流に言及していない。そのうち、藩校進脩館^{しんしゅうかん}の学長であった真城は、元家老奥平与兵衛の盟友である。そればかりでなく、諭吉の師匠の服部五郎兵衛や白石照山、実兄の三之助、家老の奥平老岐、義兄の今泉郡司、親戚の大橋六助らを指導していて、福沢の中津での交友は、真城を軸としていたといつてよいほどである。究^{きゅう}理学（数学・経済学）を豊^{ひじ}後^ご日出^ひの実学者^{おあしばんり}帆^ふ足^{あし}万里、日本史を京都の尊王家^{らいつさんよう}頼山陽に学んだ野本真城は、藩財政再建と軍備増強を主唱する中津藩改革党の思想的背景であった。真城は諭吉の父百助の親友で、若き日には一緒に上方旅行をして、師匠の頼山陽に百助を紹介している。また、真城の代表作は、尊王攘夷思想の総帥徳川斉昭への高覧を図った『海防論』であるが、それは海軍の近代化を図ることの必要性を強く主張した著作である。福沢に、実学を重視し国防力を増強するべきだ、という思想を移植したのは真城である。にもかかわらず福沢は真城について黙している。中津藩改革党には、実学派と尊王派の二つの派閥があった。実学派は藩校で真城の教えを受けた中堅の藩士を中心とする勢力で、数学と経済学を修めることで経済力を充実させて藩財政を再建する、ということ活動を主眼としていた。一方尊王派は、藩校に入学できない下級武士層を中核としていて、彼らは真城の個別指導により、頼山陽の『日本外史』を学んで愛国心を涵養したのであった。尊王派は、実学派の、『軍事力を強化するためにも、先ずは外国と貿易することで利益を得る必要がある』という意見に耳をかさず、『鎖国を継続して国内の産業を保護するべきだ』と主張した。そのため、『公武合体・開国』を唱える実学派と、『攘夷・鎖国』を唱える尊王派は、路線の違いから、安政五年（一八五八）の日米修好通商条約の締結以降、激しく対立することになった。尊王派の指導者でもある真城は、後年福沢の暗殺を企画すること〔明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件〕になる渡辺^{いかりまる}重石丸や水島、さらに彼らの親戚でもあった増田宋太郎にとって、福沢は師匠真城の尊王攘夷思想を軽んじて、外国との通商ばかりを重視する裏切者であった。自伝『幼少の時』の章で、福沢家で飲み会をしていた実学派の人々と、『暗殺の心配』の章において、帰省中の福沢を殺害しようとした尊王派の人々は、もとはといえば同門の仲間だったのである。同じ師に学んだかつての友人たちから命を狙われたという過去を、福沢は明かしたくなかったであろう」（401～403頁／〔 〕

内は長谷川)。平山洋前掲『福澤諭吉』では、藩校進脩館学長野本真城の存在を重視し詳細に述べてられている。確かに野本真城は実に魅力的存在である。野本は、福澤諭吉の父百助の親友・学友であり、奥平壱岐の父与兵衛（正韶）の藩改革の盟友であり、福澤の漢学師匠である服部五郎兵衛・白石照山と福澤の兄三之助の指導者であり、福澤・壱岐・水島六兵衛・安田宋太郎を教授したものであり（詳細は平山前掲『福澤諭吉』第1章参照）、その包摂する範囲の広さは驚くべきものがある。また、野本の学問的思想的領域も広くて、帆足万里直伝の実学へ展開する「究理学」と頼山陽直伝の尊王史観「日本史」を一身に体現している（詳細は平山同上書同章参照）。さらにまた野本は、藩改革の変形ともいえる「亥年の建白事件」より24年前、天保11年（1840）の「中津藩天保子年の改革」を指導したが、その下土層支援・上土層負担増の改革内容のため、藩追放となった（詳細は平山同上書同章参照）。以後、野本真城からの影響を共通項として、中津藩改革派は上土層を中心とした洋学に基づく「実学派」と下土層を中心とした尊王史観に基づく「尊王派」に分化し、二つの方向の改革志向が絡み合い展開していくことになり、改革など志向せず、ひたすら現状維持と身分維持のみを志向する上土層（特にその上層）の保守派は、時々の状況に応じて、実学派と尊王派の改革派にすり寄り、自己の安泰を図ることになるのである。「亥年の建白事件」は、尊王派の実学派への揺さぶりともいえるのである。洋化を基準にすると、実学派は洋学派で、尊王派は反洋学派ともいえる。さらにいえば、この基準からすると、洋学派にとって、反洋学派は頑迷な反動といえ、反洋学派にとって、洋学派は幕藩体制と皇国の伝統的秩序を破壊する西洋かぶれといえる。洋学派の代表が「中津時代以降の傑物」、門閥奥平壱岐とすると、反洋学派の代表は〈逸材三人〉の一人、下土水島六兵衛といえる。福沢は明らかに壱岐配下の洋学派であるが、その出身は、慣れ親しい血縁や友人の多くが属する反洋学派と同じ下土層であるところに、福沢の複雑で微妙な立場がある。その複雑で微妙な関係が最大限に集約されているのは、福沢と壱岐の関係である。本稿で述べてきたように、福沢と壱岐の複雑で微妙な関係は「亥年の建白事件」に至るまでの長い蓄積がすでにあるのであり、そこに「亥年の建白事件」が加わったからである。福沢の、「亥年の建白事件」及びそこでの壱岐のことについての深い沈黙については、本稿では、「独立自尊への道を示すという主題」から外れたということの他に、そうした福沢と壱岐の積年の関係の蓄積を加えてみたいのである。いずれにしても、水島がかつて暗殺の対象とした壱岐と福沢が相似形であるとする認識を持ち、今度は福沢暗殺を企てるということは極めて自然であるといえる。しかし、父福沢百助の親友・学友でもあった学者野本真城についての福沢の沈黙と、同じく百助の親友、学者中村栗園についての、次のような、『福翁自伝』における福沢の饒舌の鋭い対照は、気になるところである。「江州水口の碩学、中村栗園は父の実弟のやうに親しくして居ましたが、元来、栗園の身分は豊前中津の染物屋の息子で、所謂素町人の子だから、藩中士族は誰も相手になるものがない、けれども私の父は其人物を愛して、身分の相違を問はず大層丁寧（みなくち）に取扱ふて、大阪の蔵屋敷の家に奇遇させて、尚ほ種々に周旋して、とうとう水口（水口藩）の儒者になるやうに取持ち、其間柄と云ふものは真に骨肉の兄弟にも劣らず、父の死後、私の代になつても、

栗園先生は福沢の家を第二の実家のやうな塩梅にして、死ぬまで交際して居りました」(176頁)。「其時の道中(攘夷熱が高まる元治元年<1864>頃、中津から江戸への帰途)であつたか、江州水口中村栗園先生の門前を素通りしましたが、是れは甚だ気に済まぬ。栗園の事は前にも申す通り、私の家と浅からぬ縁のある人で、前年私が始めて江戸に出るとき、水口を通行して其処へ尋ねた所が、先生は非常に喜んで、過ぎし昔の事共を私に話して聞かせ、『お前の御親父の大阪で御不幸の時は、私はスグ大阪に行て、ソレカラお前達が船に乗て中津に帰る其時には、私がお前を抱いて安治川の船まで行て別れた。其ときお前は年弱の三つで、何んにも知らなからう』など、云ふ話で、私も実にほんとうの親に逢ふたやうな心持がして、今晩は是非泊れと云て、中村の家に一泊しました。斯くまでの間柄であるから、今度も是非とも訪問しなければならぬ。所が其前に人の噂を聞けば、水口の中村先生は、近来専ら孫子の講釈をして、玄関には具足などが飾つてあると云ふ。問ふに及ばず立派な攘夷家である。人情としては是非とも立寄つて訪問せねばならぬが、ドウモ寄ることが出来ぬ。栗園先生は頼んでも私を害する人ではないが、血気の門弟が沢山居るから、立寄れば逆も助からぬと思て、不本意ながら其門前を素通りしました。其後、先生には面会の機会がなく、遂に故人になられました。今日に至るまでも甚だ心残りで不愉快に思ひます」(221~222頁)。大の攘夷嫌いの福沢が、中村栗園について、「問ふに及ばず立派な攘夷家である」と評しているのは、嫌悪や皮肉では決してなくある種の愛惜と愛敬の表現となっている。中村栗園の門前をたつた一度、意識的に素通りしたことに、福沢が生涯において「甚だ心残りで不愉快に思ひます」と自責し続けた心情は、大袈裟なものではなさそうである。福沢にとって、中村栗園は、根本的ともいえるような思想的相違さえ越えた濃厚な親愛と愛敬の対象であり得たことは確かである。福沢は、思想ではない領域にあって掛け替えのないもの(それは思想的相違など無意味にしている価値あるもの)については、ほとんど言語化しなかった。

- (46) 明治政府の開化政策・洋化政策に対する憎悪・拒否反応を潜めた「不平士族」の反乱の最大にして最後のものが西南戦争であったが、周知のように、福沢は、西南戦争終結・西郷自決直後に執筆した『明治十年丁丑公論』(以下『丁丑公論』と略記/明治34<1901>公刊)において、西南戦争の主人公にして薩軍のカリスマ的総帥である西郷隆盛を「古今無類の賊臣」とする世論の西郷糾弾を批判して、ドライな福沢論吉にしては情念的な思い入れを込めて西郷隆盛論を展開した。開化政策・洋化政策の権化のような福沢による西郷擁護は、いかにもミスマッチのように見えるが、福沢の「瘠我慢の説」からすれば、論理的に一貫した整合性を持っている。『丁丑公論』と『瘠我慢の説』(明治24年<1891>脱稿・明治34年<1901>公刊)は、内的には一対になっているのである。両者は、脱稿から長い時を経て、明治34年、ほとんど福沢の死と時を同じくして同時に公刊された(『丁丑公論』は25年後、『瘠我慢の説』は11年後)。『丁丑公論』『瘠我慢の説』公刊の事情について、時事新報社主幹石河幹明が明治34年4月付で追記した、『丁丑公論』の前書で次のように記している。「丁丑公論の一書は、福沢先生が、明治十年西南戦争の鎮定後、直に筆を執て著述せられたるものなれども、当時世間に憚かる所あるを以て、秘して人に示さず、爾來二十余年の

久しき、先生も自ら此著あるを忘却せられたるが如し。……本年（明治34年）一月、先生の旧稿瘠我慢の説を時事新報に揚ぐるや、次で此書（『丁丑公論』）をも公にせんことを請ひしに、先生始めて思ひ出され、最早や世に出すも差支なかる可しとて、其請を許されぬ。依て二月一日より時事新報に掲載すること、せしに、掲載未だ半ならず、先生、宿痾再発して遂に起たず（明治34年2月3日没）（前掲『福沢論吉選集』第12巻、206頁）。石河幹明は、「先生も自ら此著あるを忘却せられたるが如し」といっているが、その内容は、「忘却」どころか、『丁丑公論』には（『瘠我慢の説』もそうであるが）、当時公刊を憚る程、福沢の思想が根源的に直截的に表出されたものであり、福沢が自らの思想の根源として、自らの内側に血肉化したものである。『丁丑公論』で展開した西郷隆盛論を通して述べたことは後に『瘠我慢の説』でより明確に、「瘠我慢の説」として思想化したのである。『丁丑公論』で展開した西郷隆盛論の核心は、〈不義あわの粟〉を拒絶して自己の内的倫理の節を屈せず持続させていく意志「精神」、後に『瘠我慢の説』として昇華されていくものであった。『丁丑公論』の「緒言」で福沢は、『丁丑公論』執筆の意図と目的について、次のように記している。「近來、日本の景況を察するに、文明の虚説に欺かれて、抵抗の精神は次第に衰頹するが如し。苟も憂国の士は之を救ふの術を求めざる可らず。抵抗の法（方法）、一様ならず、或は文を以てし、或は武を以てし、又、或は金を以てする者あり。今、西郷氏は政府に抗するに武力を用ひたる者にて、余輩の考とは少しく趣を殊にする所あれども、結局、其精神に至ては間然すべきものなし（その精神に至ってはまったく批判する点がひとつとしてない）。然るに、斯かの無気無力なる世の中に於ては、士民共に政府の勢力に屏息して（恐れ縮こまって）事の実（西南戦争と西郷隆盛の関係についての真実）を云はず、世上の流伝するものは悉皆諂妄誕（皆すべて政府に対するこびへつらいと根拠なき妄言）のみにして、嘗て之（西南戦争と西郷隆盛の関係についての『無気無力なる』『諂妄誕』）を咎むる者もなく、之を一世に伝へ、又これを後の一世に伝へ、百年の後には、遂に事の真相を湮没して又踪跡す可らざるに至るや必せり。余（福沢）は西郷氏に一面識の交もなく、又、其人を庇護せんまごかと欲するにも非ずと雖も、特に数日の勞を費して一冊子（『丁丑公論』）を記し、之を公論と名けたるは、人の為に私するに非ず、一国の公平を保護せんが為なり」（同上、207～208頁）。「抵抗の精神」とは、福沢の思想の本質である「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」の、「目見る可らず耳聞く可らず、売買す可らず貸借す可らず」の「無形の一物」あるいは「無形の氣風」「スプリット」（『学問のすゝめ』）の現象形態のひとつである。「文明の虚説」とは、文明論の本質である輸入・移植できない「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」の「無形の氣風」「スプリット」の形成こそが最優先的重要課題でありながら、「目見る」ことも「耳聞く」もできて「唯錢を以て買ふ可し」との「文明の形のみ（有形）」の輸入・移植のみを文明論の本質であるかのように説き勧め、かえって「無形の氣風」「スプリット」の形成のことを「衰頹」させている、「無気無力なる」（「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」の「無形の氣風」「スプリット」の対極にある）現況・風潮のことをいう（本稿1注22参照）。福沢は、「文明の虚説」の内に、本当は「文明の虚説」の対極にある、「一面識の交もな」い西郷の理念が、埋没されていく

ことについての憤りをどうしても抑えがたく『丁丑公論』を執筆したのである。福沢は、決して個人としての西郷を「庇護」するためではなく、西郷の内にある「独立自主」「自由独立」「不羈独立」へと向かうべき「無形の気風」「スプリット」が「抵抗の精神」として、どうして「西南の騒動」という形で発露したのか、それは本当はどういう意味を持つものなのかということをも百年の後世に向けてしっかり証言したかったのである（現在135年経過している）。福沢は、「抵抗の法（方法）、一様ならず、或は文を以てし、或は武を以てし……今、西郷氏は政府に抗するに武力を用ひたる者にて、余輩の考とは少しく趣を殊にする所あれども、結局、其精神に至ては間然すべきものなし」というように、〈西郷と自分は、「武力」と「文」という方法的違いがあっても、「抵抗の精神」という点ではまったく一致している〉ことを強調している。そうして「抵抗の精神」の基盤となっているのは、「独立自主」「自由独立」「不羈独立」の「無形の気風」「スプリット」がそうであるように、高い「道徳品行（德行）」「廉恥節義」を意味する「瘠我慢の説」なのである。『丁丑公論』でいう「一国人民の道徳品行は国を立る所以の大本なり」（同上、211頁）は「瘠我慢の説」では「一片の瘠我慢は立国の大本として之を重んじ」（同上、243頁）となっている。「瘠我慢の説」は、古代アジアの伯夷・叔斉の飢えともく不義の粟を食わず）に果てた説話から、福沢が自らの子孫孫に向けて戒めた「万一不幸にして財に貧なるの憂あるも、文明独立の大義を忘れ、節を屈して心飢るの貧に沈む勿れ」まで、幅広く福沢が様々な形で説くものであり、福沢は、近世では（維新までは）「瘠我慢の説」は「士族に固有する品行の美」という形で武家階級において最高度に維持されていたとする（本稿①）注②参照）。『丁丑公論』で展開された西郷隆盛論は、「論者（西南戦争後の西郷糾弾論）が常に口を極めて西郷を罵ると雖も、未だ曾て佞譎（極めて狡猾なこと）軽薄等の評を下さざるは、即ち彼れ（西郷）が誠実の德行に就て、罅（欠点）の乗ずべきものを見出すこと能はざるの証拠なれば」（同上、211頁）「西郷は立国の大本たる道徳品行の賊にもあらざるなり」（同上、213頁）、「西郷が士族を重んずるは事実疑なしと雖も、唯其気風（士族に固有する品行の美）＝「瘠我慢の説」を愛重するのみにして、封建世祿の旧套（旧態）に恋々たる者に非ず」（同上、213頁）、というように「瘠我慢の説」の偉大な体现者としての西郷隆盛論なのである。福沢の思想からすると、アジア・日本の場合、自己内に固有に蓄積されてきた「瘠我慢の説」を触媒にして、近代西洋ではすでに成熟している、普遍的でコスモポリタンな概念である「独立自主」「自由独立」「不羈独立」の「無形の気風」「スプリット」へ、そこからさらに「文明独立」へと進展することができるのである。さらに福沢は、『丁丑公論』で「西郷は決して自由改進黨を嫌ふに非ず、真実の精神を慕ふ者と云ふべし」（同上、214頁）とさえ評価する。『西郷南州遺訓』（山田濟齋編、岩波文庫、1939年）の「訓遺」によると西郷は、明治3年（1870）頃、次のように語っていた。「人智を開発するとは、愛国忠孝の心を開くなり。国に尽し家に勤むるの道明かならば、百般の事業は從て進歩する可し。或ひは耳目を開発せんとて、電信を懸け、鉄道を敷き、蒸気仕掛けの器械を造立し、人の耳目を聳動（ひどく驚かして動揺させること）すれ共、何に故電信鉄道の無くては叶はぬぞ欠くべからざるものぞと云ふ処に目を注がず、猥りに外

国の盛大を羨み、利害得失を論ぜず、家屋の構造より玩弄物に至る迄、一々外国を仰ぎ、奢侈の風を長じ、財用を浪費せば、国力疲弊し、人心浮薄に流れ、結局日本身代限りの外有る間敷也(8頁ノルビと()内は長谷川)。ここでいう「人の耳目を聳動」させる「電信」「鉄道」「蒸気仕掛けの器械」などは、福沢のいう「唯銭を以て買ふ可し」とする「文明の形のみ」のことであり、西郷が批判する、「耳目を開発せん」として、電信を懸け、鉄道を敷き、蒸気仕掛けの器械を造立することが至上目的化され、あたかも「人智を開発する」ことであるかのように混同される風潮は、福沢も批判する「文明の虚説」である。「人智を開発する」ことの第一義的なものとは、西郷も福沢も「目見る」こと「耳聞く」ができ「耳目を開発せん」とするもの、「唯銭を以て買ふ」ことができる物質的な「文明の形のみ」ではなく、「無形の一物」「無形の気風」「スプリット」「心」に属するものであることでは共通している。しかし、福沢の観点からすると、西郷に対して、<「愛国忠孝の心」をさらに掘り下げていけば、「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」の「気風」「スプリット」の地平へと展開していくはずではないか>との焦燥を感じるに違いない。また、西郷は、次のようにも語っている。「文明とは道の普く行はるゝを賛称せる言にして、宮室の壮(莊)嚴、衣服の美麗、外観の浮華を言ふには非ず。世人の唱ふる所、何が文明やら、何が野蛮やら些とも分らぬぞ。予嘗て或人と議論せしこと有り、(西郷が)西洋は野蛮ぢやと云ひしかば、(或人は)否な文明ぞと争ふ。否な野蛮ぢやと畳みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せしゆゑ、**実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説論して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙昧の国に対する程むごく残忍の事を致し己れを利するは野蛮ぢやと申せしかば、其人口を荅めて言無かりきとて笑はれける**」(8~9頁ノゴシツは長谷川)。「(文明国の)未開蒙昧の国に対する程むごく残忍の事を致し己れを利する」という西郷の謂には、特に1800年代後半における西欧諸国の中国(アヘン戦争など)・インド(ムガル帝国滅亡など)そして幕末期日本などアジア諸国に対する武力をともなう一方的かつ高圧的な(西郷のいう残忍で野蛮な)外交対処を想定しているであろう。この西郷の文明論も福沢の文明論と重なる部分が多い。福沢は『文明論之概略』(明治9年<1876>刊行/富田正文編者代表『福沢論吉選集』第4巻、岩波書店、1981年)で次のように述べている。「西洋諸国を文明と云ふと雖ども、正しく今の世界(明治9年頃の世界)に在てこの名を下す可きのみ。細にこれを論ずれば足らざるもの甚だ多し。戦争は世界無上の禍なれども、西洋諸国、常に戦争を事とせり……況や其外国交際の法(方法)の如きは、権謀術数至らざる所なしと云ふも可なり。……今後数千百年にして、**世界人民の智徳大に進み、太平安樂の極度に至ることあらば、今の西洋諸国の有様を見て、愍然たる(哀れむべき)野蛮の歎を為すこともある可し**。是に由てこれを觀れば、文明に限りなきものにて、今の西洋諸国を以て満足す可きに非ず。西洋諸国の文明は以て満足するに足らず」(22頁)。福沢も西洋諸国を文明国として絶対化してはいない。福沢も、西洋諸国には、西郷が指摘する「むごく残忍の事」「野蛮」な部分に相当する、「足らざるもの甚だ多し」「満足するに足らず」とする欠陥・未熟な部分の存在を十分認識している。西郷の<実に文明というならば、未開の国に対して、「慈愛を本とし、懇々説論して開明に導く」

ことこそ本筋ではないか」という西郷の主張に対して、福沢は、まさしく「間然すべきものなし」、大いに共鳴する他ないであろう。福沢の文明論の本質も「慈愛を本とし、懇々説論して開明に導く」ことに他ならないのである。またこのことに、西郷が庄内藩鶴岡の蘭学者小関三英（1787 天明 7～1839 天保 10）が蘭書から訳したリンデン撰『邦波列翁伝』（早稲田大学図書館蔵）を愛読しナポレオン・ボナパルトを敬愛していたというエピソードを重ねると「西郷は決して自由改進を嫌ふに非ず、真実の精神を慕ふ者と云ふべし」という福沢の謂はますます重みを増してくる。フランス革命（1789～1799）が提起した「自由・平等・博愛」の思想（福沢が大きく影響を受けたあの「天は人の上に人をつくらず人の下に人をつくらずと云へり」との天賦人權論は、くすべての人は平等に造られ、生存・自由そうして幸福の追求をする権利を侵すべからざる権利として、創造主〔天〕から賦与されていることは明白な事実である）ことを表明した 1776 年のアメリカ独立宣言を源流とする。この源流は、14 年後のフランス革命に大きな思想的影響を与え、約 100 年後には、極東アジアの『学問のすゝめ』冒頭の「天は人の上に人をつくらず人の下に人をつくらずと云へり」にまで及ぶを、戦争という手段によってはあるが、防護しそれを世界中に伝播しようとしたフランス革命の英雄としてナポレオンの英名は、幕末期、小関訳『邦波列翁伝』を通して、「邦波列翁」として知識層の間でかなり普及していた。^{アレキサンダー}「歴山王、ナポレオンの功業を察し、ニュートン、アダム・スミスの学識を想像すれば」（『旧藩情』、前掲『福沢論吉選集』第 12 巻、58 頁）というように福沢の著書にもナポレオンは、物理学のニュートンや経済学のアダム・スミスなどと並ぶ政治上の偉大な革新者としてよく列記される。幕末期、特に洋学者である福沢をはじめ石河確太郎や本間郡兵衛らは、小関訳『邦波列翁伝』を通読していたことは間違いない（本間の出身は庄内藩の酒田であり、鶴岡と隣接して小関とは非常に緊密な環境にある）。小関訳『邦波列翁伝』を通読していたことが明確である知識人として注目すべきは、死後尊皇攘夷運動の救世主のように祭りあげられる吉田松陰である（刑死によって松陰は幕末のイエス〈救世主〉のように、松下村塾の門人たちはイエスの十二使徒のように伝説化されていく）。松陰が野山獄中から安政 6 年（1859）4 月 7 日付で北山安世（佐久間象山の甥、長崎からの帰途、萩に立ち寄る）に宛てた書翰に次の箇所がある。「独立不羈三千年來の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。邦波列翁^{ナポレオン}を起してフレーヘッド（自由／オランダ語フレイヘイト *vrijheid*）を唱へねば腹悶^{あはれもしいや}医し難し」（奈良本辰也編『吉田松陰集』『日本の思想』19、筑摩書房、1969 年、395 頁／ルビと（ ）内は長谷川）。この時、半年後の処刑の命運にある松陰は、安政の大獄に呑み込まれて萩野山獄に幽閉、木戸孝允ら松下村塾の門人からも敬遠され、まさに憤悶するしかない絶望的孤絶の状況にあった。「邦波列翁を起してフレーヘッドを唱へねば腹悶^{あはれもしいや}医し難し」とは日本と松陰自身の「独立不羈」と「フレーヘッド」が重なった腹からの叫びといえる。尊攘派が救世主として祭りあげているだけで、松陰自身は、狂信的で頑迷な尊攘主義者では決してない。それとは反対に松陰は、洋学者佐久間象山の門人でもあり、国禁を破りアメリカ渡航視察さえ試みたきわめて開明的な思想家といえる。松陰の専門である兵学は、理学系技術分野に近く、松陰はか

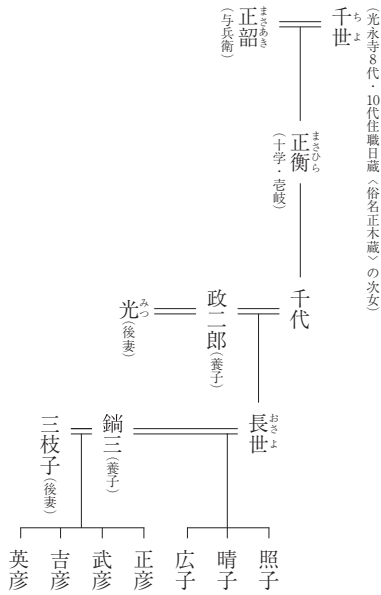
なり客観的に、日本（アジア）に比しての西洋科学の圧倒的進化・優位を認識していて、「全体器械替れば兵制も従って替ること必定の理に御座候へども」（嘉永6年〈1853〉9月10日付玉木文之進宛吉田松陰書翰、前掲『吉田松陰集』、367頁）と、ペリー来航直後に、いっているように、西洋から進んだ技術を導入するならば、それに応じて兵制など組織・システムも、既存のものからより進化したものに替えていかなければならないとの開明性を表している。その上で、松陰の対欧米戦（尊攘派からすれば攘夷戦争）への強い意志は、欧米と日本（アジア）の成り立ちの違和を無視して、一方的に欧米の在り方を日本（アジア）に圧倒的武力の優位を背景に理不尽に一方的に強制することの〈不義〉に対する選択の余地のない「抵抗の精神」を根拠としているのである。それは西郷のいう「実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙昧の国に対する程むごく残忍の事を致し己れを利するは野蛮ぢや」に通底するものがある。晩年の松陰が達した「草莽崛起^{そうもうくつき}」の思想（一切の既存の権威に依存しないで自立して運動する思想）は、「独立不羈」「フリーヘッド」（自由）という点では、福沢の「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」の思想とかなり重なるものがある。福沢の観点からすると、孟子思想を真っ直ぐに咀嚼しようとする松陰の性善説的思想は、「瘠我慢の説」の高い倫理性を持ち、西郷の場合と同様に、く吉田松陰は決して自由改進黨を嫌ふに非ず、真実の精神を慕ふ者と云ふべし」と評価すべき対象となってもよいであろう。このように、西郷が福沢のそれと通底する堂々の文明観を持ち、「決して自由改進黨を嫌ふに非ず、真実の精神を慕ふ者と云ふべし」と評価すべき存在であることの福沢の確信の根拠は揺るぎないものであったのである。福沢の文明論が西郷の文明論と大きく違うのは、福沢の場合は、「文明に限りなきもにて」というように、空間（場所）を超えた時間概念の入っている文明論であるということである。この文明論には、当時西洋で普及していた、「理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である」（ヘーゲル『法の哲学』序文、藤野渉・赤澤正敏訳、『世界の名著』35、中央公論社、169頁）とするヘーゲルの、世界史を世界精神・理性・自由概念の無限の自己展開（自由が自己をより深く広く普遍的に外化・実現していく無限の弁証法的展開）としてとらえる歴史観・進歩史観からの浸潤もある。1806年（文化3）10月、『精神現象論』脱稿直後のヘーゲルは、自分と同世代（ヘーゲル36歳・ナポレオン37歳）の馬上の皇帝・ナポレオンと至近距離で遭遇したことの深い感動を次のように記している。「皇帝、この世界精神が町（イエナ）を通り、馬を進めで陣地偵察にいくのを、僕は見ました。ここの一地点に集中してありながら馬にまたがり、しかも世界を圧倒し支配する個人を見るというのは、何ともいいようのない実に不思議な気持のするものです」（1806年10月13日付ニートハンマー宛ヘーゲル書翰／前掲『世界の名著』35の岩崎武雄「ヘーゲルの生涯と思想」中で用いたものを基に私訳）。ヘーゲルの「実に不思議な気持」とする深い感動は、ヘーゲル哲学のいう、不可視的な世界精神・理性・自由概念が、ナポレオンという同世代の可視的な個的身体として外化して馬に乗り、自分のすぐ目の前を現実的に動いていくということを目の当たりにしたという衝撃にあった。ヘーゲルの見ているものは、くナポレオン個人であって同時にナポレオン

個人ではない) (英雄ナポレオンが歴史を作るのではなく、逆に世界精神・理性・自由概念の歴史段階・時代意志・構造が個人ナポレオンに英雄的役割を負わせるという脱英雄史観) という「何ともいいようのない実に不思議な気持」をヘーゲルに惹起させたのである。そうして、自由概念の自己展開に基づくヘーゲルの無限の進歩史観もナポレオンの旧支配秩序(アンシャン・レジーム)を壊していく活動とともに通俗性をともないながら世界に流布していくことになるのである。約半世紀後の極東アジアで西郷や松陰や福沢(おそらくは石河確太郎や本間郡兵衛も)は、小関訳『邦波列翁伝』を通してヘーゲルが受けた感動の一端のいくつかのバリエーションや無限の進歩史観に接触したのである。福沢の文明論では、世界史の現段階で文明を最大に実現している場所は、空間としての西洋であるだけであって、空間としての西洋を絶対化してはいなく、「今後数千百年にして、世界人民の智徳大に進み、太平安楽の極度に至ることあらば、今の西洋諸国の有様を見て」という時間概念からすると、「悠然たる(哀れむべき)野蛮の歎を為すこともある可し」と現在の西洋はすっかり相対化されてしまうのである。福沢の文明論での「世界人民の智徳」(ヘーゲル哲学の世界精神に比することができる)の発展という普遍的な時間概念からすれば、空間としてのアジアもやがては西洋が達した段階を通過するしかない(通過しなければならぬ)のである。この福沢と西郷の相違点について、福沢は、「西郷の罪は不学^{ひつと}に在りと云はざるを得ず」(『丁丑公論』、前掲『福沢論吉選集』第12巻、231頁)、「嗚呼、西郷をして少しく学問の思想を抱かしめ、社会進歩の大勢を解して、其力を地方の一端に用ひ、政権をば^{おさつか}政府に帰して其行政に便利を与へ、^{ひと}特り地方の治権を取て、之を地方の人民に分与し、深く腕力^{おさ}を蔵めて引て放たず、剣戟^{はこま}の鋒を变じて議論の鋒と為し、文を修め智を磨き、工を勤め業を励まし、隠然たる独立の勢力を養生して、他の魁^{きゐ}を為し、^{しか}而る後に、彼民選議院をも設け、立憲政体をも作り、以て全日本の面目を一新するの大目的を定めしめなば、天下未曾聞の美事と称す可きなり」(同上、229~230頁)と慨嘆する。福沢の文明論では、「瘠我慢の説」は、「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」の「気風」「スプリット」からさらに西洋が現在のところ最高度に達した「文明の大義」へと展開していくための触媒となる重要な存在で、「瘠我慢の説」が欠如したところからは、成熟した「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」の「気風」「スプリット」も生まれることもなく、「文明の大義」へもちろん達成することがない。しかし、「瘠我慢の説」に止どまるだけであれば、個人の倫理を超えて、社会の文明レベルへと展開することもないのである(本稿注①参照)。「文明の大義」へと至るためには、「瘠我慢の説」を触媒にして貪欲に「学問の思想を抱かしめ、社会進歩の大勢を解して」いかなければならないとするのである。しかし、「学問の思想を抱かしめ、社会進歩の大勢を解して」いけば、西郷(松陰も)は果たして、「彼民選議院をも設け、立憲政体をも作り、以て全日本の面目を一新するの大目的を定めしめなば」という福沢同様の自由民権論に改悛していくのであろうか。おそらくは必ずしもそうはならないであろう。それぞれ一見すると対立するような容貌のある外皮を剥がして時代の共通項としての理念や思想(「瘠我慢の説」や「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」など)を剔出する福沢の視点と手腕は実に見事で精確であるが、それぞれの理念

や思想が、共通項を持ちながらも、いなる現実の制度や社会を志向するかはまた別の問題である。その上で、いえることは、福沢の文明論を通して注目すべきことは、維新後のいわゆる自由民権論は、維新後忽然と現象したものではないということである。幕末期、開国派と攘夷派という外皮に関係なく、「独立自尊」「自由独立」「不羈独立」に対する希求がすでにかなり普遍的に存在していたことである。つまり明治維新には、「王政復古」というアジア的な古色蒼然たる表向きのスローガンの裏側に、「邦波列翁」に象徴的に集約されているような「独立不羈」「フレーヘッド」(自由)という西洋的な斬新進取のスローガン(因循姑息打破のスローガン)が潜在し付着していたことである。したがって、維新後、攘夷派であったはずの改革派層(特に武家層)からも実にスムーズに広範に自由民権運動が出現した。実は、かつて福沢暗殺を執拗に試みた激烈な尊攘派のあの増田宋太郎は、その後、自由民権運動に投じていくのである。増田は、中津共憂社を結成、明治9年(1876)には、何と一時は福沢の慶應義塾に入学し、自由民権・主権在民を唱える『田舎新聞』(村上田長創刊)の編集長を勤めともいわれる(尊攘派増田の転向の経緯は、かつての暗殺・憎悪の対象であった福沢論吉と急接近する点で、朝吹英二の転向の経緯〈本稿注(41)参照〉と軌跡が重なるところがある)。そうして増田は、翌年の西南戦争に際して、中津隊隊長として西郷軍に参加し29歳で戦死する(中津市留守居町の福沢論吉旧居に隣接する増田の生誕地跡〈弓町〉には「西南役中津隊長 増田宋太郎先生生誕之地」と銘された石碑が建っている)。増田の維新後の短い経緯は、「西郷は決して自由改進黨を嫌ふに非ず、真実の精神を慕ふ者と云ふべし」との福沢の西郷評価を裏づけてもいる。西郷隆盛らによる西南戦争は、自由民権運動のひとつの帰結でもあったのである。そうして、自由民権運動とは双子関係にある会社創設運動(長谷川洋史「寺島宗則(松木弘安)の『コムパニー』概念について—解放思想としての会社概念—」〈日本経済思想史研究会『日本経済思想史研究』第4号、2004年〉参照)も、各層を超えて広範に現出することになったのである。『丁丑公論』は、「西郷は天下の人物なり。……日本は一日の日本に非ず、国法は万代の国法に非ず。他日この人物(西郷)を用るの時ある可きなり。是亦惜しむ可し」(同上、236頁)と結んでいる。

- (47) 廃藩置県直後に二人の元知藩事、伊達宗敦・昌邁兄弟が同時に欧米に留学していることは偶然であろうか。福沢論吉と宗敦及び仙台藩の関係からしても、宗敦留学についても何らかの福沢の影響があったように思える。

中金家系図



※鼎談(中金武彦・河北展生・長谷山彰)「福沢諭吉と奥平壹岐」
 (『三田評論』第939号、慶應義塾、1992年)に掲載された「中
 金家系図」(83頁)に、本稿用にアレンジを施したものである。